

全国同人雑誌最優秀賞 第14回 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第一四回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二〇年七月二六日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から率直鋭利な批評が発せられ、熱い議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただきます。特別賞また河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、中上紀賞・五十嵐勉賞には賞状・賞金六万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と記念品を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加くださることを期待しております。推薦する優れた作品がございましたら、全国同人雑誌振興会宛てに推薦状と掲載同人誌二部をお送りいただけましたら幸いです。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の支持を切に願います。次第です。

この結果、および選考委員の感想批評動画、また優秀作はインターネットでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。



第14回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「妙子」

〔遠近〕72号

小松原 蘭

「当麻曼茶羅」

〔たまゆら〕114号

桑山 靖子

特別賞

「火鈴」

〔木木〕32号

木山 葉子

中上紀賞・五十嵐勉賞

「川靄」

〔北方文学〕79号

柳沢 さとうび

河林満賞

「睡蓮」

〔弦〕106号

長沼 宏之

読者賞

「雨宿り」

〔八月の群れ〕69号

葉山 ほずみ

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学名誉教授

どれもレベルが高い僅差

三田誠広

今回は精神的な病に追い詰められた人など切迫した状況に置かれた人物を描いた作品が多かった。世界的な疫病の流行はべつにしても、長く続く経済停滞で、人々が生きづらい社会になりつつあるのではという危惧を覚えた。

桑山靖子「当麻曼茶羅」は死産のあとで精神のバランスを失った女性の話だが、当麻寺の曼茶羅（正確に言うところ阿彌陀如来の浄土変相図なので曼陀羅と表記すべきだろう）

れ者の料理人という主人公の設定もやや通俗に傾いているのだが、密度の高い文章が作品を支えている。菅原文太みたいな陰のある男が、風鈴の音に怯えるさまが一種のミステリーとなっていて、考えぬかれたプロットではあるのだが、少し話を作りすぎているという気がしないでもない。それでもレベルの高い文体で最後まで書き切った作者の作家としての力量を評価したい。

長沼宏之「睡蓮」も精神の病を負った男女の哀しい物語だ。主人公の男の設定はある意味で平凡ではあるのだが、深い陰を背負った女のキャラクターが秀逸で、この女に対する男の優しさが心温まる感動をもたらす。惜しむらくは主人公が描く睡蓮の花というプロットが、文学的な感動をもたらすところまでは到っていない。また女の生い立ちについても十分に描かれていないので、全体が淡いメルヘンと感じられる。しかしこの淡いメルヘンという感じが作品の魅力でもある。あとあとまで心に残る佳品だといっているだろう。

柳沢さうび「川霧」は不思議な魅力をもった作品だ。三人称ではあるがヒロインの主観で描かれた描写はあまりにも淡く、描かれた世界の実在感が読み手に届かない。もどかしい思いで途中まで読み進んだ時に、この作品が意図的に対象となっている世界の存在感を封印した幻想小説だということがわかってくる。赤子をかかえたヒロインの状況

と折口信夫の「死者の書」に救いを求める経緯が幻想的な筆致で綴られている。引用に頼っているところが多いのは瑕^{かきん}と見えなくもないが、困難な状況を設定するだけでなく、ヒロインが少しずつ回復していく過程が読者にも確実に伝わってくる点が評価された。観念的になりがちな試みだが、現実と幻想を織り交ぜた構成が微妙なバランスをとっている。こういう作品に挑戦したチャレンジ精神に声援を送りたい。なお作品の評価とは関係がないが、ヒロインが当麻寺に行くのに難波発の電車に乗るのは間違い。天王寺からの近鉄南大阪線に乗らないといけない。

小松原蘭「妙子」は苦しい状況に置かれた姉妹の姿を丹念に描いた作品。個人を守る砦であるはずの家庭というのが、現代社会ではすでに崩壊している。ここに描かれた家族も同様ではあるが、ヒロインの姉が異兄妹に感じる切実な思いには、作者の前向きな人間観が見てとれる。作品の最後は「私らは幸せにならなきゃあかんのや」というヒロインの叫びで締めくくられているのだが、叫んだだけでは問題の解決にならない。作者もそのことはわかっている。このエンディングを描いたのだろう。どうしようもない奈落に落ち込んだ人物の救いのない「叫び」を描くのも、文学の重要な使命だと思われる。

木山葉子「火鈴」は重厚な純文学ふうの文体が魅力だが、扱われている状況設定は古風な中間小説と感ぜられる。流もおとぎ話のような設定だし、女に寄り添っている男は伝説上の妖怪のようにも感じられる。この種の作品は説明しすぎるとつまらなくなり、描き足りないといわなければならないのだが、そのあいまを貫き通して成功した作品だと評価できる。

葉山ほずみ「雨宿り」は遠い親戚の男子を養育することになった中年の独身女性の話で、このやや気の強い女性のキャラクターがなかなかおもしろい。家族の確執というのは今日的なテーマだが、この作品では強い血の絆があるわけでもないヒロインと養い子の微妙な関係がテンポよく語られ、爽やかな読後感を残すリーダブルな作品になっている。よくまとまった作品だとは思うのだが、話がうまく行きすぎていて、最終候補に残った他の作品と比べるとインパクトがうすく感じられてしまった。

いずれにしても今回の候補作はどれもレベルが高く、評価も僅差であったが、「当麻曼茶羅」の果敢なチャレンジ精神と、「妙子」のエンディングのインパクトが、わずかに擡^{たか}んでいて思う。





こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

今回も傑作ぞろい

小浜清志

今回も傑作ぞろいで、選考会場に向かいながら、どれを推すべきかと悩みつつ久しぶりの外出に戸惑っていた。おおよそ二か月自宅の周りを散歩する以外はずっと部屋に引きこもっていたので、マスク姿の人たちとすれ違う度に場違いな所に来てしまったような感覚に陥っていた。五月までは仕事をしていたのだが、この二か月ですっかり世の中が変容してしまい、石垣島から上京した時のような緊張を抱いた。

それは選考のときも同じで、自分の読み方は誤っていないかという緊張が付きまとった。しかし、作品を前にすると作者の息づかいまでが伝わってくるようで、いつしか心

地よい緊張に変わっていた。

「睡蓮」長沼宏之

この作品は緊張に満ちた内容で時に息苦しさを覚えるほどの濃密さがある。尾方耕治のパニック障害から牧野麻子との結婚生活を描いているが、不安神経症を抱えている二人のやり取りには迫真性があり、読み手を力強く引きずっていく魅力がある。この二人の前途に平穏で幸せな日々が待っているはずはないのだが、結婚五年にして麻子が妊娠する。新しい展開にもつれ込んでいくのかと思いきや首にへその緒が巻きつくという死産で麻子の変化がはじまる。

それは不正出血から性交拒否になり子宮がんへと進み卵巣摘出でホルモンバランスが崩れ、夫婦関係もこじれるようになり、意志の疎通さえ危うくなる。しかし、作家の目はどこまでも温かく麻子に注がれる。そして、わずかな希望を残しながら旅先で二人は互いの絆を確かめる。大抵このような小説は救いのないもので地獄の炎に焼き尽くされるのであるが、作者はそうならないようにしっかりと手綱を握りしめ、生き抜こうという姿勢をくずさないところに好感を持った。

「川霧」柳沢さうび

霧のかかった小説である。男女のまぐわいの記憶すらないのに子供を産んでしまう美寿は祖父に子供の父親を聞かれても答えようがない。祖母の用意してくれた家に移り住

みなんとか暮らしの真似事ができるようになるまでの事はあまり覚えていない、と突き放される。どのように生計を立てているのかも読み手には知らされないが、霧は深まりカワセなる人らしきものが現れる。子供の面倒をみてくれるには医師らしい手当もしてくれ、いつの間にか二人は男と女の関係になる。だが、またもや霧である。男はほとんど夜しか訪れないから顔の表情や輪郭すら判らない。カワセは冷たい感触しかなく指先といい口といい、美寿の中に入ってくるものまでがひんやりしていた。子供の入院で朝

早めに病院にでかけカワセらしき人物と遭遇するがカワセは部屋を飛び出したまま会えない。霧のなかで行われていくことは幻想なのか、それとも、まったく新しい試みなのか、確かな筆致に惑わされることも小説を読むたのしみである。

「妙子」小松原蘭

重くて深いテーマを扱った作品である。私はこの小説を当選作にしたいと思つて選考会に臨んだ。種違いの妹の妙子をめぐる物語である。主人公の茉莉子は誰にも好かれようと相手の顔色を窺って生きてきたのに比べ、妙子は自分の気持ちを中心にせず性格である。村の金を持ち逃げした妙子の父親を母は許さない。それもあり母は妙子にも辛く当たる。歪められた幼少期を抱えたままの妙子は社会的に乏しいまま姉を追う形で上京する。バイト先で知り合い同

棲を始めた妙子と東野であるが、妙子が暴れて手が付けられないとの電話で呼び出され精神科の病院に入院するところからこの小説は始まる。精神病棟の鉄格子は刑務所と変わらない冷たさを持ち精神の狂いは社会から排除される危険をはらんでる。そのような妙子とどう向き合っていくのかと悩む茉莉子にも幼い頃の贖罪がある。妙子の父に村の金の在り処を教えたのだった。

一旦は妙子との関係を清算したはずの東野がふたたび一緒に住み始めるのだが、結果は同じことの繰り返しになる。東野が妙子の荷物に入ったバックを置いて消える。作者の強靱なまでの登場人物との距離のとり方にすがすがしさを覚えた。続編を読みたいが、もう一度このような葛藤に作者が向き合えるだろうか。

「雨宿り」葉山ほずみ

爽やかな作品である。とかく物書きは針小棒大に捉えたり、常に斜に構えたりしがちであるが、この作品は素直な心が滲み出ていて清潔である。ある意味不衛生であることが純文学の基底部になっている部分もあるが、性善説もあるわけだから、こんな小説に出会うとゆっくりと音楽でも聞きたい気分になってくれる。作者の温かさは作品の香りだと思ふ。だが、小説である限り工夫は必要で、素直で礼儀正しい好青年の清高にも翳はあるわけだから、それに少しでも触れればもつと味が出て、より芳ばしいものになっ

たのではないだろうか。

「火鈴」 木山葉子

練達な文章である。風景を巧みにとらえたり、世捨て人の心証を鮮やかに見せつけるなど、女性がここまで男を描ききれるのかと驚いた。腕のいい板前は包丁一本で社会を泳いで行ける。だが根元恭司は料理長をしていた名門旅館の汚職事件から逃げるとき、良妻のゆき子を捨て真美という女を連れていく。そこから男の寂寥と虚無がつきまとう。それは、風鈴の幻聴となって現れる。男と女の結びつきは色々あるだろうが、どうしても避けて通れないものがない性ではないだろうか。妻のゆき子は控えめで希薄な存在だったとの表現が性の淡白さを表しているのかも知れないが真美という女の性に対する貪欲さをどこかで描いていれば対比がはつきりとしたことだろう。しかし、全編に流れる哀調が最後に反転するという仕掛けは作者のやさしさであろう。

「当麻曼茶羅」 桑山靖子

奈津子は七か月の早産で子供を産むが、三日後に亡くなっていたことを後日夫から聞かされる。二週間後に退院をするものの、心療内科を勧められるほど精神を病んでいて、夫のいるマンションに戻る気にはなれず、母親の住む田舎で療養することになる。ある日、テレビで当麻曼茶羅を紹介する番組を見て興味を持ち、遂には電車を乗り継い



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早大文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット芸芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

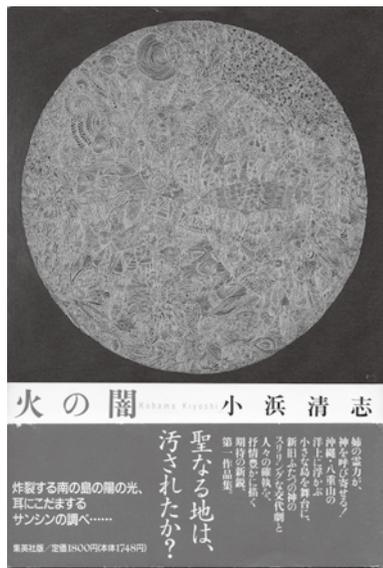
充実した作品が揃う

五十嵐勉

第一四回のまほろば賞もレベルの高い作品が揃った。今回は特に各作品の個性が際立ち、どれが受賞してもおかしくない力作ぞろいだった。それぞれがどう評価されるか、各選考委員の批評を聞いてみたい、そんな楽しみを抱いて選考会に臨んだ。

選考はまず一つ一つの作品について選考委員全員の感想と批評をもらい、一回りしたところでさらに詳しく討議し、細部の議論を重ねる。出尽くしたところで、次の作品に移る。六作品がすべて討議されるのに、三時間ほどを要する。その段階で昨年のように決定的になる場合もあるが、今年の場合はそこまででは、各選考委員がどれを推しているの

でその当麻寺を訪問する。中将姫が一夜にして曼茶羅を織ったことを知る。そこから折口信夫の著書に巡り合い「死者の書」から卒論のときの回顧にとび、村の護摩焚きや地藏の由来と濃密な精神世界に入り込んでいく。人間は人知を超えるものを誰でも理解していると思う。ただ、そのアプローチの仕方にはいろいろあるだろうが、奈津子は曼茶羅と中将姫の間にあるだろう神秘に迫ろうとする。それは信仰の入口であり人間が聖なるものに近づこうとする挑戦にも思え、志しの高さを感じた。精神世界を文学の領域にまで持ち上げようという試みに敬服した。ただ、自分の世界に入り込みすぎて周りのことをないがしろにしていることが気になった。



「火の闇」 小浜清志 集英社

か、どの作品を最も評価しているのか、まったくわからなかった。批判しても支持が高い作品があったからである。小休憩の後、採点投票に入る。五点満点で各作品についての評価を記入してもらい、それを集計する。結果は二つに割れた。一つは小松原蘭氏の「妙子」であり、もう一つは桑山靖子氏の「当麻曼茶羅」である。また僅差で木山葉子氏の「火鈴」が続き、さらにあとの三作もかなり高い点で並んでいた。

普通は並んだ場合、決選投票か決選採決をするのだが、どちらも高い評価を得ていたので、そのまま二作をまほろば賞に推挙するという自然な合意が生まれ、また「火鈴」も特別賞に、という流れになった。さらに中上紀選考委員が柳沢さうび氏の「川霧」を強く支持し、私もその描写力が高く買っていたので、中上紀賞と五十嵐勉賞を贈ることになり、小浜清志選考委員が長沼宏之氏の「睡蓮」を強く支持して、それに河林満賞が贈られた。また読者から熱烈な支持を得ていた葉山ほずみ氏の「雨宿り」が読者賞となった。

今回充実した作品が並んだので、このような結果になったことに、安堵した。

まほろば賞の「妙子」は、妹が精神的に破綻し、その生い立ちを辿り紡ぎながら、家の崩壊と母親の苦難の狭間で犠牲になる人間の足掻きが、鋭い刃として迫ってくる、そ

の緊迫性が特に優れており、救いを求めて、絶望的な状況の中にも、一步を踏み出そうとする結末が胸を抉ってきた。こういう題材を扱うのは、書く方も相当苦しいはずだが、あえて書き切ったところに賞賛に値するものがある。人間を見つめる眼をさらに深めて、書き続けていってほしい。

同じくまほろば賞の「当麻曼荼羅」は、読み進めるのに難渋するところづくしい作品である。それにもかかわらず、死産で失われた命の行方を求める痛切な力に魅かれて、魂の旅を続けるその純粋な糸の希求性は、吸引力があり、いろいろな世界を開示しつつ、自然界の命の相に辿り着く結末まで読みごたえがある。当麻曼荼羅を編んだ中将姫を掘り起こしながら折口信夫の「死者の書」の世界を呼び起こし、さらに地藏信仰の底に横たわる自然界の命の相に覚醒する過程は、大きなものに抱かれるこの世の真相を照らし出して、目を見開かせてくれる。この世に「生まれる」ということの意味を投げかけてくる点で、文学にしか味わえないものを屹立した達成は否定できない。まほろば賞に値すると思った。

特別賞の「火鈴」は、転落していく料理人の心理が彫琢美しい文章で奏でられていて、この文章の力は酔いを感じさせるほどの流れで、文学の魅力に富んでいる。落ち流れていく包丁一本の料理人と不倫の肉欲の傾斜が人生の一つの相を明確に捉えていて、それを追ってくる正妻の情念と

読者賞の「雨宿り」は、六作の中で唯一明るさを備えた作品で、肯定的な力が、生きる方向を強く示して、救われるカタルシスを味わわせてくれた。その明るさゆえに影が希薄である点で損もした印象はあるが、逆にこういう真正面からぶつかる姿勢の明るさに強く魅せられる読者も少なくないと思う。肯定する力は人間全体に及んでいて、その太い筆致が明快で輪郭のはっきりした人物描写を生んでいる。人間がくつきりと動いていて、その力強さが未来を呼び寄せ、協和させる。読後に快い世界が立ち上がってくる。この肯定する力を大事にしたい。勇気に繋がる肯定力は、文学の一つの重要な足だからである。

たまたま、まほろば賞選考会の直後に、作家集団「塊」の読書会があり、ドストエフスキーの「死の家の記録」とカミュの「ペスト」に加えて、最新の芥川賞受賞作二作を併せ読んだ。世界作家の二作については言及をここでは避けるが、芥川賞作品二作については、あまりにお粗末で、まほろば賞優秀作のどれにも及ばないと確認したことを付け加えておきたい。文章力、構成力、人物、テーマと、どれをとっても六作のほうがレベルが高い。同人誌の優れた作品は、現在の芥川賞の質を超えている。自信を持っている。全国に広く行き渡ってたくさんの人に読まれる装置に欠けているだけで、質は上である。「芥川賞」というお飾りによって虚名が横行し、ますます読んだ人がっかりさ

も言える貝殻風鈴の音が男と女の呼び合う深い力の錯綜を重奏させて奥行きを造っている。この文章はいつまでもコクとして残るような魅力がある。特別賞にふさわしい作品である。女性である作者が男性の心理を奥深く描ける点も評価された。

文章の魅力は「川鶯」柳沢さうび氏も一流の力を示している。状況と命とを繋げて開き示される世界の呈示力は並々ならぬ描写の才能を感じる。ただ、現在のところ、これが発揮されるのは、異界と日常との接点にあり、そのきわどさを自覚して、描写の輝力は綱渡りのアンバランス性の上にこそあることを自覚する必要がある。その立脚点をしっかりと認識して、そのうえに卓越した描写力を構築していくことが発展の鍵であろう。「さうび」という名前の中にすでにそれが含まれていることを確認してもらいたい。

河林満賞の「睡蓮」は精神を病む者同士の愛情の支え合いが、深い共感を得て、運命を受け止めつつ二人して前へ進もうとする結末は感動を呼ぶ。男女の結びつきと病という運命の受け入れに前進の力を得るところに、何かを担いながらなお深まる人間の姿がある。それが輝きを放っていた。ただ、狂気の実相は、これを描くのは苦しいだろうけれども、もう少し迫って出してもよかったかもしれない。それがあれば、この世界はもっと深まり、切実な結晶体を現出しただろうと惜しまれる。

せ、不信任感を募らせて、純文学から離れていく悪循環を拡大しているのが現在の出版界である。同人雑誌作家諸氏は、自身の創作行為を大事にし、虚名に踊らされることなく、真の文学を紡いでいてほしい。

偶然、今回の同人雑誌紹介で「文芸復興」の過去について記された部分に重要な言葉があった。平野謙の「一種の執念みたいなものから……（同人誌を）出している」という批評に対し、『文芸復興』の上野壯夫氏は「売りものにならない小説や詩を書く者がいなければ、強力なマス・コミ商業政策の中で、文学はだんだん衰え、末枯れてしまうだろう」と反論した。現在の芥川賞を読み、文芸界の衰勢を見るとき、その通りになっていることを痛感すると同時に、文芸創作の営為は、もっと直截に人間を見ることにあり、それをこそ大事にしていかなければならない意志がここに暗示されている、と姿勢を新たにさせてほしい。

選考会が終わって一同立ち上がったとき、中上選考委員が窓の外を見て、「虹が」と声を上げた。見ると、梅雨の晴れ間の空に、珍しくきれいな七色の弧がかかっていた。心洗われる思いで、それをこれからの同人誌の吉兆に重ねた。





なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花」ミヤンマ
ーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のプレнка」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語に
なるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中
上健次と熊野—」(河出書房新社)「ア
ジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌
う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」
(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天
狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

異質さと愛を描く筆の力

中上紀

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

もつとも、一つの作品以外のすべてに何らかの形で「病院」のモチーフが出てきたのは、偶然以外の何物でもない。それでも、興味深い事実と捉えざるを得なかった。それは、ほぼすべての作品において、何らかの「異質さ」そして「狂気」が扱われていることと、通じるかもしれない。病院は、健康（正常）な者と、不健康（異質）な者との境界に存在している。まるで、数カ月前から人と人との間に無慈悲に隔てるようになった透明な板のように。その、こちら側と向こう側との境界から生じた「愛」が、全作品を通じて書かれている気がしたのである。

長浜宏之氏の「睡蓮」は、精神の病に苦しむ男女を描いている。モノの絵への憧れを背景に、二人は互いを支え寄り添い合う。ただ、彼女は親と絶縁しており、主人公の両親とも顔を合わせない。息子を心配する両親に結婚を反対されているという状況と、単なる傷のなめ合いではない切実さと孤独の中、結婚生活は肅々と営まれていく。自らも心の病を抱えながらも、死産、子宮がんの手術、更年期障害などの肉体的試練に襲われる妻を根気よく支える主人公だったが、二人が住まう団地で草花を育てている老婆が、象徴的に投入される。老婆は、雑草を目の敵にするから戦いになるのだと言い、雑草を植えている。老婆の言葉のフィルターを通すと、雑草は「病」という言葉のように読者の耳に響くだろう。だが、老婆はいつの間にかいなく

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

「まほろば賞」の選考会は、ここ数年、夏の時期に行われることが多い。今年は長雨が続いた七月の終わりの開催で、蒸し風呂のような暑さの中、マスクをして選考会場に向かった。外出すること自体が、久しぶりだった。だが、ほとんど一年ぶりに三田誠広先生、小浜清志先生、五十嵐勉先生のお顔を拝見して、ほっとした気持ちになった。候補になった六作品が書かれた時期には、まさかこのような疫病による危機に世界中が見舞われるとは、誰も思っていなかっただろう。

ある必要はない。むしろ、彼の境遇から十分予想されるのは影だ。彼が薄汚れ、ひねくれた青年だったとしても驚かないだろう。また、主人公は薬剤師として両親から受け継いだ薬局を運営しているが、なかなか一般の人間が知るこの出来ない業界の裏側の苦労が描かれている。作品の流れに直接影響は与えないまでも、二人の生活を支える現実的な土台となっており、大いに読みごたえがあった。

「火鈴」は木山葉子氏の作品である。旅館を転々とする料理人の男の生活がひとえに面白く、ページを捲る手が止まらない。その「流れ者感」は、何の責任も取らず、ただ風の向くまま気の向くまま生きたい、という現代人の欲望にロクオンする。そこに、生き物が身をくねらせこちらに向かってくるような、と言った、まるで魔物か何かのごとき風鈴の描写が重なる。書き手は女性であるが、だからこそ言うべきか、主人公の男目線で語られる、愛人との逃避行への心理や、どこまでも追いかけてくる風鈴の音、すなわち妻への恐怖感が、ねっとり絡みつくようだ。

桑山靖子氏の「当麻曼茶羅」は、赤ん坊を失った主人公が曼茶羅を見つめることによって立ち直っていく話であるが、折口信夫の『死者の書』が所要所に投入される。死者の書を読むことが彼女にとっての「魂ごひ」であった。虫の赤ちゃんを大切に育てる夢のことを、カウンセラーに対して口にするので、思いが形になっていくことへの彼

女の驚きの過程が感動的であった。自分を救うのは医者でも宗教でもなく、自分自身なのだということが、読み手の心に響いてくると思った。

妻の気配に翻弄される流れ者を描いた「火鈴」、儂く危ういが確固たる愛である「睡蓮」、向き合い共に生きる「妙子」の姉妹、「川霧」のあいまいな異形、「雨宿り」の共に過ごした大切な時間、「当麻曼茶羅」のもう一度生きるという決心。読み返せば読み返すほど、深く考えさせられる作品たちに今年も出会えたと思うのは、書き手それぞれが高いレベルで振るった筆の力のおかげにほかならない。



中上紀／共著



まほろば賞選考会風景 2020.7.26 大田区民プラザ会議室で

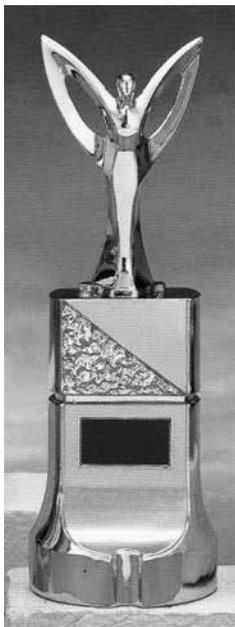
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金五万円が授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



「雨宿り」 葉山ほずみ

読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は次ページのよう結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

各作品寸評

●「睡蓮」について。巧い筆致の滑らかな文章は秀逸である。主人公たちに降り掛かる厳しい現実にもかかわらず、互いに生を抱きしめ合う覚悟のストーリーは、読者に静かな感動を与える。 木内是壽

●いずれも巧みな文体と描写に感心した。選ばれただけの作品であった。しかし小説は読み物であって、人の苦しみを共感させる題材が続くと疲れた。死と生に斬り込むために主人公の不幸な境遇を背景とする題材には抵抗感がある。最も小説らしいのが「火鈴」で、別の作品も読んでみたくなった。 吉田満春

●「妙子」は息づまる緊張感がある。妹の精神の病と向かい合って乗り越えようとする最後は悲壮だが、はたしてほんとうに乗り越えられるのだろうか。続編を読んでもいい。こういう作品を続けて書くのは苦しいだろうが、がんばってほしい。

●「川霧」は、普通のリアリズムでは推し量れない作品で、異なった世界との交錯から生まれる感覚が素晴らしい。普通のリアリズムはこの作者には向かないだろう。この描写が生きているのは、こういう世界だからであって、現実を土台とすると、文章が死ぬだろう。異才ではあるが、きわどさもある。 志村裕一

●「雨宿り」は、主人公の女性のスカットした性格が魅力。また少年の性格も奥ゆかしくて、居候の自分を自覚しながら、育みと期待に添えていくところがとてもいいです。人間はこのように寄り添い合い、支え合いながら成長し、ふくらんでいくものであることが、よくわかります。読後感がさわやかです。これからもこういうものを書いて欲しいです。 渡邊正樹

●「当麻曼荼羅」は登場する他の人はほとんど人格がなく、主人公の内面だけが流れていく筋立てで、はじめは読みにくかったです。けれどもだんだん引き込まれていくと、奥の深い世界に連れて行かれます。最後は命が生まれてくる根の世界に覚醒していく気がしました。その浄化感がすばらしく、読んでよかったという気持ちになりました。命を生むということの意味も、尊さも、深く教えられました。 本田悦彦

第13回 まほろば賞 読者賞 投票集計

作品名 投票者	当麻曼荼羅	火鈴	雨宿り	妙子	川霧	睡蓮
吉田満春		10				
飯田美和			50			
木戸順子						20
木内是壽						50
長沼宏之					10	
難波田節子				20		
江間 徹				30		
外山寛子			20			
山口なつみ				20		
渡辺政子						10
市川しのぶ						100
白井 康						30
山田 實						50
玉置輔則			20			
渡邊正樹			150			
渡邊恵里			100			
山本雅治	20					
志村裕一					100	
本村喜一		30				
本田悦彦	30					
中村賢三						50
計	50	40	340	70	110	310

まほろば賞は、5年前から読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額107000円を得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。おかげさまでお寄せ下さる方も増えて参りました。これが大きく発展し、多数の方が参加して下さいることを期待しております。

全国同人雑誌振興会

まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。どうか皆様の御支援・御協力をお願い申し上げます。

まほろば賞 受賞の言葉 小松原 蘭

去年の秋に第三回全国同人雑誌会議に参加させていただき、まほろば賞の授賞式を拝見しました。私には遠い世界だと感じました。その賞をまさか今年、自分がいただけるとは夢にも思っていませんでしたので、大変に嬉しく思います。選考委員の先生方に深く感謝いたします。

私は若い頃に同人誌で学んできましたが、家庭の事情でいったん中断し、長らく書くことから遠ざかっていました。なので「遠近」に復帰させていただいた時は何をどう書けばいいのかかなり苦労しました。同人の皆様や勝又浩先生の温かい励ましとご指導のおかげでここまでやってこることができました。同人誌のメリットは仲間がいることです。



小松原 蘭
こまつばら らん
東京都生まれ
1970～80年代小・中・高を韓国とエジプトで過ごす
海外帰国子女
学習院大学文学部哲学科中退後、
東京大学、慶應義塾大学、東京
医科歯科大学などで秘書として働く
2018年より「遠近」同人
趣味は読書、映画鑑賞、ゲーム

自分の作品を読んで評価してくれる場があることは幸せです。改めて感謝いたします。
「妙子」は若い姉妹の葛藤がテーマです。妹と姉はまるで異なった性格ですが両者とも私の分身ともいえます。このような作品を認めていただいたことを糧に、これからも日常の中で感じたことを少しでも良い作品にできますよう精進してまいります。



まほろば賞 受賞の言葉 桑山靖子

思春期以来心の奥深くに、書きたいこと、いつか書かねばならないという思いを抱え続けていたような気がする。やっと手探りで書き始めたのが定年退職後だった。大阪文学学校で文学仲間と学び、その後同人誌「たまゆら」で切磋琢磨されながら、何とか作品として纏めることが出来るようになった。

私は虚弱体質で生まれ、終戦後の食料不足と医療施設のほとんどない田舎で育ったため、何度も死の淵に立たされたようだ。その上、父の出兵で祖母や母の戦死への不安が募る日々の中、「私の死」を恐れた人々に囲まれて育った。

そのせいだろうか私は物心が着いた頃から、「死」の恐怖と「死」への研ぎ澄まされた意識に苛まれ続けてきた。

思春期には文学にのめり込んでいき、詩や小説らしきものを試作する一方、古典の研究や折口信夫の著作に惹かれていった。そして民俗学にその後興味を抱き続けてきた。

文学仲間から、「あなたは人間が描けていない」とよく批評される。確かにそうだと思う。私の作品はいつも死の意識が、「常世」や「まれびと」が顔を出してきて、市井の人間を描くことを押しのけてしまうのだ。こんな私の作品を選んでくださった「まほろば賞」選考委員の先生方のご理解に感激し、感謝の思いでいっぱいだ。この感動を胸に、私の「書きたいこと」にいつそう精進していきたい。



桑山靖子
くわやま やすこ
1943 神戸市生まれ
武庫川女子大学 国文学科卒業
32年間神戸市立中学校国語教師を務める
2006 大阪文学学校に入学
同人誌「たまゆら」「あべの文学」の同人となる
2011 『能面』上梓

特別賞

受賞の言葉

木山葉子

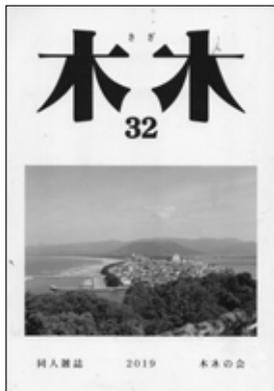
第一四回まほろば賞の選考結果をお知らせ下さいまして誠に有り難うございます。私の作品「火鈴」が特別賞を頂けたことを心から感謝致します。

この小説は、書きながら作っていったように思います。たいして苦勞もせずペンを進めてゆきました。きつ掛けは、寒い日の夕暮れに唐突に鳴ってきた激しい風鈴の音でした。それを川辺で聞いていて、この寒空にいったい誰が鳴らしているのかと、呆れと少々の怒りに似た感情を覚えたものです。

私は毎日のように、夕方川辺を散歩するのですが、川橋を渡ったところに小さな居酒屋があって、なんとなくその

店の前に行って立ち、中で作られている料理の匂いなど嗅いでいました。一度中に入ってみたいものだと思いつながら、実行には及びませんでした。そんな折、テレビで流れたニュースに、ある老舗旅館の倒産が報じられ、従業員の汚職が因をなすこの事件は、私の中で、罪を犯して逃げる一人の男の姿を浮かび上がらせたのです。そして、彼が勝手に動きたしたのでした。逃げるには連れが欲しい。男は、同じ職場の熱愛の女を道連れにする。

家を守るおとなしい妻のことは放置したままである。やがて、男の逃走に影を添わせて追いかけてくる女がいた。鳴らなかつた風鈴が火のように鳴りだした。その妻を描いてみたのです。



木山葉子

きやま ようこ
1941 兵庫県赤穂市生まれ
高知女子大学卒業
中学校教師を経て主婦
「木木」同人
好きな作家 大原富枝

中上紀賞・五十嵐勉賞 受賞の言葉 柳沢さうび

この度はまほろば賞候補として目をお留めくださったことにまずは感謝申し上げます。選考委員の先生方にご精読いただき、文芸思潮読者の皆様に拙作をお読みいただいた幸運に喜びは尽きません。

北方文学同人として文芸創作を始めて日も浅うございますが、同人の先輩諸氏の博覧強記と指摘の確かさは心強く、創作のよすがとなっています。

日々通る徑で田の面を渡る風に押し包まれる。田の面が穏やかならざる光を湛える空を支えている。生き物の気配がし、水の匂いがする。見えるものだけでできていくわけではない世界も文芸創作のモチーフだと感じます。世にまだない作品を形にしたい、手芸品や工芸品を作るように文章を書きたいと夢想します。

文芸思潮で取り上げていただいたことに大きな力を戴きました。本当にありがとうございます。



柳沢 さうび

やなぎさわ さうび

新潟県出身
早稲田大学第一文学部文芸専修卒業
2019 春より「北方文学」同人



河林満賞 受賞の言葉 長沼宏之

このたび思いがけず立派な賞を受賞した。望外の喜びである。

現代社会を一言で言い表せばストレス社会であると言える。一つ間違えば誰でも適応障害に陥る可能性を抱えている。今の世をうまく生きていけないひと組の男女が、依存しあって、時にはぶつかり合いながら生きる様子を描いてみた。

小説を書くにあたって心掛けていたことは、内に向かって閉じるのではなく、外に向かって開いた小説にしたいということである。社会とつながっていたい、と言い換えてもよい。その結果として、読み手にながしかの感慨を残すことができれば、といつも願っている。

河林満氏は芥川賞の候補に二度も挙がった気鋭の作家であったと聞いた。その名を冠した賞を受賞するのは実に光栄であり、その名を辱めないだけの質の高い作品を書いてゆければと念じている。



読者賞 受賞の言葉 葉山ほずみ

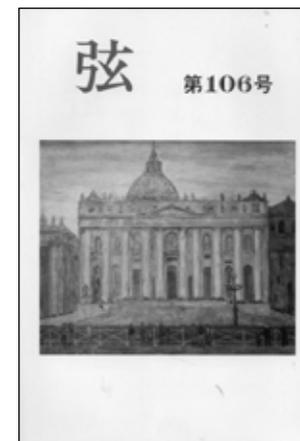
選考委員のみなさま、作品に目を通してくださった読者のみなさま、このたびは読者賞を賜りありがとうございます。

『文藝同人誌 八月の群れ』の諸先輩方にご指導いただきながら、これからも自分らしい作品と世界を創ることができたら、と思っております。

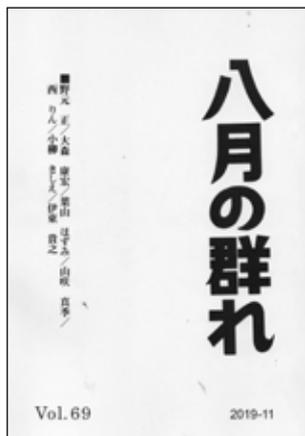
創作を続けるということは孤独である、と以前に聞いたことがあります。確かに、そういった面もあるかもしれませんが。しかし、同人誌という枠に入ることでも多くの仲間に出会い支えてもらっています。創作を通して、多くの仲間を得ることができたことがとても幸運だったと思います。このたびは本当にありがとうございます。



長沼宏之
ながぬま ひろゆき
1943 岡山県生まれ
和歌山大学経済学部卒業
執筆歴 約20年
所属同人誌 弦の会
三重県四日市市在住



葉山ほずみ
はやま ほずみ
1974 兵庫県生まれ
仕事で正しい文章を書く必要があったので文章教室を探し、2007年から4年半、NHK文化センター神戸教室「小説を書こう」に在籍。小説創作の面白さにどっぷりはまり、2012年から「八月の群れ」に所属。
第8回神戸エルマール文学賞佳作賞受賞。
神戸市在住



全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。最優秀賞「まほろば賞」には賞金10万円と賞状・記念品を、優秀賞には賞金3万円と賞状・記念品を贈る。（賞金は、できる限り有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
 - ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞「まほろば賞」その他を決定する。
 - ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
 - ④ 次点には特別賞を授与する。特別賞賞金5万円および賞状・記念品を贈る。
 - ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。五十嵐勉賞など。
 - ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
 - ⑦ 読者賞の投票は極力選考会までに行う。
 - ⑧ 河林満賞は賞金5万円と賞状・記念品を贈る。
 - ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
 - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
 - ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。
- この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切にお願いするしだいです。

2020年6月24日（改訂）

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞



睡蓮



長沼宏之

1

尾方耕治は自分が発病した日のことを今も鮮烈に覚えている。

春浅いころ、通勤の名鉄急行がC駅とZ駅の間を走っていた。ほどほどの混み方で前の停車駅で空いた座席に座っていた。すると急にめまいというのか、ぼーっと頭が地面に吸い込まれていき、「なんだ、これは」と思った。突然、ドキドキと強い動悸が来て、瞬間、〈死ぬのか〉という強い恐怖感に襲われて、するとますます動悸が激しくなり、胸をおおった。その時は少しで収まったので、言うように

して会社にたどり着いた。

大学卒業後、大手電子機器メーカーに入り、ユーザー向けアプリ開発のセクションに配属されて三年目だった。大学では文学部で英米文学を専攻していた耕治にとって、コンピュータの知識は全くなかったが、会社はむしろ異分野の柔軟な発想を期待していた。その期待にうまく応えられたとは言い難かった。発想が常識的で、飛躍的なイマジネーションに欠けていた。それを埋め合わせるように、深夜残業の多い激務に耐え、表面的には明るくふるまっていたから、周囲からはタフに見えていたかもしれない。仕事に忙しすぎる時期で、残業が続いていた。ずっと体調が悪かったため、血圧が急に上がり下がりしたりしたのか、

心臓が悪いのかいろいろ考えた。何日か過ぎて、会社に行く電車の中でまた同じショックに襲われ、これはホントにおかしいと思いつつもまだ病院に行かなかった。診断がこわかったのだ。決定的だったのは、家のテレビでサスペンスものの洋画を見ていた時のことだった。主人公が敵の本拠に忍び込んで時限爆弾をしかけようとする息詰まる場面を見ていたら、心臓がタタタタタとマシンガンのように打った。『もう死ぬ』と思い、しばらくじっとしていたが、なかなか収まらなかつた。しばらくしてやっと収まった。翌日に病院に行った。

心電図を取ったり、いろいろな検査をやったが、何も異常はなかつた。医者は「パニック障害と思われまます。あなたも子供のころから自律神経が非常に乱れやすくて、ストレスに対して身体反応を起こしやすいタイプだったんじゃないかな」と言った。言われてみれば、子供の頃、まばたきが止まらなくなることが何度もあった。「それにしても、今まで二十五年間生きてきてこんなことになったのは初めてなんです。なぜなんですか」と聞いたら、「それは先天的な体質があるところに、社会人になってやっばりいろいろな仕事のストレスが重なってきて、不安感がたまった結果じゃないかな」と答えた。神経科の専門医に転医し、薬をもらったが、あまり効かなかった。その後も何度もパニック発作に襲われ、死の恐怖に陥った。それでも

何とか耐えて仕事を続けたのは、同居していた両親に心配をかけたくないという気持ちと、この状態では他に仕事を見つけないことは困難だという現実があった。しかし、恐怖が極限になって会社を休職した。

病院を変え、薬を変え、ストレスも減ったためか、パニックに陥る回数は減って行った。唯一の息抜きだったパチンコもやめた。近くの、池のある公園で、再発の恐怖を抑え込みながらぼーっとして一日を過ごしていた。池は睡蓮の葉に覆われていた。花が咲く季節だった。ベンチに座って睡蓮の花を眺めていると気持ちが休まった。それから睡蓮池のある公園を探しては、見に出掛けた。そのうちに、描いてみたいと思うようになった。

最初は水彩で描いていたが、われながら下手だった。そんな時にたまたま市民文化センターでポールペンの展示会を見る機会があり、すっかり魅せられた。それから睡蓮の花咲く池をポールペンで描くことに変えた。つかの間、息抜きになったが、腕をあげると描写は細かくなり、どんどん細密画風になっていった。すると時折頭痛に襲われるようになり、再発の恐怖がよみがえってきたので、描くのをやめた。

いつまでも休職を続けるわけにはいかない。会社と契約している産業医、人事部担当者とで三者会談を何度も繰り返し、復帰が認められた。元の部署ではなく、対外的な接

触の少ない管理部門のセクションに配属が決まった。温情に感謝したが、給料は成果給の部分が減額になり、今後の昇給・昇格は望めなかった。だが、いつパニック障害が再発するかという強迫観念は頭から去らなかつたので、ほかに選択肢はなかつた。

休日に医者勧めで名古屋市の不安神経症友の会に出掛けた。この障害に悩む人たちの親睦と、医師や治療法に関する情報交換を目的に活動していることは以前から知っていた。

日曜日、場所は区の生涯学習センターの一室だった。近くまで行ってから何となく入りづらくて、会場に着いたのは十分も遅れてしまった。

入口のドアを開けると、対面式に口の字に並べられた折りたたみテーブルに十四、五名の人が座っている。全員が三十代から四十代くらいで女性の方が多い。あまり友好的な雰囲気ではない。どうしたものかとドアを背に立っていると、入口近くに座っていた女性が振り返って立ち上がった。

「初めての方ですか」

「はい。医大の山田先生から紹介されて来ました、尾方耕治といいます」

「ああ、尾方さん。先生からうかがっています。どうぞお

の番だ。

「尾方耕治といいます。会社に入って三年目、二十五歳の時にパニック障害を発症しました。その後何度も発症し、会社を休職しましたが、今はなんとか復帰しています。薬の効果で今は収まっていますが、いつまた襲われるか、不安な状態が続いています。頭を使うとぶり返しそうで、薬に生きることを心がけています。趣味というほどのものはありませんが、気晴らしはパチンコです」

「パチンコをするというのは何か意味があるんですか」
向かい側に座っていた中年の、ほっそりした女性が聞いてきた。ひきつった笑みを浮かべて耕治を見詰めている。それが精いっぱいの好意の表し方なのだろう。

「いつでも一人で没頭できますから、緊張をほぐせるので、最近では欲が出て必勝法をあみだそうとして頭を使いすぎるので、やめています」

笑いが起こった。

それを機に、場の堅い雰囲気崩れ、話が弾んだ。耕治はすっきりくつろいでいた。

牧野さんはうつを併発したと言った。不安神経症とうつは本来は別の病気なのだが、神経症が高じて発症の予感に苦しめられると、うつと同じ症状が出るのだ。片頭痛の併発も緊張のしすぎという点では同根なのだ。

なにはともあれ、こうして同病の人たちと知り合えたこ

好きなどころにお座りください。わたしはこの幹事をしている牧野と申します」

なめらかな口ぶりだが、抑揚をつけない話し方で、近づきにくい女性だな、という印象だった。耕治はテーブルをぐるっと回って向かい側の空いている席に座った。

「尾方さん、早速で申し訳ないのですが、簡単に自己紹介をしていただけますか。病歴も含めて、差し支えない程度でいいですから」

どう話したのかと思案していると、それではこちらの質問に答えていただく形でもいいでしょうか、と聞いてくる。そう急がさなくても、と思ったが、頷き、彼女と視線を合わせた。

細い眼の間が開いていて、頬骨が張っている。およそ美人とは言えないが、丸みを帯びて整った下あごが口元を引き締めていて、広い額と共に、意志の強さを感じさせる。背筋は伸びていて骨格はしっかりしているが、顔色はあまりよくないし、活力は感じられない。当然のことながら、この場にいるみんなが程度の差こそあれ病人なのだ。

「私は牧野麻子です。看護師ですが、職場で不安神経症からうつを併発しました。投薬とカウンセリングで仕事には復帰しましたが、まだ不安定な状態です。夜勤明けが一番つらく、頭痛がします。あつ、それと趣味は絵画鑑賞です」

話し慣れているのか、すらすらと語った。今度はこちら

とがうれしかった。散会後は地下鉄で名古屋駅まで行ったが、上り方面の電車に乗るのは牧野さんと耕治のふたりだけで、彼女は東海道線のO駅だということでJR線にし、すぐにやってきた電車のクロスシートに並んで腰かける。

「看護師さんをされているんですね」

と先に口を開いたのは耕治だった。名古屋からO駅までは快速でたった二駅で、遠慮してはすぐに着いてしまふ。耕治は彼女と話がしたくてたまらなかつた。

「市内の病院にお勤めなんですか」

「いいえ、T市にある日大病院なんです。勤務先と暮らすところが近すぎるとかえってストレスになるものですか」

彼女がすぐに答えてくれたので、安心した。

「ぼくはこのありさまなんで、いまだに両親の世話になっています。われながら情けないです」

電車が止まって、ドアが開いた。次がO駅で、そうなればまた一人きりだと思つて焦った。そのとき、彼女の趣味を思い出した。

「絵はどういったものがお好きなんですか」

「疲れがたまると、大山崎山荘美術館の印象派の部屋に行くんです。特別展じゃなくてモネの常設館の方に。そこで睡蓮の絵を見ると気持ち休まるんです」

偶然の一致に驚いた。耕治の心をいやしたのも睡蓮の花

なのだ。実際の花と、名画に描かれたものとは別物ではあるが。電車は彼女が降りる〇駅に近づいていた。

翌月の二度目の例会の帰りに名古屋駅で牧野さんと二人きりになると、耕治は大山崎美術館に行こうと誘った。

「実は僕も睡蓮の花が好きなんです」

公園に通って絵を描いたと話す、牧野さんは驚き、とても喜んだ。

「そこに行けばいつでも同じ絵があるっていうのはいいですね。一度だけ見る名画もいいでしょうけど、僕は何度でも見られるほうがいいなあ」

2

京都の南にある山崎に行ったのはそれから二週間後の日曜日だった。

美術館は鑑賞者でいっぱいだった。開催中の特別展が目当てのようだが、常設館の方にも流れてくるので見物客の話しは絶えず、気が散ることもあったが、有名な建築家の設計になる常設館は宝石箱のように美しく、モネの絵を順番に見ながら、これまで知らなかった幸福を感じていた。透き通った青空が水面で緑と融合していく様子、さまざまな色の睡蓮の花、そして視界を領する水面のゆらぎを、ソファに座って休み休みしながら、繰り返し見ていった。

「その絵は今でもお持ちなんですか」

「家にあるはずです。段ボールに詰め込んで」

そう答えながら、久しぶりに絵のことを思い出していた。三度目の例会のあとに、名古屋駅で二人きりになると、来がけにコインロッカーに入れてあった数冊の画帳が入った紙袋を出してきて、牧野さんに渡した。

「ええっ、おほえていてくれたの。ありがとう」

腕を取らんばかりにして喜びを表した。驚いたのは、続きの言葉だった。

「喫茶店だと汚してしまうかもしれませんし、私の家で見てもいいでしょうか。〇駅から歩いてすぐ近いところですから」

三冊の画帳が入った紙袋を耕治が持ち、〇駅の西口から国道沿いを歩いて六階建てマンションの五階でエレベーターを降りた。

「少しここで待っていてください」

と言うと、彼女はドアの向こう側に行ってしまった。耕治は紙袋を抱えたまま、こういうのは通りがかりの人にはどう見えるだろうかなどと甘い思いに捉われた。

ドアが開き、彼女と目が合った。どうぞというように、首を少し傾けた牧野さんに応じて部屋に入った。

なるべく見えないようにと思っても、つい部屋の中を見まわしてしまう。意外に簡素で、壁の装飾はモネの睡蓮の絵

牧野さんといっしょに巡りながら同じ絵に心ひかれているのがうれいしと同時に不思議な気がした。そんな感慨を抱きながらもうひと巡りモネの絵を見て回り、二人は美術館をあとにした。

帰りの名古屋駅で耕治がコンコースの真ん中で話し続けていると、見かねたのか、牧野さんは駅の近くによく行く喫茶店があるので、そこで話しませんかと誘ってくれた。

太閤口側のアーケード街から路地を入って、一階が洋菓子屋になっている三階建ての小さなビルの二階で彼女と向かい合った。耕治はこれまで自分の身に起こったこととその時々を気持ちを、堰を切ったように語った。やつと聞いてもらえる人と巡りあったという感動から、すっかり気を許していたのだろう。やつと話し終えると、彼女は自分が初めてパニック障害に襲われた時の様子を簡潔に語った。夜勤の時、薬を出し間違えそうになった。容器もラベルに書かれた名前も似ていたので、うっかりしたのだ。医師が気がついたので事なきを得たが、もしそのまま使われていたら、命にかかわる大事になるところだった。厳しく注意されて、不眠症になり、パニック障害を起こした。その時の恐怖は耕治には容易に想像できた。牧野さんはすつと話題を変えた。

「睡蓮の絵は今でも描いているのですか」

「いえ、仕事に復帰してからはやめています」

をあしらったフランス製と思われるポスターだけだった。本物以上にあざやかだと思いつつ眺めていた。耕治と向かい合うと、牧野さんはうれしそうに耕治を見詰めた。

「お茶を淹れる前に、これを見てもいいかしら。こぼしちゃったりすると大変だから」

「いや、その、これは預けておくから、あとでゆっくりと」

最も苦しかった時期を思い出させる絵ばかりだ。彼女も彼の気持ちがわかったのだろう。

「それじゃ、一人になってから拝見するわ」

と言って、画帳を積み重ねてわきに置いた。

テーブルについてお茶を飲みながら、二人は時間を忘れて話し続けた。後にも先にもこれほどの至福の時はなかった。

時刻は五時を過ぎている。おたがい明日は仕事だ。このあたりで、と思って、耕治は辞去した。

四度目の例会のあと、どちらが誘うでもなく、自然に彼女のマンションに二人の足が向かった。部屋に入るなり、耕治は両手で彼女の肩を軽くつかんだ。彼女は振りほどこうとはせず、押し返すこともない。唇が重なり、強く抱きしめ、彼女が耕治を奥へと促し、二人はそのままもつれるようにベッドに倒れこんだ。

シャワーの後で着替えを済ませた牧野さんが戻ってきた。メモ帳に何か書いている。二つに折って差し出されたメモ

にはこれから先の休日の予定と電話番号が記されていた。それからは彼女の夜勤明けと土・日が合う日、彼女のマンションを訪れるようになった。夜勤明けの彼女は昼食を作って待っていてくれる。ハーブティーを飲みながらおしゃべりをして過ごした。外に出掛けなかったのは、二人には静謐な環境が好ましかったからだ。夕方になると帰り支度を始める。これくらいで帰った方が長続きすると思っていた。

そんな関係を続けているうちに、季節は巡り春が近づき、二人の会話には将来の生活に関することが多くなってきた。話をしているうちに、彼女の願望はおおよそわかっていた。まず、結婚したら子供が欲しいということ。子供ができればそれをてこに、生きる張りができると信じていた。耕治はパニック障害の再発につながりほしくないかという不安があったが、基本的な前提条件として受け入れざるを得なかった。

また、彼女は今住んでいる土地が気に入っていて、この近辺で新居となるマンションを購入するつもりだと言った。耕治は今の会社に通勤可能な地域であればどこでもよかった。「お金のことなら心配しないで。十五年以上も看護師をしてきたんだから」

耕治の気持ちに負担をかけさせないようにという気配りからか、こともなげに言った。二年前まで寮で暮らしていた自分が選んだ理由がわかってきた気がした。おなじパニック障害者で、一緒にいて楽しいし、気も合う。そのうえで耕治なら多少無理な条件を付けても最後には受け入れるに違いない。なぜなら耕治には他に選択肢はないのだから。結婚相手として足もとを見られていると思うと、気持ち落ち込んでいくのがわかる。それでも結婚の意思を固めたのは、これまでと同じ苦しみと孤独に戻って行くのは耐えられなかったからだ。

帰宅した耕治は、その夜、両親に「話があるんだけど」と言って居間のソファに座ってもらい、いままでの付き合いのあらましを話した。結婚に至るまでの経過を聞いた父と母は、しばらく黙っていた。父が重い口を開いた。

「男の両親に会いたくないというのは、何か魂胆があるからじゃないか。おまえの弱みに付け込んで利用するつもりだ。おまえに面倒なことを押し付けるつもりだ。家事や育児を。男の両親に会いたくないというのが怪しい。魂胆が見破られるのが怖いからだろう」

こうまで誤解されていると反論する気にもならず、自室に下がるとベッドに寝転んで目をつむった。

たしかに彼女について知っていることは少なかった。名前、生年月日、勤務先くらいで、両親がどこにいるのかさえ聞いていない。

そこで耕治は気がついた。父と母が彼女の動機を疑うの

たというのだから、貯蓄額は相当なものだろう。それにしてもどうしてそこまで、と思ったが、彼女の側にも事情がありそうだった。自分の家族については何も話そうとしななのだ。言葉の端々から推量すると、幼い時に両親は離婚し、母子家庭となったが、母親との仲が極端に悪く、その原因は母親の過干渉にありそうだった。娘に対する期待と支配欲が強く、それを嫌った彼女が家を飛び出して、看護師から叩き上げで、働きながら学校に通い直して、正看護師の資格を取ったという過去がわかってきた。ここ数年は実家とは連絡を断っている、という。入籍しても結婚式を挙げたくないと言った。そこまでは仕方がないとしても、耕治の両親にも会いたくないと言われ、困惑をおぼえた。

マンションを探そうと思うので、一緒に行つて欲しい、と言う。

「それはかまわないけど、その前に一度でいいから家に来てもらえないか」
彼女は怒りをあらわにし、両耳を押さえて突っ伏してしまった。それはすねている女の防御姿勢に見えた。彼女が家族を抜きにして二人だけで結びつきたいと願う気持ちもわからないではない。しかし、耕治としては、自分の病気で両親にはいろいろと迷惑をかけてきたのだから、そんな流儀を聞き入れるわけにはゆかない。彼女がどうしてここまで抵抗できるのかと考えていると、そこでようやく彼女

は、そもそも自分が結婚に値しない男だと思っていたからだ。病身で爆弾を抱えたような男を相手にする女性がいるはずがない。もしいるとしたら何か裏があるはずだ、と思うのは無理のないことかもしれない。耕治は黙視することに決め、二人で新生活に向けての準備を進めていった。

休みに合わせて何度か出向いた結果、住む場所は駅からバスで二十分ほどのところにある四階建ての瀟洒なマンションの三階に決まった。築十年の中古だが、古さは感じられず、3LDKで二十万円は買い得感があった。荷物も運び終えた五月上旬の朝、両親に書き置きを残し、彼女との新しい生活に出発した。耕治三十歳、麻子三十五歳の春だった。

新居での生活は、耕治に精神面にも体力面でも落ち着きをもたらした。とにかく結婚できたことが自信をもたらしたのだらう。毎朝七時に家を出て会社に向かう。夕方五時には会社を出て、帰りに買い物をして、家で洗濯や掃除をしながら妻の帰りを待つ、という生活を続けているうちに少しずつ心の余裕ができ、本が読めるようになった。彼女の緊張型片頭痛も和らいでいった。おなじ心の障害者同士が一緒に暮らしていて、お互いの苦しみを目の前にして発作が頻発するという悪循環をひそかに恐れていたにもかかわらず、新婚生活はスムーズにスタートを切った。

妻は週に二回夜勤がある代わりに、夜勤明けは昼間に帰宅して終日家にいられる。昼寝中の彼女を起こさないように静かにドアを開け、タイニングキッチンテーブルで本を読んでいると、自分が三十歳を超えているのが信じられなかった。人並みの出世はとっくにあきらめている耕治は、静かな生活に満足している訳ではないが、心の安らぎを得ていることは事実だった。

妻は自分についてほとんど語ろうとしなかった。両親のことではない。勤務先の病院に關してもあまり話そうとはしない。彼女が何科を担当していて、同僚の看護師にはどんな人がいて、医師たちとどううまくいっているのかといったことについても、耕治はまるで知らなかった、男女にかかわらず友人もいないようで、同病者の友の会の幹事もやめていたので、手紙や電話がくることもなかった。

3

そのおばあさんに気がついたのは、マンションに入つてすぐのことだった。毎朝、バス停に向かう道ですれちがった。相当な高齢で、杖代わりの乳母車を押している。もう八十をかなり超えているだろう。耕治の目を引いたのは歩き方だった。腰が直角に曲がっていて、乳母車の把手に上体を乗せるようにして、うつ向きかげんで、しゃかしゃか

と歩いてくるのだが、信じられないくらいに足が早いのだ。農婦といった印象ではない。服装はいつもこごつぱりしている。頭にはいつも黒いつば広の帽子をかぶっていた。

間近で見える機会を得たのは、次の休日だった。妻は明け休みで寝ていた。たまたま家の窓から前の道路を見下ろしているとき、おばあさんが歩いてきて、マンションの前で止まった。道路をへだてて向かい側の、T字路の角地にコンクリート造りの集会所が建っている。その周りが広く空いている。おばあさんがプロックの花壇にしゃがみこんで何か手入れをしているのが見えた。耕治は興味を覚えて外に出て、花壇に近づいて初めて顔を間近で見た。縮んだ顔はくしゃくしゃで、眼鏡をかけている。頬骨が横に張っていて眼鏡の奥の目はつりあがり気味だ。体は小学生に見えるくらい小柄だ。

毎朝やってきて、半日を過ごす。季節によっては午後にもまたやってくる。

休日ごとに観察していると、手入れをするエリアが集会所の周りだけではないのがわかってきた。集会所の西側に市営アパートの建つ、一メートルほどの高さの台地が広がっている。目を引くのは道路への傾斜面である。一面におばあさんが植えた四季折々に花を咲かせる草花で覆われている。

耕治はおばあさんをひそかに「花咲かばあさん」と呼ん

でいた。休日には花咲かばあさんがやってくるのをなんとなく心待ちにしていた。耕治は植物図鑑を買ってきて、デジカメで撮った写真とつき合わせて花の名前を調べるようになった。

おばあさんには謎めいたところがあつて、それで余計に気になった。おばあさんを時々手伝っている戸建てに住んでいる六十代の女性と口をきくようになった。彼女の話によると、おばあさんの住まいは団地の外にある。息子が家を化粧品品の訪問販売の会社に建て替えた。敷地は住居兼社屋の二階建てと駐車場が占められ、おばあさんの趣味の草花を植える余地は全くない。そこで離れた場所にある公共の土地に目を付けて、花作りを始めた、というのである。とうの昔に夫を亡くし、子供は自分の暮らしに忙しい。誰にもかまわれなくても平然と自分の時間をつぶせる潔さを持っているのだと、耕治は想像した。

妻に花咲かばあさんのことを話したことがあつた。

「知ってるわ。でも、市役所から、市の土地に勝手に植物を植えるなっていう注意があつたんだって。でもおばあさんは聞こえないふりをしているそうだから、いつまでもやっつけられるかしら」

不機嫌そうな、夢のない話しぶりだ、この話題はそれきりになった。

静かで穏やかな日々が終わったのは、結婚してから五年後、耕治が三十五歳、妻が四十歳の時だった。子供については、耕治には若干の不安はあつた。だが、結婚生活に自信がつくに従って、これなら子供の一人くらいは育てられるかもしれない、と自分が父親になることをひそかに期待するようになっていた。だから、妻の妊娠を知らされて素直にうれしかった。

とかくするうちに月が満ちた。産気づいたのは夜中だったので、耕治がタクシーを呼んで、妻が勤める病院に入院し、明けがたに出産した。だが、肝心の赤子は、ただ子宮から広いところへ出たというだけで、人間の世の空気を一口も呼吸しなかった。出産前の最後の検診では、医師は心臓まで聴診して、至極健康だと保証したのである。けれども、臍帯をくびに巻きつけていた。こういう異常は珍しいことではなく、超音波ドプラーでわかっていたことであり、医師も心得ていて、取り上げるときにうまく首にかかった胞を外して引き出すはずだった。しかし胎児の頸に絡んでいた臍帯は三重に細い咽喉を巻いていた。お腹にエコーを当て、モニターを見ながら若い医師が言った。「これ見えますか？ 赤ちゃんの心臓……動いてないんですよ。どうしちゃったの……もうお腹切つても仕方がありません。このまま出産するしか」何度も何度も赤子は出てきたが、産声はあげなかった。胎児はぐつと気管を締められ

て窒息してしまっていたのである。

「男の子です。うわあ、こんなにきつく臍の帯が巻きついている。ご主人、ほらわかりますね」

それならもつと早く帝王切開に踏み切ればよかったのではないか、と疑問を持ったが、言ってみてもしかたのないことだった。目鼻立ちの整った顔だった。麻子は産後のじょう中にその始末を聞いて、ただ軽く頷いたきり何も言わなかった。赤ちゃんは肌着を着せられて、赤ちゃんのベッドに寝かされて麻子の横にきた。麻子は泣き声一つ立てない赤子を抱き締め、耕治と助産師は引き離すのに苦労した。麻子は疲労に少し落ち込んだ目をうるませて、まつげをしきりに動かした。耕治は慰めながら、ハンケチで頬に流れる涙を拭いてやった。

悲劇ではあったが、絶望ではなかった。妻の内心の傷を癒すには、新たに子供を授かるのが最善の手段だと考えられたし、再度の懐妊の期待はさらに強まってゆく。妻は退院すると、表向きは元気に仕事を再開した。ただ麻子の年齢を考えると、残されているチャンスは決して多くはない。ところが、しばらくして、妻はどういうわけか性交を避けるようになった。問い詰めると、生理でもないのに時々出血があり、頻度が増えているという。原因はいろいろと考えられ、深刻に取る必要はないとしても、よい兆候ではない。長年看護師をしていれば、対処はわかるはずだ。なぜ

早く診察を受けないのか、となじったが、去年検診を受けたときはなんともなかったのだから、と受け入れない。ある日、帰宅すると明け休みの妻が身体がだるいと言って、洗濯物も取り込まずに布団で横になっている。今までのなかったことだ。下腹部に違和感がある、子宮筋腫かもしれない、と言いつつ。とにかくちゃんとした診察を受けた方がいい、どこの病院がいいかはきみに任せる、と強くせまり、なんとか同意させた。

耕治は翌日は会社を休み、妻に付き添った。子宮筋腫だろう、そうであってほしい、と耕治はつとめて楽観視しようとしていた。

検査の結果は、初期の子宮体部がんということだった。子宮がんの検診では頸部からサンプルを採るために発見できなかったのだろう。ステージ0期であり、手術から五年後の生存率もほぼ百パーセントだと言われ、耕治は胸をなでおろした。ただし本当のところは開腹してみないと分からない。

妻の身体は勤務先でもある日大病院から県立がんセンターへと移され、そちらでも検査を受けた結果、やはり子宮がんだと診断された。治療についてはまだがんが内臓にとどまっている段階なので、ホルモン療法によって子宮を残すことも可能だが、間もなく四十二歳という年齢と、再発や転移の危険性を考えると子宮・卵巣を全摘出した方が

賢明だろうという見解が示された。高齢出産をするにしてもぎりぎりの年齢だったが、手術をすればもう絶対に子供を産めない。子供をもうけるといふのは妻の夢だったが、現実には彼女の意志を無視するかのように行進していたのだ。妻は落胆ぶりを表には出さず、気丈にふるまった。担当の医師は妻と同年輩の女性で、手術の方針を告げられた時には耕治も同席していたが、妻はもうとつくに覚悟はできていますともいうように、後ろに立っていた夫の顔を見ることがせず、「よろしくお願いします」と言っただけを下げた。

耕治は彼女のこわばった背中に、深い悲しみを見てとつたが、一命をとりとめたと思えば文句をつけるわけにはいかない。手術のあと、とりあえず二週間入院し、術後の経過を見ながら早ければ二か月ほどで職場に復帰できるのではないか、と言われた。そんなにうまくゆくのかと意外に思っていると、耕治の懸念を察した医師が言葉を付けたしてくれた。

「発見が早かったために切る範囲が狭くて済むので、回復も早いだろうと予測するわけです」

手術をひかえ、家の中には静かな緊張感が漂っていたが、妻が不安を語ることはなかった。仕事の引き継ぎのためにお昼を挟んで勤務先の病院に向き、夕方前には帰宅してゆっくり体を休めている。耕治もできるだけ早く帰宅して

一緒にいるように努めた。前日になった

「いよいよ明日だね」

本当は言わずにおきたい言葉だったが、そうとも言わなければ、妻は口を開きそうもなかった。

「手術自体は難しくないのでよ。問題は術後の経過だけど、0期ならまず転移することもないから、すぐに働かされそうだね」

まるで気負いは感じられなかった。不意に立ち上がってサイドボードの引き出しから一通の封筒を取り出した。

「生命保険の受取証や証書の類はすべてここに入れたいわ。前にも言ったけど、献体の手続きも済んでいるから、もしもの時はよろしくね」

耕治は「もしもはないよ」と言いながら受け取ると、そのまま引き出しに戻した。

4

「発見の早さに救われましたね。もうひと月遅ければ子宮の筋肉にもがんが広がって、リンパ節も切除することになったでしょう。そうなれば将来再発する可能性もありませんから。本当によかった」

執刀を終えたばかりの女性医師は耕治にそう言い、「でもこれからのほうが大変ですから、奥様を労わってあ

「げてください」

と念を押して、まだ麻酔で眠っている妻のもとへ連れて行ってくれた。

個室なので耕治は誰の目も気にせずに眠っている妻の顔を見詰めた。四十二歳の誕生日を迎えた妻は、手術直後ということもあって顔色も悪く、シミや小じわもいつも以上に目についた。

それから二時間後に目覚めた妻の耳元に口を寄せ、手術は成功だったと伝えると、妻は耕治にむけていた視線を天井へ移してから目をつむり、自分の身体におこった変化を一人で納得しようとしているようだった。

おそらくそこまでは彼女の想定範囲だっただろう。誤算は卵巣を摘出したことによる急激なホルモンバランスの変化で、四十二歳になったばかりの妻は手術をきっかけに更年期に突入してしまい、自律神経失調症を招いて体調を大きく崩してしまった。

めまい、耳鳴り、嘔吐、不眠、のぼせ、それに関節痛と散々で、持病のうつ症状もあらわれていた。痩せて、髪の毛も薄くなって、始終ふさいでいるためよけいに老けこんで見える。肌もかさついて、ここまで変わってしまうのかと、ただ果然と見つめるばかりだった。

更年期障害に対してはホルモンの投与によって自律神経

「だから、治らなかつたらどうするの？」

「何年でも待つよ」

「じゃあ、何年経っても治らなかつたら？」

「さらに信じて待つよ」

「いいわね。わたしが苦しむ姿を見続けられて」

「やめなさい」

通院してもいっこうに効果がないので、苦しい時の神頼みで、東洋医学をすすめてみた。はじめは嫌がっていたが、もはやなすすべはないと思っただろう。鍼灸の治療院に行くことを受け入れた。

妻の鍼灸の施術受診は、結果としてはほとんど効果がなかった。治療院の先生が説明してくれた。妻の身体にはいたるところに強い凝りがある、それが血流や気脈の流れを押すとどめていけるということだった。通常は鍼を打つとツボを起点に効果が伝わっていくのが鍼を持つ指先をおしてわかるのだが、妻の場合は先生が経験がないほどガードが固く、身体が鍼を押し返してくるのだと言う。

「わたしがこれまで診てきた中でも、最強の難敵です。原因は心を開けないところにあります。しかし治療を続けていけば必ず効果は上がります」

いやな顔一つ見せずに励ましてくれるのはありがたかったが、どうしてそんなことが言えるのだろうか。妻としては、病気をここまでこじらせている原因について、彼女な

のアンバランスを調整する治療が行われるが、妻の場合は心因性が強いためにほとんど効果がなかった。手術前は二か月もすれば職場に復帰できると言われていたのに、十月になっても回復の兆しさえ見えず、妻の焦りは目に見えてひどくなっていた。

「いいわね、そんなに元気にしていられて。あなたの顔に出てるわ。こんな女と結婚して失敗したと後悔してるって」十月からの一年間を休職して治療に専念することにしたのだが、目標が遠くになりすぎて気持ちの張りをなくしたのか、妻はことあるごとに耕治に愚痴をこぼしたり、イヤミを言うようになっていた。

「いいから、はっきり言つてよ。子供は産めない、その上うつで、おまけに更年期障害だなんて。家事もできないし、セックスはできない。それでいて妻だつて言えるのかしら」

「言えるよ。夫婦だからだよ」

「夫婦だつたら、どんなことでも許されるっていうの。それじゃあ、私が万引きや不倫をしても許してくれるのかしら」

「そんなことは言っていないよ。二人は障害者同士で結婚したんだから、助け合うのはあたりまえのことだよ」

「でも、わたしが一生治らなかつたらどうするの？」

「そんな風に悲観的に考えずに、明るい希望を持つのが何よりの薬だつてことは分かっているだろう」

りの見当はついてはいるはずで、ただしそれとどうむきあえばいいのかわからずに苦しんでいるのだろう。夫としてできるのは、たとえどんな罵倒であれ、妻の発する言葉を可能な限り受け止めることだけだった。妻がぶつけてくる八つあたりには甘えの部分も幾分かあったとしても。

しかし、彼女にはだんだんと絶望から来るいらだちの色が濃くなっていった。

「ねえ、先生は私の悪口を言ってるんですよ。手がつけられない依怙地な女だつて」

「そんなことはないよ。先生は心配して毎日のように様子を聞いてくれるじゃないか」

「いい実験材料を見つけたつてわけね。病院で難病の患者が担ぎ込まれてきたときに、これで博士論文が書けるって喜んでる医者だつて見たことがあるんだから」

「そんなことはない。治つてほしいという気持ちは本当だと思つよ」

「ほつといつてよ。いいのよ、治らなくつても。わたしの身体なんだから。勝手でしょ」

「きみだけの身体じゃないよ。それにきみだつてまた元氣になつて働きたいだろ」

毎晩同じような会話が繰り返された。耕治は日に日に鬱々としてゆく妻に引きずられつつある自分を強く感じるようになった。一体どうなつていくのか、すべてのことが

悲観のペールに覆われつつあった。

面白みはないがストレスのない会社での仕事に心の安定を得ていたが、それについても小さな不満と不安が芽生えてきた。解雇をまぬかれたのは会社の温情からで、感謝すべきなのはわかっているが、昇給もない、昇格もない、異動もない、いわば餓い殺しの状態が果てしなく続く。いや、会社も生きものである、必ず逆境に見舞われる時期もある。そのときは間違いないで最初に整理の対象になるだろう。そうなれば病歴から考えて拾ってくれる会社が容易に見つかるとは思えない。こうした暗い想念を続けていけば、病の再発が起こるのではないかという不安を抱くようになっていった。

そんな心の動揺に付け込むように、かつて同じ職場にいて耕治とはウマがあつた先輩から声がかかった。

「小林です」

かかつてきた電話の主が一瞬わからなかった。今はスマホのアプリのプログラミングを教える教室を経営しているが、教える人材が足りない。耕治の状況もよく知つた上で、講師としてだけでなく自分の片腕として経営を助けてくれないか、という誘いだつた。やってみたい、そこからまた別の道が開けるかもしれない、と思つた。だが、勤務時間は相当厳しくなるだろう。今の状況ではとても無理だ。

とか、そっけなくこたえるだけなのだが、そのときは珍しく作業の手を休めて、耕治の顔を見ながら話した。

「考え方次第ですよ。伸びようとする植物を抑え込んで自分の思い通りにしようとするから大変なのよ。うどんこ病や害虫や雑草はつきりに気を取られたり、間引いたり、芽をつんだり、どんどん追われているとなにも楽しめなくなる。手助けをするくらいのもりでいけば、草花だつて心を開きます。ちつとも大変じゃないですよ。」

「でも、雑草を抜くだけでも」

「雑草を目の敵にするから戦いになってしまふ。わたしは花壇にできるだけ雑草を植えているの」

それ以後、注意をして見ていると、長大な傾斜面などは雑草と言えなくも多年草が四季折々に花を咲かせていた。春にはダイコンバナが紫の優雅な花を付ける。この草は多年草のはずだが、晩秋におばあさんが袋から種をつかみだしては、ぱつぱつと威勢よく斜面にまいているのを見た。その恰好がいかに花咲かばあさんだつたので笑つてしまった。

集会所の周りの花壇には多種類の水仙が植えられていた。ラッパズイセン、キスイセン、大杯スイセン、八重咲きスイセン、房咲きスイセン……、花が終わると葉がだらしなく垂れる。見苦しいが、球根を太らせるには葉を切つてはだめだそうで、おばあさんは葉を折り曲げて茎の周りにく

5

花咲かばあさんと言葉を交わすようになったきつかけはささいなことだつた。おばあさんの押ししている乳母車の車輪がキーキーきしんで音を立てていた。

「おばあさん、ちよつと待ちなさいよ。車輪が鳴っているじゃないですか。それじゃ押したつて重いだろう。油をさしてあげる」

呼びとめて自転車用の油をさしてやつた。オイルを数滴たらしただけで音もしなくなつたし、押しても軽くなつた。おばあさんはいままでそんなことを気にしたこともなかつたと言つたが、車が軽くなつたのにはびっくりしたらしく、丁寧な礼を言つた。

以来顔を合わせるたびに挨拶の言葉を交わすようになっていた。といつても暑さ、寒さやお天気のことくらいに限られていたが。しかし、おかしなもので、おばあさんと話すひとときは妻との軋轢に疲れる日々にあつて唯一の心の癒しだつた。妻にもそれは理解できたのだろう。このわずかな外出については何も言わなかつた。

おばあさんの園芸のやり方は一風変わつていた。口を利くようになって間もないころ、耕治が「大変だね。これだけ広いと一年中気の休まる時がないでしょう」と聞いたことがあつた。いつもは「ええ、まあ」とか「それでもない」

るりと巻きつけている。相当な執念である。水仙へのこだわりには何か理由があつたのかもしれない。なにしろ花言葉は「私のところにもどつて」というのだから。一年草は少なかつた。水やりが大変だつたからだ。

作業を終わつて遠ざかつていく姿を、あと何年続けられるのだろう、と哀惜の気持ちをおぼえながら見送つていた。

十月以降、休職扱いとなつた妻の給料は止まり、健康保険から休業手当が支給されるだけになつていたが、まだ貯金もいくらかあつたので、耕治の収入だけでもどうにか家計を維持できた。

そんなある日、帰宅した耕治を妻がいつになく弾んだ声で出迎えた。

「今日とてもうれいものが見つかったわ」

なんだろうと尋ねても、妻は意味ありげな笑顔を見せるばかりで口を開かない。早々に食事を終えると、妻はようやく思わせぶりに立ち上がったが、さらにじらす。

「わたしがいつて言うまで目をつむつていてね」

少しいらだちながら言われたとおりにすると、妻は戸棚から取り出したものをテーブルの上に置いたようだ。音からすると本のようなだが、まるで想像がつかない。

「いいわよ」

という声で目を開けると、そこにあつたのは睡蓮のポー

ルペンアートだった。以前のマンションで彼女に預けた三冊の画帳が並んでいる。

「わたしもずっと忘れてたんだけど、今日押入れの整理をしていたら出てきたの。なつかしいでしょう」

妻の説明にあおられたように動悸が激しくなって、呼吸も苦しくなる。見てはいけないものを見てしまったように、あわてて視線を外したが、妻にはわからないことだ。

「今度の連休に池をめぐって、ここに描かれた睡蓮を一緒に見て歩くっていうのはどうかしら。全部でなくてもいいから、あなたが気に入っている場所でわたしも見てみたいのよ」

耕治は思わず大声を上げた。

「やめろよ。僕はそんなものはない」

これほどの怒りを見せたにもかかわらず、妻は平然と問い返してくる。

「どうして？ 自分で描いたのに」

「頭が痛くなつて描けなくなった時のことを思い出すからじゃないか」

「だって、治ったんでしょ」

「治りきるってことはない。環境が変わればまた出てくるかもしれない」

「そうなの。ごめんさい。でも、わたしはこの絵を見ているととても気持ちが落ち着くの」

「僕はただ……」

「さあ、もう見ないから安心して寝てらっしゃい。わたしはここで何もせずに朝まで起きていますから」

ほとんど眠れないままに一夜を明かし、会社からの帰りに鍼灸院に寄った。耕治が事情を話すと、先生の表情が目に見えて変わった。

「それで、奥さんは今はどうしているだろう？」

「たぶんあの絵を見ているんだと思います。夜通し起きていて、僕が出かけるのを待っていたみたいで、画帳の表紙をにらんでいましたから」

先生は厳しい表情で考え込んだ。

「このままでは危ない。実はこうなることを以前から心配していたんですよ。奥さんは一度神経科で診てもらって、できれば少しの間でも入院して治療した方がいいんじゃないかな。必要なら紹介するよ」

先生はうつ病ではなく、統合失調症を疑っているようだった。

駅から家に帰る道すがら、風はまだ冷たいが日の光の温かさを感じた。もう三月も半ばを過ぎている。太陽が顔を出して風がやめば、四月半ばを思わせる。だが、次の日は雲が太陽を閉じ、風が山から吹き下ろし、二月に逆戻りする。寒暖を繰り返しながら季節は春に変わる。

花咲かばあさんを思い出した。厳冬期を過ぎ、いつもな

浮き浮きした妻の口調に、却って強い不安がよぎる。

「とにかくしまつてくれよ。ぼくは見るのも辛いから」

逃げるようにして洗面所で歯を磨いて戻ってみるとテーブルの上はきれいに片づけられていた。精神安定剤を口に含み、布団に入って電気を消す。やがて隣で妻の寝息が聞こえてきて、耕治の動悸も収まり、浅い眠りに吸い込まれていった。

夢の中で、がさがさと虫が這いまわるような音が聞こえた。目覚めると、音は隣室のダイニングキッチンから聞こえてきているのだとわかった。

起きあがって、そつとふすまを開けると、キッチンには電気がつけられ、妻が椅子に坐つてテーブルの上に画帳をひろげて、先のとがった鉛筆を少し浮かせて、ボールペンアートの輪郭をなぞっている。耕治の動悸が激しくなり、胸が締め付けられる。

「やめてくれよ。いくら別の部屋でもそんなことをされたら寝てられないじゃないか」

妻はいかにも不服だという顔を夫に向けた。

「そう、わたしは一晚中眠れなくてもいいから、自分だけ眠りたいってわけね」

「そんなことは言っていないじゃないか」

「わたしを助けたらいいというの嘘ね。いいのよ、それで。あなたはあなたなんだから」

らもうとつくに姿を現わすはずの季節だ。ところが三月半ばになつても姿を見せない。四月になればまた姿を見せるだろうか。足がだいぶ弱っていたから、もう現われないかもしれない、そうなればさびしくなる。ふとあることを思いついた。四月中にあのおばあさんが姿を現わさなかったら、会社を辞めて先輩の誘いに乗ってみよう。おばあさんが再び姿を現わしたら、これからもあてのない明日を信じて、辛抱強く妻につきあおう、と。妻の状態は相変わらずで、毎晩のように夜通しダイニングキッチンにこもっていた。だんだんと異世界に入っていくようで、不気味だった。花咲かばあさんは四月になつても一向に現われず、花壇にもスロープにも主のいないままに春の花が咲き乱れていた。おばあさんに賭けた結果がはつきりと出たが、行動に移すことはできず、自らを追い詰めつつあった。

6

五月の連休が終わって、最初の土曜日のことだった。どうしても週内に片づけなければならぬ仕事があつて出勤し、重い心を抱えて会社から帰宅すると、玄関ドアの鍵は開いているのに妻の気配がない。(このままでは危ない)先生の言葉が頭をよぎり、大急ぎでダイニングキッチンのドアを開けた。目に入ったのは、部屋を囲む壁にびっしり

貼られた睡蓮の絵だった。寝室に入るとふすまや壁にも貼られていた。画帳からはがしたA4サイズの紙を、セロテープや画鋲で乱雑に留めてある。布団は敷きっぱなしにされているが、妻の姿はなかった。

「麻ちゃん」

大声で呼んでも返事はない。携帯電話はいつもの場所に置かれたままになっている。買い物か散歩に行ったのではないか。自転車で最寄りのスーパーから公園まで探し回ったが、どこにも見当たらない。ようやく事態の深刻さに気がついた。捜索願いを出すために警察に向かおうとして、ふとテールの上に新聞が広げられているのに気がついた。真ん中あたりのカラー写真が目についた。睡蓮が咲く池が写っていた。テールにかがみこんで、「モネの池？」という見出しがつけられた記事を読んだ。岐阜県S市の神社の脇にある名もない池の睡蓮が見ごろを迎えたが、モネの名画に描かれている睡蓮池にそっくりだというので評判を呼び、遠くから見る人でにぎわっている、というのである。

耕治は旅行鞆に妻と自分の着替えを詰め込み、急いで玄関を出た。O駅で東海道線の快速に飛び乗った。窓が西日で眩しい。耕治はカーテンを引いて目をつむって考えた。治療院に戻って先生に相談すれば妻は精神病院に入院させられてしまうだろう。だが、これ以上彼女を苦しめたくはない。

妻は絵のことしか頭がないようだった。

「そうだな。池と睡蓮がマッチしてるな」

「それなら安心したわ」

受け答えの様子が昨日までとあきらかに異なってしまうていることをどう解釈すればよいのかわからなかった。統合失調症の度合いが一段と進んだのか。やはり楽にしてやるしかないのか。

「あすの朝、日の出に照らされて咲くところが見たいの」
駅近くのビジネスホテルに宿を取った。昨日からの疲れがどっと出て、すぐに睡魔に引き込まれていく。

体をゆすられて目を覚ました時には、窓から朝日が差し込んでいた。時計の針は六時を指している。

「ねえ、早く起きて、支度してよ」

せかされるままに着替えを済ませ、フロントで支払いを済ませて駅前のタクシー乗り場に向かった。五月晴れの日射しに明るく照らされて、街路樹の新緑がまばゆい。妻はタクシーを降りてから腕を絡めてきた。二人は身体を寄せあったまま、開いたばかりの門をくぐって、池に近づいて行った。視線の先に水が見えた。目の前に池庭が広がり、朝に特有の透明感のある光が水面に照り映え、睡蓮が間近に迫ってくる。網膜から後頭部に衝撃が走り、上半身が揺らぐ。妻が突然立ち止り、右手を前方に突き出し、ボールペンを持った形をした指が睡蓮の花弁をなぞって動いた。耕治

いというのが耕治の気持だった。それに、たとえ入院ということであれ、妻と離れ離れになってまで人生を耐えるつもりはなかった。もう終わりにしよう。自分自身、この身体にしてはよくがんばれたのだし、なんら恥じることはない。時と場所は決めていない。妻と一緒に何日か旅を続けながら自然に機会は見つかるだろう。このところ苦しめられていた煩悶から意外なきっかけで解放されると思うと、肩の重しがとれて楽になり、背もたれに身を任せて目をつむった。

岐阜で降り、バスに乗り換え、1時間余りで終点に着いた。そこからタクシーで池のあるN神社に向かった。着いたときは五時を回っていて、風景は光を急速に失いつつあった。園には人影はまばらだった。妻の居場所はずぐにわかった。池の傍のベンチに一人座って、睡蓮を見詰めていた。うしろから肩を軽くたたきと振り向いたが、驚きの表情ではなかった。

「心配したよ。麻ちゃんは何時の電車できたの」

「何時だったか覚えてないわ。新聞に載っているのを見て急にここに来たくなっちゃったの。別にいいでしょ」

「それはいいけど、ごはんはちゃんと食べたの」

「食べたわ。駅前の食堂でおうどんを。そんなことより、いいでしょ。ここ。モネの絵よりも、あなたが描いた絵と似ていると思わない？」

がペンを持った形の手の上に自分の手をびたりと重ねた。

「さあ、麻ちゃん、描いて」と耕治は言った。「いいから描いて。きみの動きを追っていくから大丈夫。さあ、描いて」

妻の手が動いた。二人の指の動きが重なった。われわれは二人で一人なのだ、と耕治は思った。妻は心の病のさらなる深みにはまろうとしているのではなく、耕治と一緒に睡蓮の形をなぞることで病から抜け出そうとしているのだ。耕治の鼓動は収まり、妻の動きも止まった。妻の口からかすかな吐息が洩れた。

「その調子だよ、麻ちゃん」

左の腕で妻を抱き寄せた。妻はまだ心ここにあらずといった様子で、池を見詰めている。きつと治るという確信が生まれ、二人のきずなの強さを信じて、さらに腕に力が入り、強く抱きしめた。「痛い」と妻が悲鳴を上げ、あわてて力をゆるめた。それでも耕治はかまわず抱きしめることはやめなかった。二人に残された歳月の長さは分からないが、命ある限り、離れることはない、と耕治は心に決めた。麻子が首を回した。何やら言いかけたように口を開いたのだが、その首を戻して、また口を閉じた。それが何だったのか定かではないが、耕治には言おうとしていることがわかった気がした。

単行本「核の信託」舞台を見逃した方に「核の信託」単行本とDVDをお勧めします。

舞台の感動をこの本とDVDが再現します。

戯曲

核の信託

—原爆をだれの手にゆだねるか—

五十嵐 勉

1000円(税込/送料共) 御注文はアジア文化社まで

DVD 1500円 本+DVD 2000円(送料とも)

アジア文化社

睡蓮

弦 106号

同人雑誌優秀作

弦 第106号



長沼宏之

ながぬま ひろゆき

1943 岡山県生まれ
和歌山大学経済学部卒業
執筆歴 約20年
所属同人誌 弦の会
三重県四日市市在住

ユダヤ難民を救った男
樋口季一郎・伝
木内是壽



ナチスの弾圧にシベリ
きた2万人のユダヤ難
民を、命を賭けて救っ
た日本人特務機関長樋口季一郎少将。
厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英
傑の軌跡を辿る歴史評伝。

ア経山で満州に逃れて
民を、命を賭けて救っ
た日本人特務機関長樋口季一郎少将。
厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英
傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

1540円(税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

斎藤緑雨
小林広一



明治文学の草創期に彗星の光芒を放って文芸批
評の先駆をなした若き文学者斎藤緑雨。樋口一
葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っ
ているのはあなたの大成です」と率直にぶつけた早
世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家
ここに蘇らせた。畢生の「斎藤緑雨」文芸評論集。

アジア文化社

1650円(税込/送料共)

弦 愛知県

同人誌相互の交流を軸に

はじめに

「弦」が二〇〇八年に同人雑誌紹介のページを頂いて以来、今回の長沼宏之さんの「睡蓮」の優秀賞受賞に伴い、四度目の機会となった。十二年間に四回というのは、まことに名誉なことである。創刊五十二年、次号で一〇八号を迎える「弦」は中部地方では歴史のある同人誌ではあるが、同人はそれほど多くはなく、どちらかと言えば地味な雑誌かもしれない。いい意味で堅実ではあるが、老人誌であることは言うまでもない。

さすがに四回目ともなれば、会のあらかじめ書き尽くされた感がある。今回は少し視点を変えて、「弦」と他の同人誌との交流を中心にとめてみたい。

中部ペンクラブの活動

一九八六年に中部ペンクラブが発足するまでは、「弦」に限らず同人誌相互の交流というものはないに等しかった。結成以来三十五年、中部地方の同人誌のありようは劇的な変化を遂げた。これによって多くの他誌の作品に接するこ

とができるようになり、会員同士の親睦を図るという効果も生まれた。

まず年一回の総会とその後の講演会。今までの講師には、村田喜代子、中村文則、堀江敏幸、谷川俊太郎、平野啓一郎、稲葉真弓、吉村萬壺、江原登、中上紀さんなど著名な作家も多い。講演終了後の親睦会では講師も含めて、交流を深めている。

次に、年一回開かれる「会誌中部べん」を読んでのシンポジウム。中部の同人誌からの公募作品から選ばれた中部ペン文学賞の作品を中心に、会員の掌編小説、エッセイなどについて一般の参加者と共に活発な意見交換が行われる。三つ目は、年二回発行の機関誌「中部ペンクラブ」によ



2013年徳島県三好市での同人雑誌フェスティバル前に中村代表、吉村さん、中央に名村・宇佐美・木戸さんら



「弦」の編集委員、左より木戸、國方、長沼、山田、市川、白井

る情報の共有。会員の作品の批評も掲載される。

四つ目は、押しかけお招き合評と称する合評会。他の同人誌の方々と交えて忌憚のない作品批評を行っている。また、文学散歩と名付けた行事もある。名古屋近郊のホテルに出かけ、文学座談会をしたり食事を楽しんだりする企画である。文芸セミナーでは、小説ばかりではなく他の領域で活躍されている方の話を聞き、見聞を広める機会として

いる。ペンクラブの運営は三田村会長はじめ理事会、文学賞委員会、編集委員会、行事委員会などに属する会員の献身的な活動に支えられている。「弦」からは、五名がそれぞれの会で活躍している。

同人誌による批評コーナー

「弦」では中村賢三代表が、毎号「同人誌の周辺」と題して中部べんの会員の作品ばかりでなく、他誌の批評もを行っている。また、豊橋市の「果樹園」では今泉佐知子さんが、「同人誌をちこち」という欄で同じく他誌の批評を展開している。自分の作品がどこかで注目されているということに励みになると同時に、多くの人に作者と作品を知ってもらえるという意味でも意義深い取り組みと言える。批評が人を育てるということは、疑う余地はない。

全国同人雑誌会議と共に

第一回全国同人雑誌会議は、二〇〇五年に名古屋市中

開催された。講師に村田喜代子さんを迎え、同人雑誌に向けてのお話をして頂き、「同人雑誌という土俵」をテーマにシンポジウムが行われた。五〇〇名ほどが集まり、大成功であった。

第二回は二〇一〇年、徳島県三好市で行われた。全国から五十誌、中ペンからは十五誌、二十八名が参加した。その三年後、同市で富士正晴全国同人雑誌フェスティバルが開催され、「文芸中部」と「弦」が同人雑誌賞特別賞を受賞。中ペンからは七名が参加して交流を深めた。この選考委員の一人である吉村萬壱さんから「文芸中部」と「弦」の作品批評を直接頂く機会を得た。この時のご縁で中部ペンの文学講演会の講師をお願いしたという経緯がある。

第三回は二〇一九年、池坊東京会館で開かれたことはまだ記憶に新しい。シンポジウム「同人諸家の提言と話し合い」では、予定時間を大幅に延長して熱心な討議がなされた。会議には中部ペンクラブから二十七名が参加し、有意義な時間を過ごした。



『海』100号記念合評会に『弦』などから（押しかけ参加）5名。『海』同人とともに。後列左より、国府・長沼（弦）・宇梶・白井（弦）・白石、前列左より紺谷・山口（富山より）・遠藤・中村（弦）・松島（文炎）

弦の会 〒463-0013

愛知県名古屋守山区小幡中3-4-27 弦の会

TEL 052-794-3430

翌日、五十嵐さんの案内で多摩川沿いの川合玉堂美術館を訪れたことが心に残っている。特に文芸思潮の同人誌評が、同人誌活動をしている者にとってどれだけ励みになっているか計り知れない。同時に毎号発表される作品群はどれも魅力に溢れ、読む楽しみだけでなく創作活動に力を与えてくれる。多くの同人誌作家が、文芸思潮の存在に勇気を与えられていることは想像に難くない。そういう雑誌が常に傍らにあるという幸福をかみしめながら、全国の同人誌の活動がますます盛んになり、交流が深まっていくことを願っている。

終わりに

同人誌活動はいつも順風満帆であるはずもなく、「弦」も何度かいろいろな困難に見舞われた。経済的な問題と同人の高齢化は全国的な問題である。しかし、どんな作品を目指すにしろ、何もないゼロから言葉を紡いで何かを創り出すその喜びを知ってしまった者は、もう文学から離れられないのではないのか。感覚を研ぎ澄まし、社会に向かってアンテナを張り巡らし、知的な好奇心を育てなければよい作品は書けないのだという覚悟が、老化の進む脳細胞を鼓舞する。全国に物を書く仲間がたくさんいるのだという連帯感に、大いに元気づけられる。書き続けるしかない。

（文責／木戸順子）



弦の合評会にはいつも20名ほどが集まる

翌日、希望者による東京文学館巡りが、文芸思潮の五十嵐勉さんの案内で行われた。

全国同人雑誌会議により、中部地方での広がりにも留まっていた同人誌同士の交流は、一気に全国に広がっていった感がある。遠隔地の同人誌と雑誌交換も行われるようになった。何より全国にこれほど多くの文学を愛する人々がいるという目を当たりにして、勇気と力を与えられたような気がする。

文芸思潮の存在

「弦」に関して言えば、二〇〇八年は青梅市、二〇一六年は東京太田区民プラザ、二〇一九年は東京池坊会館での表彰式に参加させて頂いた。誌上で名前しか知らなかった方と直接お会いして言葉を交わすことができるのも貴重な体験である。ここにも文学を愛する多くの人々が参集し、いつも刺激を受けている。個人的には二〇〇八年、青梅市での表彰式の

川 霽

柳沢 とも子

家込みを抜けると径は田中へ入る。田の水の一面に、早苗が風になぶられている。風は温く心地よいが、径を急ぐ美寿には、あえぐたび、湿気た風が肺臓をふさぐように重く感じられる。径はどこまでも白く続く。その径の果てもやもやと揺らいで消えている。

子供が熱を出している。それを家へ置いて美寿は往診を頼みに医院へ走ったが、頼りの医者には法事で不在だという。医院の玄関先まで行ってガラスにある貼り紙で初めて知った。売薬はひとり身の美寿にはどこか恐ろしく、自分の見立てで子供が重篤なことになったらと思うと手が出せなかった。薬局で迷って結局ゴムの水枕を求め、それをしっかりと抱いてひたすら帰りを急いでいる。

弱い子で、痢が強く泣いてばかりいた。痢とは、扱いていっている。門を入ると緑の屋根の可愛らしい平屋がある。ただいま。りょうちゃん。

短靴を三和土に脱いで上がると、すぐの居間に寝かせた子供はまだ半目を開けてうつらうつらしている。恐る恐る額に手をやると、まだ熱い。出かける前より熱は上がってもないようだ。下がってもいい。美寿は水枕を設え、子供の重たい頭の下にそっと滑り込ませた。昨夜、子供は眠らず、ずっとぐずぐず言っていた。ほっとしていいのかわかからないが、とにかく子供は目を開けて美寿を認めたあと、少しは水枕が効いたのか、やがて目を閉じて眠りはじめた。薄い布団の胸がゆつくりと、かすかに上下している。白いネルのパジャマの衿元も濡らしたハンカチで少し拭いてやり、子供の顔を見ながら見寿は膝を抱いて柱によりかかった。

人の気配で目覚めたとき、窓越しの空は薄藍色に、その底は朱色に染まっていた。その空の色に縁取られた黒い影が、美寿に顔を寄せて、疲れているみたいだね。起こしちゃったかい。電灯点けようか。

とうん。もう少しこのままでいい。空が、
ああ、きれいだね、空が。

男は上唇の尖った口を美寿の唇につけると、髪を撫で、

に困る子供の憎さを、産んだ者のせいにするための言葉だ。もとより家には居られなかった。父のない子を産んだ美寿は、子供の父親が誰か、口を割らせようとする家長の祖父に答える言葉を持たなかったからだ。

だって、ほんとうにわからないのだから。

要領を得ず繰り返すばかりの美寿に、祖父は体を震わせるまでに怒り、嬰兒ともども美寿を放擲した。

径はようよう幅の狭い水路に突き当たり、水路づたいに上流へ進むと、用水のほとりの川に出る。川のもう少し上のほうで、堤防の護岸は石組みからただの草地に変わる。その先の堤防ぎわの、川の水面より低い草地に、美寿と子供の家がある。川柳の茂みに埋もれるように質素な板塀があり、塀の上から、花蘇芳と今は終わりにかけた若い山桜がの

頭にも唇を当て、その唇をそここ動かしたあと、緩い力で見寿の体を抱き、そっと放した。美寿に身を寄せて坐った体からは、消毒薬のような匂いがする。

ああ、来てくれた。カワセさん。

いつも消毒薬の匂いがあるからほんとうに医者か、病院で働いている人なのだと美寿は思っている。カワセさん、カワセドウジという名前は知っているが、ほんとうのことを言うと素性はよく知らない。

子供の頃から美寿はよく川へ行った。

川の流れがたわんだ堤近くに屋敷森をめぐらせた家がある。その祖父の邸の、使用人部屋へ続く渡り廊の手前の部屋で美寿は暮らした。父も母もない。美寿を捨ててどこかへ行ってしまったと聞いていた。

縫い物や手習い、高齢の大伯母の世話の手がふと空くと、足は知らず堤に向いて、美寿はぼんやりと水面を眺めた。

大して深くも荒くもない川だが、ときたま人が溺れ、出水があった。大水の夜が明けると邸の二階からは、堤が切れて濁り水に浸かった一帯が見渡せた。水が引くと、屋敷森より一段低いところに戸板やら流木やら泥まみれのさまざまが折り重なっている。上のほうの養豚舎が浸かったあたりには、一頭の豚の死骸を目ざとく見つけた悪童たちが、泥をかぶった板にそれを載せ、祭りのように浮き立って叫

声を上げながらどこかへ運んでいったのが見えた。

ふだんでさえ、子供は川蟹の脚をもいだり小魚を殺したりする遊びに際限なく興じる。自分も子供だったが、そういう仕業が嫌で、川で出くわすとわざとじっと見て追い払おうとした。

蛙を釣っては尻へ差した麦藁に息を吹き込む遊びのときに、いちど、とうとう堪えきれず何人もの子供の中へ入っていつてやめさせようとした。それをかえって面白がって、腹の破れた蛙を何匹も投げつけてきた男児が、しばらくして川で溺れた。不覚に陥り、何か月も目を覚まさぬまま亡くなった。美寿が怖くなって大伯母に話すと、普段は意識がぼんやりしている大伯母はそのときふと正気に返って、わるさしたれば、しりこだま、お前をいじめた罰を、水神様から受けたのだよ、とつぶやいた。

石橋の上からのぞくと、川のなかに誰かがいるのに気付いた。霏がかかったようにさだかでないが、こちらを見ている。そして、目を凝らすときままって魚影のようにするりと消える。人に言えはいぶかしく思われて、美寿はじきに誰にも言わなくなった。そのかわり、それは、もう一人の自分だと思うようになった。彩雲を映す漣は心を奪う。懐かしく頬が緩む日もあればさすがに涙が落ちる日もあるが、何も映さない自分の心の洞が満ちる日は決してこない。そしたらいつでもこの川へ入っていつて自分はいなく

だったような気がする。

次の年の秋に子供を産んで、祖父に、邸から追い出された。祖父に子供の父は誰かを聞いたとき、好いた男が子供の父だと言えられたら、とうに言っていた。だが美寿はそのとき何の心当たりもなかったばかりか、男と睦みあった覚え自体がなかった。睦みあわずに月のものが遠ざかり、つわりがきて、祖父母の知るところとなり、祖父が激しく怒り、しつこく問いただす。何度問われても答えられるはずがない。そんなことを繰り返すうちに腹が張り、痛みがきて、祖母がしるべの助産師を邸によび、もつと痛くなるのだろうと美寿が我慢していた夜半、あまりの痛みにはうつとする耳に産声が響いた。

取引のある建築会社のでてて祖母が用意したこの家に移ってからなんとか暮らしの真似事ができるようになるまでの期間のことは、あまり覚えていない。もとよりほんやりした娘だった美寿が、子供の母になったからといって性質が変わるはずもない。二人だけの暮らしになっても子供はかまわずよく泣いた。

その日も、子供が泣き続けた。おむつを替えても乳を含ませようとしても一刻ちかくも泣き止まず、美寿も泣きたい気持ちで子供をおぶって外に出た。

背中の子供は泣きつづけ、田中の径の足許は昏く、水が張られた田に映るほの明るい空が穏やかならざる光を放

なればいだけだと思うと、少しく気持ちがなくさめられた。きつと、懐かしい人のように水が自分を抱いてくれる。

遠く感じるが、ほんの少し前のような気がする。晩秋のことだ。用水の縁に引つかかっているものが甲羅の割れた亀だと気がついて、美寿は子供のころの悪童の仕業を思い出した。ともかくそれが流されないように草の上に上げようとして滑り、あやまって用水に足を落とした。その刹那、流れに足をとられて倒れ、腰ほどまでしかない水に背中から浸かって水を吸った。頭の芯が痺れたようになって冷たい水の中で力が抜ける。冷たさも流れも何も、あとは分からなくなった。

長い夢のような断片が、いつまでもうつらうつらする美寿を沈め、醒めようとする度に引き戻す。流れは滑らかな腕で美寿を抱き、離そうとしない。痺れた体をするりと緩めて自分の中に入ってきたものの感触には抗うことができなかつた。水底に留めつけられたように動けない体の隅々までが別の痺れで満たされていく。怖くはなかつた。懐かしく、いつしか頼りきって身を委ねていた。ああこれで終わる、虚ろな自分も何もなくなるのだと安心していった。

目覚めたのは病室だった。何日も昏睡していたと聞かされた。あやふやな記憶で、もしかしたら後付けの記憶ではないかもしれないのだが、そのとき最初に美寿を見下ろしていたのはたぶん白衣を着た人影で、それがこのカワセゆつくり、ゆつくり動いている。

ざつ、と砂利を踏む音とともに人影に行く手を阻まれ、美寿はぎよつとする。思わず立ち止まり身を固くするが、人影は美寿にこう話しかける。

ああ、やつぱり、あなただった。はは。

美寿よりも背が高いその人の顔は、薄暗くてよく見えない。顔が見えないのに相手は美寿にあなただったと言っしばらく黙ったまま二人は向きあつた。子供は相変わらず泣いている。痺れを切らして美寿が、

あなただつたつて、あなたは誰なんですか。私が誰だか知っているんですか。

怒らないでくださいよ。病院で会いました。入院していたでしょう。

入院していた人間なんて世の中に「ごまん」といる。子を背負っていればその子を産んだときは病院にいたかもしれない。子供のいる若い女を狙ってどうかしようというのか。田中の径にほかに人影はない。たとえ逃げたとしても子供を背負っていれば逃げ切れぬ。自分はどうかなくても子供にだけは手出しさせないと、一瞬に、我が身を捨てる悲壮な覚悟を美寿が決めたとき、相手が意外なことを言う。

たしか、美寿さんでしょう。そうだね。はは。部屋の名札を見たから覚えている。

あなたは、

ぼくは、カワセといえます。病院で働いている。美寿さんが、溺れたでしょう。良くなるまで病院にいたでしょう。

そう。それですけれども、あなたは、

その子は、あなたのお子ですか。

ええ。

当たり前だ、と美寿は口に出さずに相手を睨みつける。

私が背負ってるのだから、私の子に決まっている。

いやだなあ、そんな恐い顔しないでくださいよ。

相手はまるで美寿の顔が見えるかのように言う。

泣いていますね。

泣いてなんかいません。

泣きそうな心持ちを見透かされたとき、ひとり、恥じ入る

美寿。祖父に追い出されたとき、子を授かったとき、そも

そも、小さいころに生みの母と引き離されて心もとない思

いが始まったときから、ずっと泣きたい気持ちだった。そ

れで今、訳の分からない男に捕まって進退窮まっている。

ぼろり、と涙がこぼれ、ぼろりぼろりと止まらなくなった。

おやおや、親が、泣いてはいけませんよ。どれ、お子をお貸しなさい。

言うが早いかカワセは見寿の乳の下の結び目をほどいて

二本の指の腹で押しながらぐると一周する。すぐに、

ぼくはこれから病院へ行って戻ってくるから、待っていて

ください。

そう言い残してカワセが出ていったあと、美寿は仕方な

く、子供の頭を撫でながら待つ羽目になる。

りようちゃん、どう思う。

どうもこうも、子供は泣いている。家に帰り着いて居間

の布団に下ろしてからもしばらく声を上げて威勢良く泣き

続けていたが、疲れたのか、すん、すん、と頼りないす

り泣きが変わっている。相談の相手もない我が身を美寿

は思い知る。

町中にある、溺れたとき目覚めた病院へあの男が行って

戻ってくるのであれば、それなりの時間がかかる。その間

に我が身を守り、何より子供を守る手立てを講じなくてよ

いのか。結構な時間、何も行動を起こさずにぐずぐずと思

案を巡らすばかりだが、子供は泣き止もうとしている。そ

のうちに、カワセなる男に出遭ったのは何かの間違いで、

子供は泣き止んで眠り、このまま安らかな夜が来て、明日

になれば目を覚ました子供と二人、この家でものを食べ、

遊んだり、子供の機嫌の良いときには頼まれた縫い物を仕

上げたりして、今日までと同じ暮らしが続いていく、非常

時に逃げ遅れる者の常の心根として、そう美寿は思い込む。

果たしてからからと控えめな音を立てて戸が開き、こめ

おおい紐ごと子供を抱き取る。あああ、と抵抗する気は表明するが、するりと紐が解けると、子供はちんとカワセの腕に収まり、相変わらずひどい声で泣いている。カワセがもぞもぞと身じろぎして子供の腹を触ると、子供はいっそう声を高くして泣く。

子供に何をするのかと身構える美寿に、

お子は、お腹が悪いのかもしれないね。どれ、ぼくが抱いていくから、一度うちに戻りましょう。

と言う。踵を返して先に立ったカワセがずんずん田中の

径を歩き、子供は泣き続け、薄暗い径を、美寿が慌ててつ

いていく。

戻りましょうって、人の家を、まるで知ったように。この

のまま先に立ってこの男が自分と子供の家まで行き着いた

ら、と心底気味悪くなりかけたとき、

ここから、どちらへ行くのかな。

と、すっかり暗くなった径の、終わりの岐に声が響く。

あ、こっちは、と美寿は裏腹の答をする。カワセの言

いなりになるのに歯噛みをした心持ちだが言い出せず、

じきにそのまま家へ着いてしまう。

泣いている子供を抱いたままカワセが門の内へ突っ立っ

ているのを、美寿は仕方なく、玄関へ入れる羽目になる。

ばたばた、と靴を脱ぐとカワセは、居間に敷きっぱなしに

なっていた布団へ子供を寝かし、服をまくって子供の腹を

んくください、とカワセの声がしたかと思うと、すぐに障子

を開けて居間へ入ってくる。一度、半分寝入っている子供

の服をまくって腹を二本の指で押していたが、ぬるま湯を

手桶に半杯くらい持つてきてください、と言う。きっぱり

としたその言い方に押されて台所へ立ち、ぬるま湯を持っ

てきたときには、透明な小瓶からスポイト様のものへ移し

替えた何かが用意されており、カワセはそれを、半透明の

手袋をした手でぬるま湯の桶へ入れる。

温めてやれば、お子も厭がらないからね。

しばらくしてそう言うと、要領よく服を開いておむつを

外し、温めたものを脱脂綿で拭いて迷いなく子供の尻へ差

す。再びおむつをして布団を掛けられた子供はうつらうつ

らしたままおとなしくしていたが、そのうちに、布団を通

してでも聞こえるほどの音がして、子供は泣き出した。

よしよし。

と言うとカワセは手袋をしたままの手で子供のおむつを

外し、出たものを始末して、美寿に持ってこさせたい

なおむつを子供にあてがう。子供は泣き止み、おむつを替

え小さな衣服を再び整えるカワセの手並みは美寿よりもよ

ほど確かで、子供のほうも大して暴れもせずとされるがま

まになっている。

十分ほどするとまた音がして、またおむつを替える。

こうして都合四度おむつを替えると、それきり子供は泣

くこともなく、眠り続けた。

静かになると、風が川柳の茂みを揺らし、水が川底の段を落ちる音が混然と、途切れることなく美寿とカワセの間を流れる。

お子は腸が、と言い掛けるカワセ。

え、チヨウが、と美寿。

胃の腑に続く腸ですよ。それが普通の子より長いのかも知れないね。いちど病院で診てもらってもいいと思うが、まあたぶん、ぼくの見立てどおりでしょう。泣く子は腎臓とか、ほかのところが悪いこともある。もしも腎臓だったらいずれ移植が必要になったりもするが、熱もないようだから今のところはそう心配ないでしょう。腸なら、もう少し大きくなって活発に動くようになれば力もついてずいぶんましになります。

そうなんですか、と、もう、言われたことを聞くだけの美寿。

それまでは、今みたいにしていやたらいいですよ、と言つてカワセは手袋を外した消毒液臭い手をふわりと美寿の肩に置いて立ち上がり、お子が苦しがつて泣くほど困つたら、ぼくを呼んでくれればいつでも来ますよ、と言いつつして玄関から出ていった。

泣くほどつて。

子供の寝息が少し大きくなって、静かな川の音に重なつ

ずかるが、機嫌よく声をたてることもある。そんなとき、カワセはこらえきれなくなつたように抱き上げて子供の顔に頬ずりをしようとするのだが、子供はそのとたん顔をしかめて泣きはじめる。慌てて抱き取る美寿は、渾身の力で泣く子供と、泣き笑いの表情をたたえるカワセの顔を見比べる。せつなくて、おかしく、ずっとそのままだった。胸の芯をひたす温かい流れを何と呼ぶのか、美寿は知らなかった。

あるとき子供を次の間に寝かせて、カワセを迎えた。美寿はカワセに触れてもらいたいと思つた。夜半に子供が安らかな寝息を立てはじめて、カワセが玄関に立つ一瞬にカワセの顔を見ると、カワセも美寿に触れたいと目で言っていた。そのあとそのまま美寿は、初めて男を知つたが、以前あつたことのように思つた。

カワセの体は、少し冷たく感じた。指先といい口といい、腋下や股や、美寿の中に入ってくるものまでがひんやりしていた。

ただ夢の中にいるようだった。カワセが訪れるようになって時折、カワセが好きだと美寿が思うと、カワセも同じように思っていることがその顔で分かつて、睦みあつた。消毒薬のような匂いがあるので何度も勧めるのだが、カワセは風呂へ入ることをひどく厭がった。

子供がよく動くようになると、最初の夜にカワセの言つ

て聞こえている。

お子が苦しがつて泣く。泣くほど困つたら呼ぶ。大人なのに人前で泣いた自分をカワセがどう思つたかと美寿はあらためて恥じた。

それからは呼びもしないのに、ひどく泣き続けて困り果てる折を見計らうかのようにカワセは時々、美寿と子供の家に来た。控えめに戸を叩く音と、ごめんください、という静かな声とを、子供の泣き声が響く小さな家の中でも聞き分けて、いそいそと内鍵を開けに立つ自分を、美寿はいつしか不思議とも思わなくなつた。

居間に入るとカワセは上着を脱ぐ。何度来てもまず、子供の腹を二本の指でぐるつと触つて診ると、そのあと確かな手つきで処置をする。カワセは再び上着を着るとさつと帰つてしまう。子供が楽になると美寿は心から安心する。それから半月くらいは、子供も美寿もそれなりに安寧に暮らすことができる。

泣いてばかりいた子供が、おむつを替えたあと微笑むような表情を見せるようになると、カワセは子供の頬に触れた。人差し指と親指で子供の両頬をはさんで、柔らかさを愉しむように何度もつまんでいる。唇が尖つて子供がおかしな顔になると、その顔はどこか、子供の手当をするとき唇を尖らせるカワセに似ていた。美寿が笑うのを見てカワセが微笑む。頬をつままれるとたいがい子供は嫌がつてむ

たとおり、腹のことでむずかることはしだいに間違になつた。それを見越したようにカワセの来るのも少し間が空き始める。

上着を着て玄関へ立つカワセの袖を何度か美寿は捕らえたが、その度に何も言えなくなつて俯いた。帰らないでほしい、一緒にいてほしい、そういうことが言えなかった。来たくなくなつたら、この人はここに来なければそれで済む。

あるときとうとう勝手にぼろぼろと出て来た涙を、カワセは困つた顔をして指で拭つてやると、何かを言いあぐねたまま霽のなかを出ていった。

そんな折、大伯母の往生を知らせる祖母からの使いが来て、美寿は子供を背負つて邸へ行つた。

祖父は美寿を見ても強情に口をきこうとしなかったが、祖母は美寿の部屋まで一緒に来て子供を抱くと、自分の腕におとなしく抱かれた子供にいとしそうに話しかけ、美寿を労つた。

小さくなって目を閉じた大伯母の顔を見て、子供の頃の誰かと間違つて甘えた声で美寿に世話をねだつていた大伯母の姿を、さびしく思い出した。

昔のねえやと間違えていたのだろうと祖母は言つた。何代も同じ家から子守を雇っていた頃の話だよ、と。

生の終わりで、人は大人として過ごしていた自分の記憶

を切り離してしまうときがくる。母から離されたとき美寿がものすごく泣いて手に負えなかったと、憎々しげに祖母から言われたことがあったが、母のことも泣いたことも自分では覚えていなかった。人は子供の頃の記憶もいつか切り離してしまう。毎日母のことを思い出して泣いていたのに、その思い出していた自分を覚えていない。どんなことも、いつか忘れてしまうときが来る。

そのままでは決してないのだというさびしい思いに、ひたっている間はなかった。邸にいる誰もが子供と見れば頬を触りたがった。普段と違う大勢の縁者の中で、人見知りが始まった子供を抱え、愛想笑いを浮かべて人を避ける。子供を守るのに精一杯で、数日は夢中のうちに過ぎた。

そのなかでただ、カワセが自分を忘れることが恐ろしかった。

初七日まで邸で過ごしながらも、この間にカワセと行き違いになったらと気が気でなく、美寿は葬儀の後、急いで家に戻った。

戻って数日経っていつものように子供がむずかり始めたが、おむつを汚す小水の色がいつになく赤いのに気づくと、美寿はとたんに、どうしていいのかわからなくなった。カワセは現れず、自分がいなかったせいで二度と来なかったら、と、取り返しつかない気持ちになった。

の支度がととのって、穏やかな笑みをたたえた看護師が、脱水を防ぐものだと言明する。

検査を、明日してもらおうから。今夜はあなたは帰って眠るといい。

カワセの言葉に、
帰るって、りょうちゃんを置いて？

と眉を寄せる美寿。
りょうきは眠っているよ。

完全看護で、付き添いの宿泊は要りませんから。と、笑顔のままの看護師が口をはさむ。大丈夫ですよ、私もがお世話しますので、朝またおいでください。

不服そうにした美寿を、肩に添えた手でカワセは病室の外へ誘う。

看護師の姿が見えなくなった廊下で、
ぼくの見立てどおり腎臓で、この先ひどく悪くなったとしても、腎臓くらいいつでもぼくがくれてやりますからね。
と軽い調子でカワセが言う。真面目に言っているのかどうかとその顔を見上げるが、白々しい明かりの影になって窺うことができない。

病院を出ると春の闇はみっちり樹木の香気に満ちている。芽吹いたばかりの並木の櫻の幹は一本一本がどれも抱えられないほど太く、それぞれが闇へ幾百本もの枝を伸ばしている。

美寿のもとをようやく訪れてくれたカワセは、子供の頭の下の水枕を認めると、子供の額と、衿元から手を差し入れて脇の下に触り、

熱はいつから出ているの、
と問う。

昨日の夕方くらいから。

ほかにいつもと違うことは、と、カワセがまた問う。

おむつが、少し赤くなって、

と、おぼろげ答える美寿に、

むくみが出ているようだから、腎臓かも知れないね。

どれ、と言うと、

下着の替えを三、四日ぶん包んでくれるかい。病院へ行くよ。車を呼ぶからね。

と続ける。

車が着くとひよいと子供を抱え、乗り込んだカワセと美寿はたちまち病院へ着く。濡れたときの病院だ、と見上げる美寿。

夜間という活字の暗く光る電灯をくぐると守衛にべこりと頭を下げ、ずんずん進むカワセの背と、その肩におとなしく頭を預けた子供のひしゃげた頬を見ながら美寿はただついていく。明るく意外なほど活気に満ちた看護師詰所でカワセが声を掛けると、狭い病室へ案内され、じきに点滴

病院の敷地を離れると町は人通りも稀で、暗い街灯に導かれるように美寿とカワセは黙ったまま歩く。長かった自分の影が短くなり、その影を追い越すと次の影が現れる。何を言えいいのか美寿にはわからない。

町が途切れ、家込みに入った辺りで、美寿はようやく、いま何時ごろなのかしらと、意味のないことを問うてみる。

疲れたかい。車にすればよかったかな。

ううん、いい。

それきり話すことも途切れてしまう。

昼間急いだ田中の径に掛かっても美寿は口をひらけな^い。叢雲の間の歪な月が映る水から発する泥の匂いが、息苦しいほど暖かい闇をしんと埋めている。水鏡を越えた遠くに見える人家の灯はまばらで、砂利を踏む二人の静かな足音が、心にそぐわない間延びした調子に聞こえてくる。

こんな時を待っていたはずだった。ただ会いたかった。しかし、何か話そうとするのに言葉は無間の闇をさまようばかりで唇まで上ってこない。カワセの訪れをひたすら待っていた自分のことは、子供を病院に残した心もとなさ^にに上塗りされて、口にするのがいけないことのように思われる。

半間ほど先に立つカワセの瘦身が、径の終わりを慣れた様子で右に折れると、低く川の音が聞こえてきた。じきに家に着く。門を入らずに美寿の方へ向いたカワセは長い腕

でするりと美寿を抱くと、

あなたが好きだ。

と初めて言った。そしてかすれた声で、

川のところからずっと、あなただけを見ていた。

と続けた。美寿の額に触れたカワセの頬は少し乾いてかさかさしていた。体を硬くした美寿を抱いて、ずいぶん長い間、じいっとそうしていたあとで、

訳があつて、ほくがしばらく姿を見せないことがあると思うが、あなたは心配しなくていい。何があつてもりょうきは大丈夫だから。

と言つて、来た道を歩き去つた。

玄関からすぐの間にへたり込み、一人になつた我が身を抱くと、カワセの腕の感触があやふやになる。冷たい水に落ちてカワセに遇つた。あわててその時のことを思い出そうとすると、それも思い出せない。目覚めた病院で自分を見下ろしていたのは本当にカワセだったか。

高窓を濡らす月の影だけの小さな居間は、川の流れの微かな音の中にある。ほんやりしていると、大事ないろいろなものが薄闇に吸われていく。水に落ちたとき、自分は実は減んでいた。あの時滅びた体の中に残つた思いが作り出したそのいろいろなものを、今まで慕つたり可愛がつたりしていただけだった。そんな考えにとらわれ、背中からひゅつと薄闇に吸われそうになる。

翌朝早く、看護師から指図された検査の時間を待ちきれずに病院へ行つた。ふわふわと頼りない気持ちで、早く子供の顔が見たいと押さえ込んで廊下を急ぐ。

そつと部屋を覗くと白い服を着たカワセがこちらに背を向け、子供がいる寝台の手前の丸椅子に掛けている。

子供は眠っている。

カワセはそこにいる。

近づいて声をかけようと美寿が息を吸つた刹那、カワセがびくりと見返つた。

その顔は、緑の翳かげに吞まれたように、ひどい色をしている。素早く子供の肩掛けの中から引き抜いた手の甲には、白っぽいあばたが浮いている。

鋭い音をさせて丸椅子が倒れる。唇がものを云うように動くが何も言葉にはせず、カワセは白いシャツの裾をひるがえして部屋を飛び出す。不意を突かれた美寿が追つて廊下に出た時には、その姿は見えなくなつていた。

夢中で探して人気がない待合まで出たところで立ち止まる。見まちがいではないかと何度思いかえしても、カワセの顔色は今までと違つた。走つたせいだけでなく、鼓動が強く感じられる。前夜のカワセの言葉を思い出す。訳があつて、姿を見せないことがある、どうしてか分からないが、今がそのときなのだ、と胸に落ちた。

検査のあと微熱のまま家に戻つた一度目の入院から、子供は病とつきあうこととなつた。知恵がつき始めた子供をだますようにして検査や服薬をさせるのはせつない。痛い検査のときは、りょうちゃんは大丈夫だよ、きつとよくなるよ、と美寿は、半分は自分に言い聞かせる。子供はそのうちに、だいじよぶ、と、べそをかきながら口真似するようになった。

季節がひとめぐりするころ、医者には、小柄な子供の体ももうじき大人の腎臓が入るくらいには成長すると言つた。美寿が問うと、腎臓というものは誰でも二つあつて、美寿にももちろん、子供にやることはできるのだと言ふ。それを聞いて、そのときがきたら自分のものをやろうと美寿は心づもりをする。

子供の頬を指で挟んで唇を尖らせてやり、その顔を見て笑つてみせる。かあさんも、と子供は言つて、熱をもつた小さい両のてのひらで美寿の頬を挟んで、美寿が唇を尖らせるのとけらけらと笑う。そのしぐさがかわいらしいほど美寿は、さびしいことを思い出した。

子供も美寿も検査が済んで入院という折、長梅雨のしまいに半月も雨が降りつづいた。ざつとくると雨は川のように道にあふれ、やんだと思うとまた降り出す。川は濁り水でふくれあがり、水が堤を越えたらと気が気でないが、小さな家の前の道は水が引く気配もないなか、荷物を背に、

重くなつた子供を抱えて紐でくくる。

ずいぶん濡れながらも病室へ収まり、子供の衣服を替えているとき医者に呼ばれると、直前になつて献腎者があつたと教えられた。受けますか、ときかれ、美寿はうなずく。

とほうもなく長く感じたが、手術が滞りなく進む間に、郊外の水もようやく引いたらしかった。

個室で過ごしたあと容態がおちついて四人部屋に入ると、相部屋になつた子供の家族から、美寿は町の噂を聞いた。子供の祖父ほどのその話者は、見てきたように熱を帯びた口調で言う。水がやや引くと町で、川原に人が打ち上げられたと騒ぎになつた。すぐに巡査が呼ばれ見てみたが、うろたえて、すぐまた人を集めに走つた。人の形をしてはいてもそれは違う、人ならぬものに見えたという。そして、雨が再び降りはじめ、戻つたときにはそのものは、どこを探しても見つからない。まるで煙のように消えていた。雨に運ばれていったようだった。

美寿は、もうカワセに会えないことを悟つた。子供は、小さな手で美寿の頬を触つて首をかしげる。

美寿は、そのときその顔の中にカワセがいることに気づいた。そして、両の腕でそつと子供の体を抱いた。

高踏的な体質



「北方文学」80号の合評会風景

六十年続く総合文芸誌

北方文学 新潟県

「北方文学」は一九六一年に新潟県長岡市を中心に創刊された。中心的役割を果たしたのは國學院大學文学部を卒業して帰郷し、高校教師となったばかりの吉岡又司だった。創刊号巻頭に載る吉岡の「密室のあなたに」という小説論は、「北方文学」創刊同人たちの文学に対する姿勢をよく代弁している。「密室のあなたに」は、当時デビューして間もない大江健三郎と石原慎太郎の「大衆の平均的趣味の方向への逃走」を批判し、ダダやシュルレアリスムの精神を担った「詩における無償の実験」を、小説へと導入していくことを宣言している。

「密室のあなた」とは、閉塞的な状況を生きる文学の主体そのものを意味していて、それは「北方文学」のいわば高踏的な体質を予感させるものであった。そして、そのような吉岡の詩的で、クリティカルな文学精神が「北方文学」を主導していくのである。創刊同人の一人は後に、「その頃の『北方文学』の同人は依怙地なところがあり、文学グループ付きあいを軽蔑し、狭い世界にとじこもって誇りだけ高かった」と回想しているが、そうした傾向はひよっとしたら、半世紀後の現在も持続しているかも知れない。

創刊時の方向性を、孤高の精神と文学的ポピュリズムへの抵抗と位置づけるならば、それは当然維持すべきものであって、六十年後の今日までそれは連綿と継承されてきたのだと誇りを持って言い得るだろう。後継同人の誰もが文学的矜持の姿勢と、文芸ジャーナリズムへの批判的精神を確固として持ち続けてきたからである。



柳沢 さうび
やなぎさわ さうび
新潟県出身
早稲田大学第一文学部文芸専修卒業
2019 春より『北方文学』同人



創刊号から最近号までの一部



第81号の合評会風景

北方文学会 〒945-0076 新潟県柏崎市小倉町13・14 玄文社内
TEL 0257-21-9261

代が二人いる。同人の創作意欲は極めて旺盛である。「北方文学」は創刊から六十号までは、一年に一号から一年半に一号のペースで不定期に発行されてきたが、それ以降は六月と十二月の定期で、年に二号という着実なペースで発行を続けている。創刊五十号記念号は商業文芸誌なみの四百二十頁という恐るべきページ数を達成したが、昨年十二月の八十号記念号はそれに次ぐ三百四十五頁を記録した。もとより厚ければよいというものではないが、それほど同人数が多くもないのにページ数が増えてしまうのは、雑誌がまだ活力を失っていない証拠ではあるだろう。

発行のたびに、二回の編集会議と合評会の計三回集まりを持つことにしている。一回目の編集会議でお互いの作品を読みあって、問題点を指摘しあい、原稿の段階で一旦書き手に戻す。これは事実誤認や誤植をなくするためばかりではなく、それぞれの作品の完成度を上げるために欠かせない工程だと思っている。場合によってはポツということもその編集会議で決定している。二回目の編集会議は雑誌の形に組んだ状態で最終チェックのために開いている。合評会がなんといっても一番重要な集まりである。そこでお互いの作品を批評の場にさらすことになるからである。結構厳しく批評しあう。それがなければそれぞれが先に進めないというのが、同人間の共通認識となっている。

〔「北方文学」編集発行人／柴野毅実〕

しかし、「北方文学」が文学賞というものとまったく無縁であったわけではない。第四号に掲載された、創刊同人の一人・木原象夫の「雪のした」は、一九六三年の第五十回芥川賞候補作となった。また翌年第五十二回の芥川賞候補となった高橋実を同人として迎えてもいる。さらに文学界新人賞受賞者が二人同人として在籍していたこともある。

同人が受賞した賞として特筆すべきは、大井邦雄が二〇一四年に受賞した、日本翻訳文化賞特別賞である。大井は早稲田大学名誉教授となつて長岡市に帰郷して以来、ハーリー・グランヴィルパーカーのシェイクスピア論訳述に、ライフワークとして取り組んできた。その功績が賞を主宰する日本翻訳家協会に認められたのだ。大井も創刊同人の一人であり、「北方文学」のアカデミックな側面を代表していたが、今年一月に亡くなってしまった。

創刊同人が次々と消えていく中で、雑誌の中核を担っていたのは、いわゆる団塊の世代であった。彼らは同時に全共闘世代でもあったわけで、創刊同人達が六〇年安保闘争の世代であったことを考え合わせると、「北方文学」の世代論的位置づけを理解してもらえらるだろう。ちなみに私は二〇〇二年から編集発行人を務めていて、世代的には団塊の世代のやや後ろに属している。

「北方文学」の特徴を一言で言えば、あらゆるジャンルをカバーする「総合文芸同人誌」ということになるだろう。詩と

小説はもちろん、俳句も短歌もある。評論の守備範囲も広くて、日本の古典から近現代文学、外国文学もカバーし、さらには音楽論や美術論もある。宗教論もあれば、言語論や哲学的論考も排除しない。また外国文学の翻訳を得意とする同人もいて、現代中国の小説が誌面を賑わせることもある。そうした傾向も創刊時の特色を引き継いでいる部分である。

結局は評論主体の同人誌だと言うことができる。全国に同人誌はたくさんあるが、詩誌を除くと小説主体の同人誌が圧倒的に多いだろう。評論主体の同人誌はおそらく数えるほどしかないと思う。そんな特徴を持った雑誌であり、評論の担い手の興味は多方面を向いているというわけだ。裏を返せば同人の志向するところが、てんでバラバラだということになるが、そうではなくむしろ、個々の同人がそれぞれ自分の領野を独自に切り拓いているということにおこう。

しかもそのような開放的な多様性が、「北方文学」を長続きさせている要因のひとつであると思われる。それは教条的な単色性への陥落から雑誌を救っているし、他の同人に対する寛容の精神をもたらしめていると思う。またそれは受容可能な領域の大きさを示していて、それがより多様な人材を同人として受け入れることのできる素地ともなっている。純粹培養されたものよりもハイブリッドの方が強靱なのである。

高齢化の波は避けたいものがあるが、現在六十代半ばから七十代半ばまでの同人を中核に、五十代が一人、四十

妙子

小松原 蘭

体が重い。

救急外来の待合室の廊下はしんと静まり返っている。クリーム色の壁紙で囲まれた待合室は雰囲気は悪くないが、掛け時計のカチカチという音がやけに耳につく。目頭を指で押さえた。疲れが集中していて時おり刺すような痛みがある。右眼が細かく痙攣し、その上ふわふわと体が浮遊するような眩暈が続いていた。

長い廊下の先に非常口の灯りが見える。急いで家を飛び出してきたから眼鏡もかけてなかった。数メートル先の視界が水彩で描いた絵のようにうつすら滲む。あの非常口はなぜ緑色なのだろう。赤だと刺激が強すぎるのだろうか。

意味のないことを考え気を紛らわせた。

「桐生さん」

気がつくとき妙子を診察していた医師が立っていた。

慌ててソファから立ちあがると衣服を整えた。あんなに緊張していたのに微睡んでしまうなんて。妙子はどうしているだろう。注射をされてだいぶ時間が経つ。

「妹はどうなりましたか」

「先ほどはかなり錯乱してとり乱していましたが、今は落ち着いて奥の病室で休んでいます」

その言葉を聞いたとたん、張りつめていたものが一気に解けて足元がふらついた。先刻の暴れ方を見た時は、この

ままおかしくなってしまうもう治らないのではないかと不安だった。金色の縁に彩られたシンプルな時計に目をやる。午前三時。ここへ来てから二時間以上も経っていた。「今後は、定期的な通院で治療していきたいと思います」通院、ということやはり病気なのだ。予想はしていても実際に通院が必要と言われるとショックだった。

「完治まで、どれくらいかかるんでしょう」

丸眼鏡をかけた医師は少し考えるように額をかいた。

「人それぞれなので一概に言えませんが、三年くらいはかかるかもしれませんね」

長目の髪の毛をワックスできつちりとまでつけた小柄な医師のつむじのあたりに目をやる。三年も浦安のこの病院に通わなければならぬのか。途方もなく長い。重い物を飲み込んだような気分だった。

「このまま、ここに入院して治療することはできませんか？」

「おすすめできませんね。妹さんはここに入院する患者とは少しちがうんです。入院となると手続きがかなり複雑ですし記録にも残りますよ」

精神科病院への入院歴が公式な書面上に残るということなのだろう。二十歳の妙子が今後、就職したり結婚する時になにがしかの妨げになることを憂慮してくれているのだ。

「心配慮ありがとうございます」

頭を下げると、はげかかった親指のペディキュアが目に見えびこんできて、ようやく自分が冬だというのに素足にサンダル履きでタクシーに飛び乗ったことに気づいた。白い大理石調の床に茶色のコンフォートサンダル履きはあまりに場違いだ。

「でも、家にいて普通の生活をしながら治療できるんでしょうか？」

妙子がおとなしく病院通いするとは思えなかった。そもそも恋人の拓也とどうやって別れさせたいのだろうか。

「同棲している青年とは別れさせて、できればお姉さんの元で生活しながら通院してください」

それは無理だと、とつさに首を振った。医師は私をじっと見つめている。私は俯いて指を擦った。東京で一一緒に暮らしたことはなかった。しかもあんな状態の彼女と二人で暮らす勇気などない。

「正直、今日のような騒ぎ方をされたらどう対処すればいいのかわかりません」

周囲の目だつてある。今のアパートの両隣りは普通のサラリーマンだ。一度でも問題を起こされたら、それこそ白い目で見られ住めなくなる。

「かなり強い精神安定剤を頓服で出しますから、騒ぎだしたらすぐに飲ませてください。本人も頭のどこかでわかってやっている部分があるので、落ち着けば後は普通に過ご

せますよ。甘くコーティングしてありますから水なしでも大丈夫。乱暴な言い方をすると、開いている口に放り込めば呑み込めますから」

淡々と説明する医師から目を逸らした。精神安定剤と自分が関わりを持つ日が来るとは思いもしなかった。それも活発で気の強い妹が薬に頼らなければならぬほど心を病んでしまうとは。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

次第に眩暈の感覚が短くなってきた。気がつくともソファに座り込んでいた。

「今日は病院でお二人ともお休みください。明日、もう一度、診察しましょう。生憎ベッドが一杯なので保護室で寝ていただくこととなります。お姉さんがついておられるので、ドアは開放しておきますね」

医師の静かな声に促され、何とか気持ちを落ち着けて立ち上がった。

暖色系の照明が長い廊下をほんのりと照らす。夜中でも煌々と廊下を照らす一般病棟とは違う柔らかい光だ。この種の病院に眩い光は強すぎるのかもしれない。

そういえば拓也はアパートでどうしているだろう、とふと考えた。

妙子の恋人の東野拓也から電話があったのは、ちょうど

に、東京の夜は晴れていても滅多に見ることができない。それでも働きながら眺めてきたこの空をいとおしいと思う。この暮らしにヒビが入ることは避けたい。

「いまさら、そんなこと言われても」

受話器を置いてしまいたいという気持ちを抑えたが、冷たい言い方になった。

二人のことは最初に拓也に相談を受けた時から気になって、時々連絡をしていた。故郷にいる母の顔が浮かぶと、妹を守るのが自分の役目かもしれないと思い、仕事帰りに同棲しているアパートへ訪ねて行ったこともある。でも留守なのか、居留守を使っているのか、いつ行ってもドアが開くことはなかった。

「妙子の調子はどうですか？二人とも元気にやっていますか？一度、連絡をください」

固定電話に留守電を残しても、妙子のスマホに伝言を入れても、折り返しがくることは一度もなかった。

こんな状態になってから助けを求めてくるなんて、虫が良すぎる。

テレビ画面では気象予報士が明日の天気は雪交じりの雨で今日より五度以上も低くなるので厚手のコートとマフラーでしっかり寒さ対策を、と解説している。明日も駅まで十五分以上の道のりは寒いだろう。今の職場は早出も多い。早朝は特に冷える。

十時のニュースが始まった時だった。残業を終えて帰宅した私は、コンビニで買った十種の豆の入ったスープとコーンとチキンの冷静パスタを食べ終えて透明な容器を洗い、ごみ袋に詰めて持ち手をきつく縛った。頭の中でこれからの予定、手早くシャワーを浴びて髪の毛を乾かし、化粧水と少し無理をして買った高価な乳液を塗って歯を磨いてすぐに寝よう、急がないと六時間は寝られないかもしれない、などと考えてクレンジング一式を手にはバスルームへ向かった。その時、固定電話が鳴ったのだ。

こんな時間にどうしたのだろう、といういぶかしい思いで取った受話器の向こうから、

「お姉さん、来てもらえませんか。妙子が暴れているんです。もう手に負えません」

というせつばつまった声が聞こえた。TV画面には白い洗濯物が揺れる明るいCMが流れている。見るともなく見ながら拓也の背後から響くつんざくような金切り声を聞いていた。妙子の声だった。死んじまえ、電話してんじやないよばか野郎、などという罵り言葉がひっきりなしに聞こえ、思わず受話器を遠ざけていた。

聞かなかったことにしたい、巻き込まれたくない。

淡い緑色のカーテンの隙間から覗く窓の外の夜空に目をやる。雲一つない空なのに星が見えない。故郷ではプラネタリウムにも負けにくいくらいあちこちで星が瞬いていたの

上京してからずっと私立大学の事務室で働いていた。休みがまとめでとれるところが魅力的で選んだ職場だが、週に三日は長引く会議で残業の上、翌日にはデータをまとめなければならぬ。明日も八時半にはタイムカードを押し、差し迫った学会の資料作りをする予定だ。今すぐ電話を切って寝る準備をしたかった。

だが、そんな気持ちはすぐに吹きとばされた。金切り声がますます大きくなり、

「死んでやる」

という絶叫に変わったからだ。

「すぐにそっちへ行きます」

ただごとでない。胸が痛くなるほど動悸が激しくなった。急いでアパートを飛び出したんは駅へ向かったが、思い直して通りがかったタクシーに乗った。

「死んでやる」というつんざくような悲鳴が耳から消えなかった。脅しだけの声ではなかった。シートベルトを促されて、やっとドライバーに着て上着さえ持たずにいることに気づいた。寒さが立ち上ってくるようで自分を抱きしめるように両腕を交差した。

都心に近いこの辺りから東の方にタクシーは向かう。次第に背の低い一軒家が多くなり道も狭く入り組んでくると灯りが消えた周囲は夜の闇に包まれる。誰一人歩いている人もいない道を車は飛ばす。フロントミラーに映る自分の

顔は恐らく真つ白で目が吊り上がっているだろう。ただならぬ気配を感じたドライバーが、寒いですなえと機嫌をうかがうように言うのに上の空で返事をした。かろうじて手にしたスマホと財布の入った手提げバッグの持ち手を握りしめながら、とんでもないことが自分にふりかかってきたようで気が重かった。

ひっそりとした小路の脇にタクシーは止まった。電送塔の奥にぼつんと建つアパートを壊れかけた電灯が照らしている。三軒ならぶ木製の真ん中のドアの前に人影があった。妙子を羽交い絞めにするように抱きしめた拓也が立っていた。暗闇の中で妙子の両腕を掴んで私を凝視する全身が、もう俺は耐えられませんか、と叫んでいた。

「どうして自分達だけで解決できないの？ 大変な時だけ私を頼らないで」

そう叫びたい気持ちを押して二人に駆け寄った。

「妙ちゃん、血だらけじゃないの。病院へ行こう」

と声をかけるが、唇を震わせて一点を睨んでいる彼女はまるで聞こえている様子もない。指先と手の甲に血の塊がついている。

「タクシーを拾うから、何とか大通りまで連れてきて」

拓也に告げると走って大通りに出る。

ただでさえ人気のない郊外の小路、しかもこんな時間にタクシーなど通るわけもない。祈るように信号の先を見つ

慌てて財布の中身を確認した。一万円札が一枚と四千円が入っている。

「大丈夫です」頷いた。

その病院は、拓也から妙子の様子がおかしいと最初に相談を受けた時にネットで調べて、電話した病院だった。冷たい対応が多い中、この病院の年配看護師だけが丁寧に話を聞いてくれ、何かあった時はすぐに妹さんを連れてきなさいと言ってくれた。登録してあった救急外来の番号をタップし、今から妹と一緒に受診したいと告げる。すぐにいらしてください、という返事を聞くと安堵で体中から力が抜けた。

「少し急ごうか」

病院とのやり取りを聞いていた運転手は妙子を振り向いて柔らかい笑顔を向けた。帽子の下からのぞく髪は真つ白だ。低いしゃがまれた声やしぐさからも彼がベテランであることがわかる。妙子は放心したようにうつろな目でシートに寄りかかっていた。拓也と離れたことで興奮が冷めたような感じだった。ようやく緊張の糸が切れ、妙子の腕を離すと目を瞑った。少しの間でもいい、何も見ないで闇の中にじっと浸っていたかった。

一時間程、タクシーが夜の道を走る。窓の外の景色はぼつぼつと並ぶ街灯が一本の線となって流れてゆく。信号で止まれば光はぼうつと周囲を照らし、淡い水彩画のように

めてみると、遠くから空車のサインが見えた。急いで手をあげる。拓也が暴れる妙子を担ぐように連れてきた。

「早く」

抵抗する妙子をタクシーに押し込める。今は力づくでも引き離し、手荒いことをしても押し込まなければならぬことはわかってきた。

「姉ちゃんを呼ぶなんて拓也の卑怯者。離してよ」

顔を引つ掻こうとする妙子を押しさえつけて後部座席に押し込むと、拓也は素早くシートベルトをしめた。

「お姉さん。こいつは病気です。二度と俺の所へ戻ってないようにしてください」

耳元で囁いた。

彼が車から離れたとたん、気を利かせた運転手が素早くドアを閉める。あつという間に走り出した。冬だというのにTシャツに薄いグレーのズボンをはいたまま立ち尽くす拓也の姿がみるみるうちに小さくなる。

「すみません。浦安のさざなみ病院までお願いします」

小路からしばらく走ると、掴んでいた両腕を離して私は大きく息を吐いた。妙子は細かく震えて荒い呼吸を繰り返しているが、少し落ち着いたらようだ。後は一刻も早く病院へついで欲しいだけだ。

「一万円は超えちゃうけどいいかね」

運転手が気の毒そうにフロントミラー越しに妙子を見る。

民家の屋根を映し出す。全てが遠く、現実味が薄いのに、隣の妙子の息遣いだけが胸に迫って私を息苦しくさせた。

そつと横目で様子をうかがう。青いキャミソールの上に羽織った白いカーディガンに少し血がついているが、指先の怪我はたいしたことはなさそうだ。グレーのジャージズボンに汚れはなかった。靴下を履いているのは恐らく拓也のアパートが寒いからだだろう。ピンクと黄色の縞模様の靴下を履いた小さな足を揃えてちょこんと座っている姿はまだほんの子どものようで、思わず乱れた髪の毛に触れて梳いてあげたくなった。

落ち着いたと思っていたのに、病院へ着いたとたん彼女は豹変した。

「あたしはキチガイじゃないよ。おかしくないのにこんな病院へ連れてくるなんて、ひどいじゃない」

診察室で医師と向かい合ったとたんに、椅子を蹴って叫んだ。おろおろしている私を尻目に医者が片手をあげると、それまで壁だと思っていたところがぐるりと回転し大柄な看護師がとびだしてきた。妙子を羽交いじめにし素早く注射針を刺す。すべての行動が淀みなくきれいに流れていた。こんな風に鎮静剤を打たれた患者はすぐに意識をなくしてしまう。妙子もそうなるだろう。

私はこの状態から解放されたいという思いから病院へ連れてきたことを後悔した。廊下から微かに漏れる院内放送

が聞こえる。

「三番ベッドの患者、移動します、三番ベッドの患者、移動します」

それが患者が暴れていることを院内に知らせる隠語であることはすぐに分かった。外に出て妙子に逃げ場はないのだ。話も聞かずにこんなやり方で押さえつけるなんて、これでは妹ははじめから物騒な「危険物」扱いではないか。看護師にも医師にも憎しみを抱いた。妙子はすぐにくったりとして看護師の腕の中に倒れこみ、それを見届けた医師が言った。

「お姉さんは、ちょっと外でお待ちください。これから診療します」

何をするつもりですか。どうして傍にいてはダメなのですか、という言葉が出そうになるが、彼の冷たい顔が私をためらわせる。黙って室を出る。自分がいないところで何を話されるのだろうかという不安もあり、落ち着かなかった。

長い廊下に二列に並んだピンク色のソファに腰を下ろした。診察室のドアは薄グリーンで全体的に柔らかな雰囲気を出している。足元に目をやると大理石調の白い床にサンダルが鈍く反射している。これからどうしたらいいのだろう。あんな状態の妹を放っておくことはできない。田舎に帰したい、母に任せたい。どうして私が妹の面倒を見

なければならぬのだろう。大人しく帰るとも思えなかった。それより無断欠勤にならぬよう職場にメールしておいた方がよい。明日は定例会が朝一であるから、人手が足りないに困るだろう、コピーが八十八人分、残っている。学部に配布するデータも作りかけだ。そんなことをぐるぐると考えていた。

幾重にも重なった鍵の一つを丁寧の外して扉に差し回すとカチャリと大きな音がした。

閉鎖病棟、関係者以外入室厳禁、そうかかれた重そうなドアを医師が開ける。患者達を隔離する分厚く頑丈なドアが開くと、鈍い金属音が廊下に響く。昨日まで細々と暮らしていた平凡な時間が明日から壊れるかもしれないという予感に怯えながら、医師に続いた。扉の奥も長い廊下で両側に等間隔で扉が並んでいる。これもまた重そうな鉄のドアだ。薄明りに照らされたしんとした廊下に二人の足音だけが響く。

「ご両親は健在ですか」

立ち止まった医師が振り向く。

「大阪に母がいます」

「わかりました。詳しい家族構成などの話は明日、お聞きします。今日はもうおやすみください。妹さんはすでにこちらでやすんでおられます」

を見ている妙子の様子は哀れだった。

「気分が悪い？」

もう一度、肩を軽く叩くと、ようやく私に気づいたように視線を向けた。弱々しい、痛めつけられた小動物のような目だった。

「拓也、逃げないかな。あいつはずるいから、帰らないと逃げちゃうよ」

私は驚いて彼女の大きな目を見つめた。こんなことになっても、まだ彼に固執するのか。

「二度と俺のところに戻ってこないようにしてください」と囁いた疲れ切った彼の姿を思い出した。だが今、本当のことを言うわけにはいかない。

「逃げないよ」

無理に笑顔を作った。視線の端にむき出しの白い便器がぼんやりと映る。暗闇の中でほのかに青白く光っていて不気味だ。

「拓也君もきちんと治療した方がいいって言ってたよ」
「本当？」

妙子が私をのぞきこんだ。別人のように鋭い目つきだ。目を逸らさないでいる。出来るだけ穏やかな顔で視線を受け止める。息が苦しくなってくる。

「本当よ。今日はもう寝て、明日になったらどうしたら一番いいか考えようよ」

指さした部屋のドアが微妙に開いている。

「どうぞ」病室に入ると夜灯のあかりに鈍く照らされたベッドがあり、妙子が寝ていた。白いシーツから覗く痩せた顔は泣けてくるような小ささだった。この子はいつの間にこんなに痩せてしまったのだろう。丸々した頬が可愛らしかったのに、肉が削げてげっそりとしている。

「落ちついたね。よしよし」

医者が軽く頭を撫でた。まるで幼い子供をあやすように見えた。目を瞑っていた妙子はふと目を開け、すぐにまた閉じた。あどけない顔がまだよちよち歩きで「おねえたん」と私を慕ってくれていた素直な頃を思い出させた。

「この病室は簡易ベッドが入れられませんか。お姉さんは床に敷いたこの布団でおやすみください。それと明日の朝、二人分の朝食をお持ちします。ドアは開けたままでけっこうですよ」

後から来た看護師が枕を渡してくれる。急だったのか枕カバーには折り皺がついている。

「おやすみなさい」

病室を後にする二人の背中に軽く会釈をしてからベッドに近づいた。

「明日になったら家に帰れるって。よかったね」

顔を近づけて囁いても聞こえないのか無言で一点を見つめている。よほど強い薬を注射されたのだ。ぼんやりと宙

一気に言うと、白いカバーのついたひんやりと柔らかい感触の布団を肩までかけ直す。とにかく彼女を落ち着かせなければならぬ。

「逃げないって言ったのね」

「そう。だからもうやすみなさい」

辛抱強く妙子を宥めながら、一方では、実際にこんな状態の妹を抱え込むことは容易ではないと暗澹たる気持ちになつていた。

これからどうやって二人で暮らしていけばよいだろう。

今の狭いアパートからは引越さなくてはならないし、病院の近くに部屋を借りると通勤も大変になる。東西線で大手町に出て、そこから丸ノ内線に乗り換えて御茶ノ水まで出て十五分以上歩くとしてざっと一時間半くらいか。引越越し費用は定期預金をつぶして用意するとしても、生活費もこれまで同様というわけにはいかない。

少ない給料の中、買いたいものも我慢して細々と生活をしてきたが、それなりに充実していた。今まで紡いできた生活が脅かされようとしている。妹のせいで。

自然と布団から手が離れた。厄介ごとから何とかして逃れたいといういつもの防衛本能が働く。薄い布団にそっと横たわる。すぐに床の冷たさが体中に染み入ってきて、何度も寝返りを打った。とても眠れなかった。

半開きの鉄のドアから入る光が薄っすらとコンテナのよ

うにしな」

母は電話でそう言ってくれたが、言外に「妹を助けてやってほしい」という本音が見え隠れし重く響いた。

ほんの時おり、妙子とショートメールでやりとりしていたし、彼女のアパートは私の帰宅途中の最寄り駅だったので訪ねて行ったりしていた。

妹が最初に勤めた小さな街の家庭的な工務店を「社長のセクハラ」で三ヶ月で辞めてからはバイトを転々とする暮らしをしているのを見かねて、一緒に暮らそうと誘ったこともある。

「絶対にいや」

関西訛りの残る標準語で彼女はきっぱりと拒否した。

「姉ちゃんと一緒に住んだら東京に出てきた意味がないじゃない」

家賃三万の風呂もない狭いアパートで暮らしている妙子は、田舎にいた時よりのびのびと見えたから、私はたまに既読スルーになるラインで様子をうかがうだけで自ら彼女に寄り添うことはなかった。私は内心、安堵していた。せっかくの東京暮らしだ。自由でいたい。高層ビル街を吹き抜けるきつい風や洒落た店が立ち並ぶ都会のよそよそしい喧噪は、田舎にいる時に拭い去れなかったじめつき感を忘れさせてくれた。いままら田舎を背負わされるのはいやだった。

うな病室を照らしている。鉄製のベッドは自殺防止のためか簡素な作りで、足元に和式便器があった。その横にトイレットペーパーが直に置かれている。微かに身震いした。小さな明かり通りの窓が一個所ついているが、そこにも狭い間隔で鉄の棒がはめこんであった。

保護室というより監禁部屋だった。

早くここから出たい。

強く目を瞑った。妙子が一刻も早く眠りに落ちてくれればいい。そして、なるべく遅く朝がくればいい。日の光が射しこめば、目を覚ました彼女はこの現実を直視しなければならぬだろう。せめてそれまでの間、何日もろくに寝ていなかったはずの妹をゆっくりと休ませてやりたいという優しさが生まれた。それにもう、自分も何か考えるには疲労が大きすぎる。

「妙ちゃん、ゆっくりやすみなね」

応えはなく、無言の空間の中に微かにうごめく気配を感じた。

高校を卒業した私が東京へ出てきた数年後、妙子も上京してきた。恐らくあの村で母と二人で暮らすのは限界だったのだろう。二人共互いの感情を持って余して困り果てているように思えた。

「あの子のことは気にせんでええ。茉莉は自分の好きなよ

妙子に東野拓也という恋人がいることは知ったのは半年くらい前のことだった。

「バイト先のマックで知り合った、拓也っていう大学生の彼氏がいるの。すごく優しいんだ」

と珍しく嬉しそうに笑顔を浮かべて言ったことがあった。彼女が笑顔を見せることなど滅多になかったから、本当に好きなのだろうと少し羨ましくなったのを覚えていた。

しかし妙子はアパートを突然、引き払った。連絡が間遠くなり固定電話から「現在使われておりません」というアパートを訪ね、ドアの取っ手に水道局のお知らせのパンフレットがかけられているのを呆然と眺めた。妙子が黙ってアパートを引き払ったのは、恐らく拓也と暮らすためだろう。大阪でも男子学生と夜更けまで繁華街をほっつき歩くことがあった。男と同棲してもおかしくはなかった。

スマホの機種も番号も変更したらしく完全に連絡を取る手段を絶たれたことで、私はむしろさっぱりとした気持ちだった。恋人とうまくやってくれば、それでいい。あの子にはあの子の人生があり、それが私と交わらなくなっただけのことだ。通じなくなった電話番号を消去する私は心の奥底で、安堵していたのかもしれない。

ところが数ヶ月もしないうちに、いきなり同棲相手の拓

也から電話がかかってきた。

呼びだされた私は、いやな予感を感じながら待ち合わせ場所にむかった。人混みで賑やかな駅前のレストラン交差点を渡りながら、心は重く沈んでいた。拓也の電話の声があまりに暗かったからだ。妙子が何かトラブルを起こしているに違いないことはたやすく想像できた。

待ちあわせ場所の喫茶店は大通りから一本、奥に入った脇道に並ぶ古びた喫茶店で、雨粒が地面を叩く音が窓際の席に響いた。

「妙子のお姉さんですよ。妙子と暮らしている東野です」

青年の声は妙子の父親を思い出させる。私は目を逸らしてガラス窓を叩く雨に目をやった。

「妙子が少しおかしいんです。死ぬって言って酒を馬鹿みたいにガブ飲みしたり、家中の物を手当たりしだいに投げたり、刃物を振りまわしたりするんです」

「妙子がそんなことを？」

「あいつ、バイトも辞めて一日中、俺が帰ってくるのを待ってるんです。帰りが遅くなると、家の近くの駅で何時間も待ってるんですよ。外も寒いのにろくな服を持ってないから震えてて。最初は俺も悪いと思つて早く帰ってたんですけど、待たれるのがすごく重荷で」

脳裏に幼い頃の妙子の姿が浮かんだ。駅で母親を待ち続ける小さな姿だった。毎日毎日、叱られるとわかっている

らないんです。いつも口癖みたいに、男は油断すると浮気するからって言つてて」

拓也は上目遣いにチラチラと私を見ながら反応をうかがっていた。

よく日焼けした若々しい顔を見ていると妙子の父親を思いだす。胃の中が不快度を増し、ゆっくりと回転しはじめた。妙子は父親の顔を知らないはずなのに、本能的に彼に惹かれたのだろうか。

可哀想に、という気持ちと関係ないという投げやりな気持ちちが交差した。

「妙子が好きです。でもこんなことばかり繰り返している」と限界がくる気がして、これ以上一緒に暮らすの、良いような気がするんです」

しばらく無言の時が流れた。また窓の外に目をやって考える。ズンと両肩に重荷がのしかかってくる。いつの間にか雨が止み、どこに隠れていたのか窓の外の止まり木にいた雀が一斉にわっと飛びたつ。凄いだ。放射状に空に向かって昇っていく。

どれくらい経ったかわからない。

「要するに同棲を解消したいのね。わかりました」
一息ついて続けた。

「一度、よく話し合ってみます。妙子も二十歳ですし、男女関係に口をはさむのって難しいし。中絶して心身共に傷

のに駅で母親を待ち続ける妹。それを今も繰り返している。いったい、いつまでそんな事を続けるつもりだろう。

だったら、いつまでも彼にすがりついていけばいいのだと思う冷たい自分に気づく。私は急いで冷めたコーヒーに口をつけた。

「そのうち、俺が大学に行く日になると具合が悪いふりをしたり暴力を振るうようになって」

「どうしてそんなになっちゃったんです？ 何か理由があるはずですよ」

拓也は少し考えるように窓の外を眺めてから言った。

「妙子には口止めされてるんで聞かなかったことにしてほしいんですけど、実はあいつ中絶したんです」

思わず体が硬直した。

「俺に何も言わないで勝手に処置してきて、終わってから同意書にサインしてくれて。妙子がおかしくなったのはそれからです。あいつよく言つてました。将来、子供を持つのは怖いって。自分は誰からも愛されたことがないから人を愛するなんて無理だって」

拓也の言葉をかき消すように雨音が強くなった。

「ナイフで手首を切ろうとしたり、包丁で腹を刺そうとするあいつを見てると怖くて」

「あなたが大学に行くのと嫌がるのかしら」

「外で女友達と会ったり、飲みに行ったりするのが気に入

っているんだと思う。三人で良い方向にむかうように頑張らましようよ」

伝票を掴むと懇願するような眼差しで曖昧に頷く拓也から逃げるように店を出た。春の雨上がりはハチミツとコンクリートの匂いがすると誰かが言っていた気がする。微かに甘い空気の淀んだぬかるみ道をぼんやりと歩いた。この後、妙子に連絡するのが怖くて、自然と歩みが遅くなっていった。

数日後、意を決して妙子を自宅に呼び出した。ゆっくりと話を聞いてみようと思った。だが不貞腐れた様子で約束よりかなり遅れて現れた妙子は中にも入らず玄関口で言い放った。

「うるさいなあ。こんなところへ呼び出して。姉ちゃんには関係ないことでしょ」

もう、だいぶ前から煙草を吸うようになった妙子はセイラムライトの箱からタバコを一本取りだして百円ライターで火をつける。

「関係ないことないでしょう。包丁を振りまわすなんて、姉ちゃん信じられないよ」

部屋の中に入る気はないのだと悟ると、私は差し出したスリッパを脇へよけた。

「姉ぶった言い方するのはやめてよ」

いきなり妙子の鋭い声が飛んできた。

「あいつは大嘘つきだよ。しつこいストーリーカーがいて、帰りを待ちぶせたり何度もラインしてきたりして気味悪いからサークルは退部するって約束したの。だのにメールチェックしたらその子と仲良くやりとりしてるじゃない。おかしいでしょう」

「気持ち分かるけど、だからって無理に辞めさせたり大を学を休ませればすむことじゃないでしょう。それに妙ちゃん、バイトしてるの？」

「やってない。今は」

「彼の仕送りだけじゃ足りないでしょう。こもっていないで働いた方がいいよ」

「なんでそんなこと言われなきゃいけないのさ」

妙子はふっと煙を吐きつけると煩さそうに言った。

「働くのはいや。東京は嫌いやもん」

「働いてみれば、楽しい出会いもあるよ」

「楽しい出会いなんてないよ。あんたみたいな要領の良い人は東京で楽しめるでしょうよ」

「ずばりと言われて頬がカツとなった。昔はこんなことを言う子ではなかった。ただ「うるさい」と怒鳴ってむくれて拗ねるだけの子だったのだ。」

「こんなことを言うために、わざわざあたしを呼び出したわけ？」

妙子はまだ長いタバコを床に捨てて、スニーカーでにじ

だ。

「いやや。妙子はお母ちゃんと一緒に食べる。帰ってくるまで待つてる」

凍えるような寒い日もうだるような暑い日も激しい雨の日も空気が凍りそうな雪の日も、妹はいつも母を待った。その強情さに半ば呆れた。可哀想になって私は駅まで迎えるにいく。

「こんなところに遅うまでも母ちゃんに怒られるだけやで。いつもそうやん」

冷たくなった小さな手を取り引つ張ると、

「うるさい」

乱暴に振り払った妙子は、手入れされていない荒れた花壇の土を掴むと私に投げつけた。

「あっち行ってまえ」

ざらざらした粒の荒い土が両目に飛び込んできて、私はうずくまった。追い打ちをかけるようにまた砂を掴んでいる妹を置いてその場を走り去る。無理やり連れて帰ることだつてできたはずだ。あのままあそこに置き去りにすれば、妙子はまた母に叱られる。暗闇の中で一人座り続ける妹を置いて帰るのは後ろめたかったが、砂をかけられて面倒くさくなった私は一人で家に戻ってしまふ。

玄関で砂をはたき、ざらついた口をゆすいで居間の灯りで宿題をしていると時間は穏やかに過ぎる。やがて泣き

り潰した。

「いつも良い子の姉ちゃんとは違うの。放っておいてよ」

この場から消えたい。そう思っている間に、妙子は乱暴にドアを開けて去っていく。

ばたんと荒い音とともに空気が頬に当たった。私は追おうともせず、二度と開かないドアをじっと見つめていた。結局こうして妙子と久しぶりに向かい合っても強い反発心をまともにもぶつけられ、戸惑い、狼狽え、そのおろおろしたそぶりがさらに彼女の神経を逆なでするのでと分かっていても、私にはどうすることもできないのだ。致し方ないという気持ちだった。二人きりの姉妹だけれど、私の中にはそれだけでない複雑な感情が糸のもつれのように絡まっている。

あの子はあの男の血を引いた妹だ。

妙子が母を駅で待つようになったのは、いつからだだったろう。私のお下がりのランドセルを小さな背中にしよつていたのを覚えているから、小学校に入った頃だろうか。妙子の父と離婚した母は夜遅くまで働きに出ていて、夕飯作りは中学生の私の仕事だった。

「妙ちゃん、お母ちゃんは今日も終電や。遅なるから先に帰って夕飯食べよ。今晚のおかずはネギ肉やで」

母に会いたい一心なのはわかるが、どうせ叱られるだけ

じゃくる妙子の声と母の罵声がきこえてくるのは十一時をとうに回った頃だった。

この頃の妙子は母に疎まれることに怯え、わざと気をひくような悪戯をしてさらに叱られた。彼女が駅で待つことは母親に対する精一杯のアピールだったのかもしれない。酔客相手に深酒をし、疲れきった母が駅でポツンと待っている幼子を見るとどんな気持ちになるのか、彼女には分らなかった。

母は何度叱りつけても駅で待ち続ける妙子を、

「あの子は、あたしが酒を飲むのを非難してるんや。嫌味な子や」

と、ますます疎んじた。

「そんなわけないやん。早う母ちゃんに会いたいから駅で待つてるんや。一人で夕飯を食べる母ちゃんが気の毒や思うてるんやで」

男と出ているなかなか帰ってこない母を待ち続けた時を思い出しながら私は答えた。もしこのまま帰ってこなかったらどうしたらいいんだろう。冬枯れて茶色に染まった小高い山の尾根をじっと見つめていた幼児の頃の心が張り裂けそうなくらいの不安を思い出すと、妙子の気持ちが痛いほどわかる。

私と妙子は裏山の野原でシロツメクサの花畑に行き、よ

く花冠を作った。花を摘むのは妙子で編むのは私だ。花卉の詰まった花は綺麗な冠ができる。

「おねえちゃん、これ大きいかな」

「いや、もっと大きいの探したいで」

うん、と頷いて駆け出してゆく妙子は可愛かった。白い草原に姿が埋もれて時々、黒いおかつば頭が見え隠れする。

「おねえたん、これは？」

息を切らして戻ってきた両手には、いっぱいシロツメクサが握られていた。

「たんぼぼみみたいや、妙子よう見つけたな。とびきり綺麗なのつくってあげる」

私が花を編んでいる間、妙子は大きな目でじつと指先を見つめていた。

「おねえたん、魔法使みたいや」

真剣な表情がおかしい。

「ほうらできたで、お姫様」

小さな頭にすっぽりはまる白い花冠は妙子を草原の妖精のように見せた。

「おねえたん、ありがとう。大好き」

二人で手をつないでスキップしながら家に帰った。

私は幼い頃からまわりの視線を気にする大人びた子供だった。眼球の微かな揺らぎ、眉の上げ下げ、何かを言

たそうにゆがめる唇などを察知して、今自分がどんな言動をとればよいか素早く計算した。特に家の中ではいっそう注意深かった。

いらだった時の母の眉の動き、嘘をつく時の妙子の父の笑顔、粗末な服を着ている自分への友達の哀れみを伴った侮蔑の視線、母親の陰口を言う近所の主婦の声音。彼等の感情の棘のような矛先が自分に向かぬよう回避する癖がついていた。無防備な自分を晒し、ぐっさり傷つけられることを恐れたのだ。自分の希望や思いを胸の内に飲みこみ、その場に即した言葉や態度を携えて行動した。私は、何よりも母の機嫌を損ねるのが怖かった。

実父の記憶はほとんどない。母の顔を上目遣いに見つめて笑っている気弱そうな面影は覚えているが、それは後から勝手に頭の中で上書きされたもののような気がする。私が四歳の時、父は交通事故で亡くなった。

未亡人となった母の周りには何人も男達が近づいてきた。

「茉莉子、ちょっと外へ出とって」

日暮れ時になると、母は少し紅潮させた頬を男の膝につけながら、トロンとした目でそう言った。長閑な田舎でもこの歳で一人の遠出は心細い。いやだよ。外は人さらいがいて怖いよ。そう言いたかったけれど、母の気持ちはもう私にはなかった。行くあてのない私はドアの外でじつと佇

んで、再び母がドアを開けてくれるのを辛抱強く待っていた。夏は射すような西日が暑いし、冬は日暮れの風が吹くと手が凍るほど寒い。時おり、近所の住人が通りすぎざま「おやおや、またかね」という呆れ顔をし、「おかあちゃんにも困ったもんだねえ」とか「あんたも可哀想に」と頭をなでられる。するとなぜか顔から火がでるほど恥ずかしかった。だが、何より辛かったのは、いつもと違う母の声を聞くことだった。ドアの奥から漏れる声は奇妙に熱っぽくて悲鳴にも似ている。体が固まった。二人は何をしているのだらう。母は虐められているのではないか。そう思っ

てドアを開けて確かめたこともある。やがて男が訪ねてくるとトイレ脇の小さな納戸に鍵をかけて蹲っているようになった。遠くへ出ている間に、母が男と消えてしまうのが怖かった。私は幼いながらに、いつか母に捨てられてしまうという思いを拭いきれなかった。この人に嫌われてはいけない、それが最も重要なことになった。

父が亡くなって二年ほどすると妙子の父親と暮らし始めた。妙子が生まれたからで、私は小学校へ入学するタイミングで父の名字を名乗った。それまで「父ちゃん」と呼ぶ人はすぐどこかにいなくなってしまう共にも暮らすことはなかったから、父の名字を名乗ることも、ずっと一緒に暮らせることも嬉しかった。

「田村茉莉子です。田村っていう名字なの」

初対面の人に会うと私は聞かれる前に自らそう言った。夜は特に幸せを感じた。何度も目を覚ますと腕を伸ばして父の布団に触れ、存在を確認した。時には二人の布団の間にもぐりこんで「今日はここで寝るの」と、甘えた。「茉莉子はもうお姉ちゃんなんやから一人であっちの部屋で寝なさい」

母がそう言うのと、布団に寝転がりスポーツ新聞を読んでいた妙子の父が笑顔をあげた。

「ええやないか。茉莉かてまだ七つや。皆で寝よ」

二人の横には小さな布団が敷かれ、その上に生まれたばかりの妙子が寝息をたてていた。小さな和室で四人で寝ていると、やつと私にも父ちゃんができた、可愛い妹もいるし、母ちゃんの表情も優しくなると嬉しかった。廊下の足元灯が襖の隙間から光を届けてくれる。そのわずかな明かりの中で温もりを確認した。

妙子の父は大柄でがっしりとしていた。建築現場の職人だったからよく近所の家の修理なども気安く請け負い、またたく間に集落に溶けこんだ。酒好きなのは母と一緒に。よく夫婦で居酒屋へ出かけましたが、そんな時に妙子の面倒を見るのも全然、苦でなかった。待っていられることこの安心感の大きさを私は知った。

父は私を可愛がってくれた。

「茉莉子は母ちゃんによう似とる。ごっつかわいい。えら

い美人になるで」

「本当？ 茉莉子、かわいい？」

「ああ。こちらへんじゃ、どこの子より美人やな」

酔って機嫌が良くなると私を膝に乗せては頬にざらざらした自分の顎を擦りつけた。

「父ちゃん、髭がチクチクして痛いよ」

「男なら、みんな鬚があつてあたりまえや。ライオンの雄を見てみい。立派な鬚があるやろ」

「ほなら、父ちゃんはライオンかい」

「そうや。田村の群れを守つてるんや。茉莉子のことも守つてるんや」

妙子の父と一緒にいる時、私はいつもこの人に好かれているといふ喜びの他に体が痺れるような不思議な心地よさを味わっていた。父の胸元からは埃に似た土の匂いと、太陽をいっぱい浴びた強い汗の匂いがし、力いっぱい吸い込むと息苦しいくらい臭い。そんな時、母はたいいてい妙子にミルクをやりながら、こつちを見るような見ないような顔をしていた。妙子の父は自分が生ませた赤子にはまったく興味がないうで、母が風呂に入っているほんの短い間さえ、座布団の上に放つておいた。私はよく妙子の傍らに一緒に転がり、いないないばあをしてやったものだ。血のつながらない自分のことは可愛がつてくれるのに、なぜ正真正銘の子供である妙子には興味が無いのだろう、そう

思った。

父に心底惚れていた母は次の子を欲しがっていたが、その願いが叶うことはなかった。父は妙子が三つの時、家を出て行ったのだ。

母は隣町の工場へ働きに出て、夜はスナックで働いた。人が変わったように怒りっぽくなり、夜半に目を覚まして泣き喚く妙子を怒鳴りつけ平手打ちした。私には妙子の声が泥のように疲れ切った母の耳に障るのだとわかる。

「茉莉子、このうるさいのをどうにかしてや」

母が声をあげると妙子を抱いて、真つ暗なうねうねした農道をひたすら歩いた。泣いて暴れる妙子が落ちないよう必死に抱きしめながら涙をこらえて歩いた。お父ちゃんが自分達を捨てて逃げたからこんな風になってしまったのだ、という恨みの気持ちが涙を生む。暗い闇の中をつんざくような甲高い妙子の泣き声を聞いていると、私のせいで父は家を出ていったのだ、という後悔でいっぱいになった。

母が妙子を疎んじるようになったのは、明らかに父親のせいだ。妙子は顔だけでなく、快活で明るいところも父親に似ていた。私のようにびくびくと行動することがなかった。農道で顔見知りに会うと、遠くから小さな手を一生懸命に振つて、笑顔で「こんにちや」と挨拶する。その人懐こい様子は可愛くて時に妬ましかった。父親が出ていった後も自分を守るように明るくふるまって母親に嫌われまい

とする妙子の姿は健気だった。だが、同じいたずらを私がしても怒られないのに、些細なことでも叩かれてその晩の布団を敷いてもええなかった。

「ごめんさい。妙子が悪かったから謝ります。だから妙子もここで寝る」

薄目を開けると部屋の隅で自分の布団を抱えて丸まって泣いている妙子の姿が暗闇の中に浮かぶ。そんな時、可哀相だと思つても私はいつもより一層びつたりと母に寄つていき最後はしがみついて寝てしまうのだ。朝、起きてみると、泣きつかれた妙子は板の間に転がり自分を守る小鳥のように布団にくるまって眠っていた。

赤い頬に涙の跡がいくつもくつきりとあつた。

狭い風呂場は思ひのほか風呂桶の深さがあり、姉妹一緒に入るのが決まりになっていた。小さな妙子はつま先立ちしないと首が出ないのだ。温かい湯に浸かると体だけでなく心も柔らかく解れて饒舌になる。そんな日は私も姉らしい優しい気持ちになった。

「お母ちゃんは何でうちにきつう当たるんやろ。うちがお父ちゃんに似とるからかな？」

風呂場の姿見をじっと見つめていた妙子がそう呟いたことがあつた。

「あんたお父ちゃんの顔、覚えとるの？」

「覚えとらん。でもこの前、お母ちゃんが言つてた。あん

たはあの男にそっくりやつて」

私は母に叩かれて痣のついた細い腕を見ているのが耐えられず、裸の妙子にタオルをかけてやった。

「妙ちゃんが可愛いつてことや。お父ちゃん、そりゃあかつこよかつたんやで」

濡れた髪の毛を拭つてやりながら鏡をのぞき込む。大きな目が父親にそっくりで、鼻^{ひげ}目^めでなくとも妙子は可愛かつた。

「でも、ごつつ悪い奴やつたんでしよう。お父ちゃん、みんなから預かつた大切な金をぜんぶ持つて逃げたゆうてたよ。最低な男やて」

「そんなこと言うたんか」

妙子が泣きそうな顔で頷く。頬が赤くなつてみるみるうちに涙が溜まって濡れた頬に溶けた。

「お母ちゃん、妙子が嫌いなんやな」

「泣くのやめ。姉ちゃんがおる。姉ちゃんはいつでも妙子の味方やで」

この子には私しかいないのだ。守つてあげようと思つた。私には罪悪感があつた。

五年に一度、集落で行われる盛大な祭りの資金を、母が皆から預かつているのは知つていた。一軒一軒の家を金に回り、父が酔いつぶれた後、よれた札束を几帳面に数えていたのを見ていた。母が決して父の前で札を数えなかつ

たのは何か思うところがあつたからだろう。父は金遣いが荒かった。

あの時、私は十歳だった。父に褒められたい、頭を撫でられたい、この家で常に誰かの一番の特別な存在でいたい、その一心だった。

二階建ての木造アパートは玄関を入って左側にトイレと風呂、右側に納戸があり、そこに我が家の仏壇があつた。古い大きな堂造りの立派なもので、亡くなった父親の位牌が備えてあつた。母は滅多に線香をたかなかつたが、ほんのりとお香の匂いの漂う部屋は嫌いではなかつた。

ある朝、私は奇妙な叫び声を聞いた気がしてふと目覚めた。今冬の雪が近畿北部に夜半から降り注いだ寒い日で、布団から出るとキンとした冷気が全身を包んだ。少しずれた妙子の布団をかけ直してやる。横にいるはずの両親の姿がない。まだ日が昇りきららず、部屋はうつつすらと暗かつた。

「金がない、金がない」

納戸の仏壇の前で母が叫んでいた。仏壇の引き出しの中にあつた薄紫の線香箱が転がっている。

「あいつが盗んだんや」

母は小花柄の寝間着のまま取り乱していた。

「お父ちゃんは、どこ？」

私は母の腕をつかんだ。それだけ言うのがやつとだった。寒さからではない、足元から震えがきて止まらなかつた。

「やられたわ」

母は私の手を振りほどくと、寝間着のままサンダルを脱ぎ捨てて玄関を飛び出した。

昨日のことを思い出しながら、私は呆然と空になった線香箱を見つめた。

昨日の夕方、学校から帰ってきて台所で牛乳を飲んで私の背後に父が声をかけてきた。

「茉莉、ちよつとええか」

「なんや父ちゃん。もう帰って来たの？」

父がこの時間に家にいることは珍しかった。母は妙子を連れて買い物に出ているらしい。現場を抜けてきたのか、父の頭には手拭いが巻かれていた。

「ちよつと内緒話や。こつちこいや」

父は誰もいないのにあたりを見回し、小声で私を手招きして納戸へ呼んだ。

「茉莉は父ちゃんのこと好きか？」

「あたりまえや。大好きや」

「これは内緒話やでえ。ほなら母ちゃんと父ちゃん、どっちが好きや？」

父の言い方がおかしくて私は笑った。

「父ちゃんの方が好きかもしれん。優しいし、お母ちゃんは時々、鬼みたいに怒るやん」

「ほなら父ちゃんの頼みを聞いてくれるか」

句をつけた。

「辛気臭い朝食はまっぴらや。こつちのが美味しいで」

菓子パンをわざと目の前で食べる。そんな妙子を無視して、母は私の皿に妙子の分の卵焼きを載せた。

「なら、これは茉莉子が食べ。イヤな子だね。せつかく作つてやつてるのに」

菓子パンを持つ妙子の手は震えていた。

彼女の大人を手こずらせる行動は母の痲癩の種だった。

素行の悪い男子と遅くまで盛り場をほつつき歩く。スパーで万引きをする。髪の毛を染め赤いルーージュをべったりと塗った彼女は、他人から見ればただ素行の悪い不良娘そのものだったろう。だが私には、何をやっても誰からも愛情を貰えない妹の悲しみが伝わってきて哀れだった。何とか母にこつちを振り向いてほしい。そんなアンビバレントな切ない思いが透けて見えた。

「妹さんの症状は、あえて病名を付けるとしたら軽いヒステリー症状なんですよ。中絶で自暴自棄になってしまつています。ただ、妹さんの精神年齢は十一、二歳くらいから発達してないんですね。決して知能は低くない分、余計に精神のバランスがとれずヒステリー症状が起こるんです」

妙子を診察した医師はそう言った。

「家庭環境はともかく、何か心のしこりがあつて病んでし

「うん、いいよ」

父ちゃんの丸い目をのぞき込んで力強く頷いた。

「お母ちゃんが村から預かつたお金、あれ、どこに仕舞つてるか知つとるか？」

「ああ。あれかいな」

母はこのところ、毎日のように近所を回って金を集めていた。私は指をさした。

「そこや。その仏壇の中の線香の箱に閉まつてるで」

「そうか。茉莉子におおきに」
そう言つて父は私に小遣いをくれた。

ニタリと笑つた父の笑顔を見た時、何か悪いことが起る予感があつた。

仕方ない、子供だったのだ、自分が悪いわけではない。

大人になって何度そう自分に言い聞かせても、罪悪感は消えない。少ない給料の中から仕送りを続けているのは、母への感謝の気持ちもあるが、負い目もあつた。妹に対しても同じだ。

成長するにつれ理不尽に扱われていることに気づきたし妙子は反抗的になった。わざと気に障る言葉を選んで場を乱したり、服装も派手になり、しょっちゅう母と衝突した。忙しい生活の中で朝食だけは母の手作りだった。卵焼きと海苔とみそ汁の朝食だ。そこにどんな思いが込められているのかわかっているはずなのに、妙子はあからさまに文

まい、成長をさまたげている可能性はあります」

家庭環境か……。私は診察室を出ると会計を待ちながら頬に手をあてる。

いつも家の中で、家族の心のカギを握っていたのは妙子の父だった。

あの声、あの顔、あの匂い。膝に乗せられて頬に顎髭を擦りつけられたあの感触が蘇えるたびに、鈍い吐き気を覚えた。

「あいつは最低の盗人や」

母の声を思い出すと自分が汚い生き物のように感じられてたまらなかつた。そんな時は風呂場に飛び込んで急いで冷水を足元にあてた。身を切るような冷たい水しぶきが心を落ち着かせてくれる。痛いくらい冷えた足をバスタオルで拭いていると、それでも自分が家族を不幸にしてしまったのだという思いに苛まれた。幼かつたのだ、と自分の中の誰かが言い訳してくれても収まらない。眠剤を飲んだ。病んでいるのは私かもしれない。

「月に一回でもいいから通院するよう説得してみてください。頑張りましょう、お姉さん。根気よく治していきましよう」

柔らかな光をたたえた目で医師がそう言った時、自分自身が慰められているような気持になつた。私は思わず声が震えそうになるのを抑えて頭を下げた。

ざく切りしたネギを炒める。フライパンから香ばしい香りが漂ってくる。どうしてこんなことをしているのだろうかという気持ちが込みあげてきた。妙子の好きなおかずだ。美味しい物を食べさせてやりたいと思つて買ったのだ。幼い頃、あの子は私の作った料理を「おいしいおいしい」と言つてよく食べた。火を止めた。食欲などまったくなかった。

その晩、拓也のアパートに連絡をした。妙子が戻るところはあそこしかない。しかし戻つてどうなるのか。青年の頼りない正義感だけで解決できる問題ではないことは、よくわかつていた。

「あなたは先日、二度と俺の所へ戻つてこないようにしてくださいって言つたわよね。そこにいるんでしょう？ なぜ一緒にいるの？ 二人は離れた方がいいのよ。とにかく逃げてください。どこか遠くへ行つてしまえば妙子も諦めるから」

「俺も昔の妙子が好きでしたし、俺しか妙子を治せる男はいない気がするんです。もう一回、頑張ってみます」

拓也は堅い声でそうくり返した。

「いいかげんなことを言わないで。あの子は通院もしなきゃいけないし薬も飲ませなきゃいけない。これ以上悪くなつたらどうするんですか。あなたに、きちんと責任が取

二人の生活について真剣に話し合わなくてはならないと、本気で考えていた。同棲を解消させて妙子と共に暮らそう。「テレビでも観て待つてね。急いで買い物に行つてくる」

まずは放心状態の妙子にちゃんとした食事を与えて休ませたかった。

自炊など減多にしないから冷蔵庫は空なのだ。返事はなかったが、すとんと沈み込む様にソファに座つて膝を抱える彼女の横顔は憔悴しきつていた。

だが、とりあえずネギと鶏もも肉と牛乳とトマトを買つて戻つた私は玄関を開けて、そこにあるはずの黒いパンプスがないのに目を疑つた。その僅か数分の隙に、妙子は出て行つてしまつたのだ。

「妙子」

急いで部屋に入ると点けっぱなしのテレビ画面から賑やかなコマーシャルソングが流れていた。ソファの端に、家を出る前に渡したオレンジ色の毛布が丸く高を作つている。微かに人の残像が空気として残つて漂う誰もいない部屋を、私は呆然と見回した。テーブルの上の小皿に入つていた数千円がなくなつていて、それを持つて妙子は出て行つたのだろう。

私は夕飯の支度を始めた。塩コショウした鶏もも肉と、

れるの？」

「なら、お姉さんが責任を持つて預かってくれますか？」

一瞬、言葉につまる。粘りつくような嫌な声だった。何となく、オレはわかつてるんですよ、という妙な裏を感じさせる物言いだ。

「妙子は俺と暮らしたいって言つてます。姉さんとは住みたくないって。田舎にも帰りたくないそうです。すごく反省しているし、精神科の先生も無理して離れる必要ないって言つたらしいし、妙子があなただを拒否してるかぎり仕方ないんじゃないでしょうか」

拓也は時々声を震わせながら、勝ち誇つたように言つた。「わかりました。持たせている薬は必ず飲ませてくださいね」

電話を切つた。

先生が離れる必要がないなどと言うわけがない。自暴自棄になつた妹を宥めるために適当に言つた言葉を、妙子が都合良く利用しているのだ。しかし、今の二人には何を言つても無駄だろう。

キッチンで湯を沸かす。電動ミルでコーヒー豆を挽き、ドリップする。と、と、と、というコーヒーが落ちる音を聞いていても、私の不安は膨れるばかりだ。これが正しいことだろうか。妹を見捨てるようなことをしていいのだろうか。

きつと何かもつと、悪いことが起こる。

淡々とした地味な生活を東京で続けてきた。これまで異性と付き合ったこともない。

片親だという家庭環境は劣等感を与え、私を好んでくれる男性が現れても素直に飛びこんでいくことができなかった。母のように男に捨てられるかもしれない。ある時、父なし子を身ごもるかもしれない。

「ええな、茉莉子。男なんて信じたらあかん」

東京に発つ前に母の言った言葉が纏わりついていて。それだけでない。「茉莉子は将来、ごつつ美人になるで」という父の声が蘇ると何かもいやになるのだった。

結婚などするものか。そう思って生きてきた。

私の不安は一ヶ月も経たないうちに的中した。

その日、勤務を終えてアパートに戻った私は、暗がりのドアの前にしゃがみこんでいる妙子を見つけ、走りよった。きちんと薬を飲んでいいのか、病院に通う気はあるのか、会ったら必ず聞かなければと思っていた言葉の数々が喉元まで一気にこみあげてくる。

「その血どうしたの」

白いセーターの腕の部分に、赤い染みが丸く円を描いている。顔色は紙のように白い。右手の指にも絵の具のよう

な血の固まりがついていた。

「姉ちゃん、拓也に逃げろって言ったね」

しゃがみこんでいた妙子はのろのろと立ちあがると、低く叫んだ。

「あたし知ってるんだ。拓也と姉ちゃんが連絡取り合ってるってこと」

「彼は、どこにいるの。アパートを出て行ったの？」

「そんなの姉ちゃん知ってるやん。姉ちゃんが逃がしたんやろ。あたしは合鍵を持ってないから、裏庭の窓を破って部屋に侵入したんだ。タンスの引き出しから何からせーんぶひっくり返してメチャメチャにしてみた」

興奮のせいとか、ところどころ言葉に詰まりながら妙子は唇を歪めて話す。

「姉ちゃん、嬉しいでしよう。また自分の思いどおりになったもんね。姉ちゃんは、いつもそうだったやん」

「何を言ってるの」

「私を心配するふりをしてるだけで、陰でこんなことして。ひどいじゃない」

妙子が金切り声をあげはじめ、私は急いで妙子の腕を引っぱって玄関に引き入れた。

「あいつを返して。どこに隠してるの」

興奮した妙子は私の手を振りほどき、強く胸を押す。私は動悸を押さえた。

「彼は逃げないよ。いまごろ泥棒が入ったのかと思って、びっくりしてるよ」

買い物袋を上がりがかまちに置くと、ドアを開けて外へ出た。

「嘘つき嘘つき」

「アパートに戻るわよ」

私は血で汚れた妙子の手をかまわず掴むと道路へ飛び出した。タクシーを拾い、すさまじい状態に陥っているであろう拓也のアパートへ向かった。車の中では私達は一言も口をきかなかつた。妙子は渴いた涙の跡を私に向けたまま、むっと陰気に押し黙っている。私は、流れ去る窓の外の景色を、まるでちがう世界の絵のように遠く感じながら見つめていた。

タクシーを降りて拓也のアパートの前まで行くと、微かに明かりの漏れた扉の向こう側は不気味なくらいシンとしていた。おそるおそるノブを回すと、鍵のかかっていないドアはカチリと音をたてて簡単に開いた。

「いよー、お帰りなさい」

奇妙なくらい明るい声だった。部屋は、瓦礫の山のようにひっくり返っている。造り付けのクローゼットの取っ手が外れ、開いていた。フロリングはいたるところが傷ついている。妙子が裂いたのか色とりどりの布の切れはしが

散乱しているその中央に、どっかり胡座をかいて座りこんだ拓也は、カップ麺を食べながら妙子と私を睨みつけた。割れた窓から入るすうすうする秋の風が粗末な洋服の切れ端を揺らしていた。

挑発するような笑顔を浮かべた妙子が、玄関に脱ぎ捨てられた汚れた靴を蹴飛ばす。微かな音をたてて宙を舞うと、それは狙ったように拓也の肩に当たった。

「いてえな」

まるで妙子は水を得て生き返った魚だった。そしてまた拓也も緩んでいたネジが巻かれたように生き生きと怒りて目を光らす。

靴を脱ぐのもどかしく、私は部屋に飛びこみ妙子の身体にしがみついた。拓也の方へ向かおうとしていた妙子がよろけてひっくり返る。

拓也が麺を口元に垂らしたまま笑った。

「お姉さん、どうぞ中へ。こんな汚いとこっすけどね」

カップ麺の塩辛い匂いに混ざって強いアルコールの香りが鼻につく。

「あなたの妹が、こんなにしちゃったんすよ」

「うるせえ」

床に転がった妙子は、立ちあがれないまま両手を激しく動かしたり次第の周りにある物を青年に投げつける。拓也がゆっくり立ちあがった。引き寄せられるように二人

の距離が縮まったかと思うと、拓也の手が妙子の頬を殴りつけた。妙子がやり返して殴り合いが始まる。次第に拓也の方がひどく殴り続ける。

「殴れよ。もつと殴ればいいだろう」

だんだんと気の遠くなるような目の前の騒ぎを眺めているうちに、われに返った。あたりを見まわす。台所のガス台においてある空の鍋に気づいた。水道の水を入れた。

「いいかげんにしなさい、あんたたち」

二人に向かつてひっかける。塊は「わつ」と二つに分かれ床を転がった。起きあがるうとした妙子に空の鍋を投げつけた。

土足で侵入した妙子の靴跡が点々とし、タンスから引っぱり出された衣服はずたずたに裂かれ、破いた紙が散乱し、その上に雨が降ったような水びだしだった。小さな庭に面した窓が割られ、その周辺が、ガラスの破片でキラキラ輝いている。そこから澄んだ夜の空がぼっかり見えた。

二人共、濡れネズミのようになって部屋の隅に縮こまって震えている。

「弁償しろよ。あの窓ガラスと洋服代もな」

拓也が前髪から滴を垂らして妙子を睨む。

妙子は頬を抑えて押し黙ったままだ。

「弁償は私がするわ。妙ちゃん、もう充分。帰りましょう」

「いや。帰らないよ」

妙子は言った。どうでもいいような淡々とした口調が逆に心の悲鳴に聞こえた。

何を言いたいのかわかっていたから、私はあえて気づかぬふりをした。

「なに言うとのん。あんたと母ちゃん、人好きする明るいところなんてよう合うで」

「合わんわ」

「そんなことない。声が明るくて二人で喋っていると姉妹みたいやん」

「ちよつとやめてや。あたし、あんなおばさん声してないでえ」

妙子の声が少し明るくなる。私は冗談ほく言った。

「あれでも若い頃は鈴を鳴らすようなきれいな声やったんやで。今は酒焼けでガラガラになったんや」

「あの声、おかまと同じや」

ほんまやと、二人で声を揃えて笑った。久しぶりだった。「もうお母ちゃんにはあんたしかおらん。二人で仲良う暮らしや」

妙子が行かないで、と言いださないように先手を打った。虚を突かれたように口ごもる彼女の目を避け天井を見あげた。

「この電灯は置いてくから、ここをあんたの部屋にしていよ」

私は、今にも自分の気が狂いだすような気がしてきしんだ声をあげた。

「いい加減にしなさい。妙子は病氣。治療しなくちゃダメなの」

「こいつは病氣じゃなくて、こういう性格なんですよ」

「そうだよ。あたしは病氣じゃない、姉ちゃんの所には帰らないよ。あたしを病人扱いして病院へ押し込む気でしょう」

「正気になりなさい。妙ちゃんは小さい頃からこんな子だったっていうの？ 違うでしょう」

私は地団太踏みたいたい思いだった。この歪んだ精神はどういうことだろう。小学生から成長してないという、哀れな精神が無防備に晒されている。妹が十一歳の時といえ、ちよつと私が東京へ出てゆく頃ではないか。

「私を置いていかないでよ」

彼女は全身でそう叫んでいた。あの家に妙子を残していけば、母のサンドバッグとなってボロボロになるのはわかっていたので私は上京したのだ。あの時から、彼女は成長を止めたのだろうか。自分を守るために。

東京に行く数日前に私の部屋に妙子が入ってきた時のことは忘れられない。

「姉ちゃんとお母ちゃんは相性がいいから羨ましいわ」

すつかり片付けられた殺風景な部屋を眺めまわしながら、

それは私が高校入学の時に大型量販店で購入したチューリップの形を模った可愛い電灯で妙子が羨ましがっていたのだった。

ようやくこの家から解放されるのに、妹に懇願されてここで足止めを食らうのは真つ平だった。何も言えなくなった妙子が俯くと、外にいる雀達の鳴き交わす声だけが愛らしく響いて、いたたまれなくなってしまうのを覚えている。

「妙子、帰れよ。俺達もうだめだよ」

拓也の声が現実に戻ってきた。

「いやだよ。ここから追い出されたら死んじゃう」

妙子はぐずぐずと泣きだしている。

「もう二度とこんなことしない。弁償もする。ちゃんと働かし、病院にも通うよ。お願いだから、帰れなんて言わないで」

みつともないくらい涙を垂らしながら、彼ににじり寄り懇願している。

捨てられかけた犬が必死で主人にすがりつこうとしている哀れな姿だった。ここまでプライドを失くしてしまっているのだ。この子はいま彼と引き裂かれたら本当に死ぬかも知れない。

その時、拓也に純真な心が蘇ったのか、

「わかったよ妙子。ひどいこと言っておれも悪かった。ま

た二人でやっていこう」

と折れそうな妙子を抱きしめたのだ。

そのとたんに自分は解放されるかもしれないという途方もなく魅惑的な考えが浮かんだ。これで帰れる。

そしてその思いはすぐに打ち砕かれる。二人は濡れネズミのように震えながら抱き合っただして泣いていた。拓也の足に破れたシャツが絡みついている。妙子のブラウスの袖口は血で赤く、二人の髪の毛からは雫が垂れて床を濡らしている。こんな状態でどうやって二人でやっていけるというのか。続くわけがない。また同じことを繰り返すだけだ。

けれど私は身動きせず二人の姿を見つめていた。どうしていいのか、誰かに教えてほしかった。すがりついて、この地獄から救い出して欲しかった。

助けがいるのはこの私だ。そう思っ立ちすくんでいた。

アパートの留守電に奇声や鳴咽が入っている。携帯の留守録に無言のメッセージが続いている。それでも私は二人の所へ行くことはなかった。心の奥底に、どうにもならない投げやりな気持ちと勇気のない、突き放す冷めた思いが沈んでいて、それが気を許すと、ふっと心の表面に浮かびあがってきた。私は、夜半ベッドに入ると考えこんだ。考えることで助けていることにしようとした。

うたくさんだ。私は頭を振った。自分が悪いことをしたという思いにずっと苦しめられてきた。こんな思いを断ち切りたい。

「妙子」

思わず呼んでいた。どうしているのだろうか。

冬の風が次第に枯れはじめた三月初旬、儚い影を引きずって拓也がやって来た。

「もう駄目です。今度こそ本当に駄目になりました。俺は逃げます」

彼の声は疲れきっていたが、その奥には、まだ、若さが持つ残酷な力があつた。

「これ彼女の荷物です。全部、入ってますから」

青いハート模様の散らばった女性用スポーツバックを私に手渡した。

驚くことに、地獄のような生活を二人は数ヶ月も続けていたのだ。

「妙子はこのことを知ってるの？」

「どこかに行っちゃいましたから、さようならのメモ書きを残してきました。あいつ最近、夜中に外に飛び出すようになつたんです。道路に寝転んでわめいたり警察に補導されたこともあります。俺といるとんどん駄目になるんです。俺自身も駄目になります。限界なんです」

私の夢見はだいたいにおいて悪かった。

「茉莉は父ちゃんが好きか」

「うん。大好きや」

私は、父の膝の間にすっぽり納まるくらい小さな子供だ。

「母ちゃんと父ちゃん、どっちが好きや？」

「父ちゃんの方が好き」

その言葉は半分はおもねりで半分は事実だった。本当の父がなくなつてから母が連れてきた男達は、どの男も皆、私を邪魔者扱いした。こんな風に優しく頬を撫でてくれる人はいなかった。

妙子の父は太い腕に私を軽々と抱え、その広い胸に私の背中を押しつけ体を揺らす。

まるで揺りかごのようだ。大きく、暖かい、私の揺りかご。妙子の父親の体が、大きく揺れる。それと一緒に小さな私の体も揺れる。上下にゆっくり、前後にゆっくり。父ちゃんのチクチクした頬が、私の柔らかい頬に触れる。

「ほなら、父ちゃんの頼みを聞いてくれるか」

「うん、いいよ」

「茉莉子、おおきに」

そして私は大声をあげて飛び起きるのだ。

雨で打たれたように冷や汗で濡れた体。心臓が、破裂しそうに波打っている。

なぜいつまでもこんな夢に追いかけられるのだろうか。も

上着のポケットから、くしゃくしゃによれた葉袋を取り出して差し出した。

「とうとう飲みませんでした。私は病気じゃないからって言って」

くたくたになつた精神安定剤の葉袋を見つめた。

私は病気じゃないから――。

確かに彼女は傷ついてはいても病んではいないのかもしれない。自分の思いを真つすぐに他人にぶつけているだけなのだろう。

「妙子、昔のお姉ちゃんが大好きだったって言っていました。あいつを助けてやってください」

拓也が去って行った後、妹を助けない、という切実な思いが初めてわいた。

窓の隙間から冷たい夜風がしつこく入りこんでくるアパートで、嵐が過ぎるのをじつと丸まって待ち続けている自分は正常なのだろうか。あの家で大人の顔色ばかりを気にしてうまく立ち回ることだけを考えて生きてきた。姉としての責任感を感じるふりをして、自分の身を守ることを優先したのだ。

寒々とした夜空の下、妙子はどこをほつき歩いているのだろうか。骨ばかりに痩せた身体を丸めて、途方にくれた子供のようにうろろ歩く姿が浮かんだ。

妙子が自分を訪ねてくることを祈った。とり返しのか

ないことが何か起こるのだったら、それは二人だけで処理したかった。私も妹もこのままでいいわけはないのだ。覚悟ができている。それはいつか清算しなければならぬ過去の日々のような気がしていた。

妙子が私のアパートにたどり着いたのは翌朝、まだ夜の明けきらない頃だった。目は落ちくぼみ、寝不足の白目は真っ赤だった。まさにたどり着いたという表現がぴったりだった。

「拓也がメモを残して出て行ったよ。スマホも捨ててあった」

私が玄関を開けるなり、切りつけるように彼女は言った。「あいつ、ここに来たでしょう」

どんよりと濁った目に怒りの光が生まれて輝きが増してくるのを、ぼんやりと眺めた。こんな目をいつかも見たことがあるような気がする。いつだったのだろうか。

「来たよ。姉ちゃんが逃がしてあげたの。荷物もここにありよ」

玄関の靴箱を開け、青いスポーツバッグを出した。

「殺してやる」

あつというまに髪の毛を掴まれ突き倒される。いとも簡単に私達は玄関に転がった。弾みで廊下の奥へ飛んだスポーツバッグがリビングの扉にぶつかって鈍い音をたてる。

私は両手をついてよろけながら立ちあがった。まだ耳が痺れて自分の声がエコーがかかったように遠かった。

「それで救われるならそうしなさい。私はね、あなたをあの男に押し付けることだってできたし、その方が楽だった。でももう逃げないよ」

「ふざけないで。あなたのいい子ぶりっこもたいがいにして。ばからしい」

「姉ちゃんはないなあ、もういい子ぶりっこに疲れたわ。だから最後はこういう死に方でもええな思うわ」

声をだして笑った。いつの間にか久しぶりに方言が出たのが不思議だった。

「笑わないでよ」

妙子が気色ばんだ。

「かっこつけちゃって。怖いんでしよう」

「怖くないよ」

自分に言い聞かせるように言った。今まで逃げてばかりいた。それでは何も終わらないのだ。その場しのぎの言葉が発してうまくやり過ごしたつもりでいても、何も変わらない。

本当は妙子が羨ましかった。母に叩かれても疎まれても真正面から愛情を貰いに向かってゆく。泣いて叫んで母を乞うそのひたむきさに憧れた。

「あんなにかいらない。さいなら」

それを横目で確認しながら、私は妙子を見た。とたん、彼女は私の顔を力一杯、平手打ちした。眼球がひっぱられると思った瞬間、間髪を入れずに滅茶苦茶に掌がとんできた。私の目が叩かれるたびにその場所へと引つ張られ、元に戻るまもなくまた引つ張られる。

激痛に涙が滲んだが抵抗しなかった。耳の奥が痺れ、胃の奥から鈍い吐き気がこみあげたが、それでも妙子の下でされるまま頬を向けていた。

「ねえ、なんでよ。何で逃がしたの」

視界が赤く染まり、半ば意識が遠のいた時、突然、放り出すように妙子が離れた。

「ここで捕まえておけばよかったのに」

「そんなこと不可能でしょう」

私は熱棒を押しつけられたような頬に手をあて、ふらふらと上半身を起こした。口の中がしょっぱいのは血の味だろうか。バッグに当たった衝撃でリビングのドアが少し開いている。中から明るい光が漏れてくる。

気がつくくと、彼女の手先に刃先の尖った果物ナイフが握られている。拓也を半ば脅迫しながら自分の手首を何度も切りつけたであろう小ぶりのナイフは、一突きで致命的な傷を与えることはないにしても、興奮して何度もつき刺せば充分に人の命を奪いそうな凶器だった。

「殺してやる」

妙子が一歩進んで叫んだ。悲鳴のような声だと思った。ああ、こんな声を聞いたことがある。確か七年前だった。

七年前のあの日、高校の卒業式の翌日には東京行きの切符を握りしめていた。

「茉莉子、体に気いつけや。東京は怖いとこやから用心するんやで」

名残惜しそうに私の手を握り、皺だらけの指で私の手の甲を撫でていた母の後ろで妙子は憎しみを凝縮させたような目をしていった。

「メールするから返事ちょうだいね」

「いらんわ。ヒマないし」

「この子は、なんでこんな時でも優しい言葉一つかけれへんのやろ。たった一人の姉ちゃんが遠くに行つてまうんやで、なんで、元気でねって言えへんの」

母親が呆れ声を出す。

「ショートメールでいいから。それに姉ちゃん、しょつちこつちに帰つてくるよ」

私が微笑んでも妙子は睨んだままだった。

その絶望に似た目の持つ意味に私は最後まで気づかないふりをして電車に乗りこんだのだ。

「さいなら」

妙子は投げ捨てるように言うと、道路の向こうへ消えて



小松原 蘭
こまつばら らん
東京都生まれ
1970～80年代小・中・高を韓国とエジプトで過ごす
海外帰国子女
学習院大学文学部哲学科中退後、
東京大学、慶應義塾大学、医科
歯科大学などで秘書として働く
2018年より「遠近」同人
趣味は読書、映画鑑賞、ゲーム



しまった。
あの時の声、あの目は今とそっくりだ。
「姉ちゃんは、病院へ入れたかったわけじゃないよ」
「言い訳すれば、あたしの気が変わると思ってる？」
妙子は小さな戸惑いを警戒心で覆い隠すような薄笑いを浮かべている。
「妙子は中絶した自分を責めすぎちゃったの。それで心のバランスを崩してしまったのよ」
「拓也、姉ちゃんにばらしたのね」
「相談してくれればよかったのに」
「嘘ばかり。あんたが味方してくれたことがある？」
ナイフを握りしめた妙子がまた一歩、近づいてくる。彼女の身体から発している熱が伝わってくる。力を入れすぎたために白くなった指先が微かに震えている。いまにもその刃先が私の体にめり込みそうな気がする。
けれど、血の気を失って青くなっているのは彼女の方なのだ。
「そうだね。妙ちゃんは私の本心を見抜いていたよね。でも私はずっと自分がイヤだったんだよ。だからお姉ちゃん、自分を変えたいのよ」
いつの間にか妙子の目から涙が溢れていた。
「姉ちゃんを好きになってとは言わない。一緒に病氣と闘おう。頑張れば、病氣も必ず治るよ」



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」
タイ・カンボジア国境の難民村、
炸裂した砲撃で黒焦げになった数多くの死体が散らばっていた。
健友館

カンボジア難民の悲劇を描く
本体価格 1,700円
御注文はアジア文化社まで

小説を深く読む
多くの読書遍歴
三田 誠 広

志賀直哉◎『小僧の神様』
川端康成◎『伊豆の踊子』
梶井基次郎◎『檸檬』
大江健三郎◎『万延元年のフットボール』etc.

芥川賞作家が自身の人生を振り返りながら、
名作小説について語る読書エッセイ
小説というものがあつたから、
ぼくは小説家になつた。

定価 本体 1,000円＋税
海電社

「もう遅いよ」
妙子の声は激しく震えて、こぼれた涙がほとんど床に落ちた。
「私は治らない。これで終わりだよ」
「そんなこと言うたら、あかん。病氣なんて、姉ちゃんが治したるから」
ナイフを握り、顔中濡れてるのにも気づかず途方に暮れたように佇んでいる小さな妹の顔を見つめた。いつの間にか私も泣いている。溢れる涙と一緒に心の底にずっと詰まっていた頑ななものが柔らかく溶けて流れていくような気がしていた。
長いこと自責の念に苦しめられてきた。傷ついた妹と自分の本当の心と向き合うことで、陰鬱な子供時代に別れを告げたかった。
今、ようやく救われるのかもしれない。まずは妙子と真剣に向き合ってみよう。自分を慕って「おねえたん」とついて歩いてきた幼い頃の妹と私のように。
「がんばるや妙子」
いせんとして刃先をむけている妹に言った。
「私らは幸せにならなきゃあかんのや」

「季刊遠近」72号より転載



「私小説千年史」出版記念会に参加した人々

表紙は、当時現代美術家協会の代表であった難波田元氏が船出へのお祝いとして描いてくれたもので、以来季節ごとに色を選んで使っている。

二年目の九八年、六号で「久保田正文研究」を特集。紅野敏郎先生が御寄稿下さったり、大正大学の小嶋知善先生が久保田先生の正確な著作目録を作って下さった。何より話題を集めたのは、先生が七二年に冬至書房から出された小説「冬のランプ」を転載したことで、各方面から思いがけないほど注文が来たのには驚いたものだ。

米寿のお祝いの後間もなく病に倒れてからも、先生は病床から毎回作品の批評を書き送って下さった。同人たちは合評会の度に先生から送られて来る温かい手紙と厳しい批評文によって、どんなに励まされたかしのれない。二〇〇一年の六月、そんな久保田先生がついに亡くなり、九月に出た一六号は追悼号となった。

その後を引き継いで、「遠近」の面倒をみて下さることになったのが、勝又浩先生である。勝又先生は当時まだ法政大学で教鞭をとっておられたし、文芸評論家としてもお忙しかったが、恩師であった久保田先生の推薦でもあり、同人からの熱心なお願いを断り切れずに応えて下さったのである。お忙しい中、今も三か月に一度くらいの割合で「遠近」の例会に参加して下さい、作品の批評その他色々指導をいただいている。

季刊遠近 神奈川県

本気で文学を学ぼう

「季刊遠近」は二〇二〇年三月に七三号を発行したが、創刊は一九九六年一月である。

確かあの年もネズミ年だった。そしてその頃、私たちを指導して下さいた文芸評論家の故久保田正文先生もネズミ年だった。発足の時、こんな偶然を面白がったのを覚えている。

それまで「よんかい」という同人雑誌を出していた仲間が、声をかけ合って集まったのである。中には短歌や俳句を楽しんでいた人もいたが、この雑誌は小説と随筆、評論等、散文に限ろうということになった。いわゆる文学好きの仲間が集まるサロンのような場ではなく、本気で文学を学ぼうという仲間の真剣な研鑽の場にしようではないかという意気込みだったのである。内容は公序良俗に反しない限り、どんな思想を盛り込んでもよいが、あくまでも人間を追究するものでありたいというのが、同人たちの熱っぽい理想であった。

「遠近」という誌名は、久保田先生が考えて下さったもので、今でも私たちは先生の遺産として誇りに思っている。



招待客を迎える勝又先生

勝又先生のご著書は数多いが、やまなし文学賞を受賞なさった「中島敦の遍歴」や和辻哲郎文化賞を受賞された「私小説千年史」は記憶に新しい。また水声社から出版された「山椒魚の忍耐」は、井伏鱒二生誕二二〇年、没後二五年を記念する興味深い本である。

ご執筆のほかにも、一九九一年から二〇〇八年に同欄が廃止されるまで、大河内昭爾氏らと「文学界」誌の「同人雑誌評」を担当されていた。またこの時の四人の担当者を中心に、同人雑誌と文壇を繋ぐパイプとなることを目標にした雑誌「季刊文科」を一九九六年に創刊、今日に至っている。

現在「遠近」の正会員は一四人、購読会員は一六人である。「季刊」と謳ってはいても、実際には年三回しか出ない年もある。が、月一回の合評会は休まず続けている。原則として毎月第一土曜の午後一時、場所は都営新宿線船堀駅前の「タワーホール船堀」(江戸川区船堀四・一・一電)話〇三・五六七六・二二二一)の会議室である。少々の雨なら傘が要らないという便利な場所だ。会の後は同じビル内の和食レストランで会食を楽しんでいる。

会費は、正会員が年三万円、購読会員三千元、作品掲載料は一ページ一四〇〇円。事務局がしっかり管理してくれている。

同人の活躍について述べれば、二〇一八年に河村陽子が

水声社から作品集「林」を出版したのを初め、花島真樹子が鳥影社から「忘れられた部屋」、木野和子が鉾脈社から「おじよん」を出版。難波田節子は「雨のオクターブサンデー」「晩秋の客」(鳥影社)「太陽の眠る刻」(おうふう)その他を出版している。なお「季刊文科セレクション」大第一集には、難波田節子の「紅い造花」が、第二集には花島真樹子の「鏡の中」が掲載されている。

今回「全国同人雑誌優秀賞」に選ばれた小松原蘭は、過去「よんかい」や「河」に多くの作品を発表しており、「遠近」にも瀬良有爲子というペンネームで書いていたが、育児のために一時退会、一七年に復帰、「川向うの子」「西大門」、「SPARROW」ほか、各号にユニークな作品を発表して注目されている。今後ますますの飛躍を期待できる作家である。

(文責/難波田節子)

遠近の会

TEL 045-904-0245

神奈川県横浜市青葉区荏子田一・三四・七

江間方

TEL 045-904-0245



歓談する会員

雨のオクターブサンデー
難波田節子

一人の人間として作者はやはり、何処かでこの世の生、全ての人間たちと和解したいのだ。そこが、言うならば、この作者の本質的に優しいところ良いところ、そして誰もが安心して読めるところに違いないのである。

文芸評論家 勝又浩

2020年3月20日発行 (第4期発行) 第73号

季刊 遠近

第73号